

人は理性と真理と希望につらなる
未来を求めてやまない——

天上界 メッセージ集・続

千乃裕子 / 川編集部編

天上界メッセージ集・続 インターネット公開版

昭和61年 1月22日 初版発行

昭和62年 9月15日 第二刷発行

編者 千乃裕子
J I 編集部

平成17年 5月 5日 電子書籍作成

平成18年 1月 3日 最終更新日

作成者 エルアール出版
(旧シェイイ出版)

“天の証”の虹を観測に来たUFOの写真集

天上界により一九七八〜七九年にかけて出された“天の証”の虹月暈と日暈の实在をUFOの飛来によって証した写真集です。

①1979・7・10・0..15ころ

大田区鵜の木2丁目三浦慎三様撮影(以下6枚)



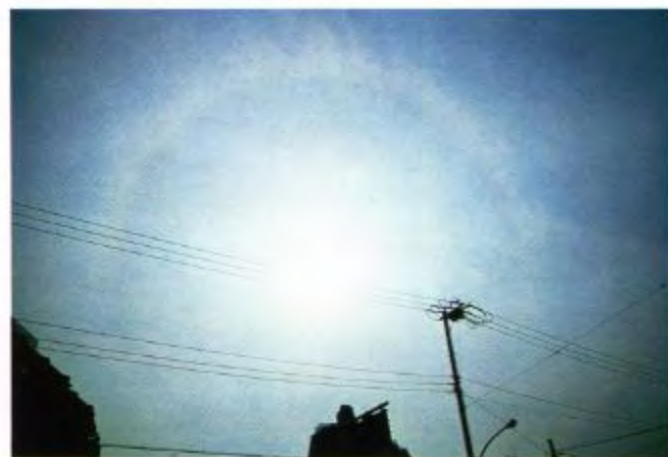
②1979・9・5・12..16ころ

文京区小石川3丁目



③1979・10・26朝8..50〜9..00

文京区後楽園、小石川間





④1979, 10, 26朝 8:02
田園調布駅にて



⑤1979, 10, 27昼
11:55-12:00
文京区小石川3丁
目6-14



⑥1979, 11, 2夜
21:15~45の間
新宿区神楽坂



④ 1978・10・14夕

横浜市港北区仲手原



⑤ 1978・11・夕

横浜市港北区仲手原



⑥ 1978・12・夕

横浜市港北区仲手原

人は理性と真理と希望につらなる未来を求めてやまない――

天上界メッセーヂ集・続

千乃裕子／J-I編集部編

ジェイアイ出版

▽目次▽

口絵 天上来の方々のプロフィール 『天の証』の虹を観測に来たUFOの写真集 「天の証」の写真

『天上来メッセージ集・続』 発刊によせて 西澤徹彦 3

第一章 天上来からのメッセージ

天上語によるメッセージ 13

『天国の扉』より サリエル 13

『天国の証』より ミカエル 17

『天国の光の下に』より ミカエル 23

『天の奇蹟(上)』より ミカエル 31

『エルロイ(天使の智恵)』より ラファエル 34

『J I』掲載メッセージ 41

一九八四年七月号～一九八五年八月号まで

ラファエル 41 45 50 51 52 55 56 / ガブリエル 46 / ミカエル 43 44 48 53 / ウリエル 47

テープに録音されたメッセージ(現象テープより) 59

正法基礎講座 ミカエル 59

魂の研磨について ガブリエル 79

再び愛について ミカエル 86

第二章 天使の詩——日英対訳

正法流布について
メッセージ
イェス・キリスト
ガブリエル
92
96

99

永 遠	Eternity	ガブリエル	102
天使の誓い	An Angel's Pledge	ガブリエル	104
無 題	Untitled	ミカエル	108
光	Light	ミカエル	112
日時計	Sundial	ウリエル	114
カナリヤ	The Canary	ウリエル	116
追 想	Reflection	ラファエル	120
ミカエル大王賛歌	A Hymn to Michael the Great	ラファエル	124
幻 想	Vision	ミカエル	126
二十一世紀	The Twenty-First Century	ミカエル	130
天の羊飼	The Shepherd of Heaven	テリエル	136
救 い	Salvation	ラダエル	138
蘇えり	Return to Life	テリエル	140
若き人々に勵むこの言葉	Words of Encouragement for the Young	ラファエル	144
使 命	Mission	千乃裕子	145

第三章 天の証

151

二十世紀の七天使	西澤徹彦	153
歴史に顕われる七天使	西澤徹彦	159
フランスでの七天使	西澤徹彦	167
イエス様は何故苦痛なく昇天なされたか？	千乃裕子	175
イエス様は何故苦痛なく昇天なされたか？	高野信義	178
「トリノの聖骸布」への疑いと反証	千乃裕子	181
十字架上の死及び復活を示す「聖骸布」実験に 先がけてのヒントと解答	千乃裕子	183

第四章 正法

189

天国と地獄はどのようにして作られたか	千乃裕子	191
アガペーの愛について	千乃裕子	199
現正法理論とは（概論）	岩間文彌	209
天上界の御助言による用語解説		225
テーマ別索引 1		232
テーマ別索引 2		230

絵 土田展子

カラー写真 石崎 正・三浦慎三
注・本書に出ています『慈悲と愛』誌は、一九八三年
三月号より『J-I』に改題致しました。

第一章 天上界からのメッセージ

天上語によるメッセージ

“エル・ランティ様への誓いの言葉”——サリエル

エル ヤーウエ ヘルナ エル シェホーヴァ ヘルナ リビラ ケラセナ エル・ランティ

EL YAUK WKIVA EL JKHOVA WKIVA LIWILA KELACEVA EL LAVTE

ヤーウエであり、エホーンであり、全能の神であるエル・ランティ様

エル ケラ デセル メレネヤ

EL KELA DE CEL MELEVKYA——

貴方の徳は世界に広められるでしょう。

エスケラ ヘル エルナ セリア シェリナ ナ ヘルナ メルティローネア クリアヘル エラ テーレア セア

ESKELA WKL ELVA CELIA JELIVA VA WKIVA MELDILVEA KLIAWKL ELA TLEA CEA

貴方の七人の使の一人として、また、今生におおては、貴方の後継者として送り出された私は、貴方の御意志を継ぐべ

エスケルテス　メスレヤ　マーレクデーネア

ESKELDES MESLEA MLEKDVENA ——

正法を全世界に広めるべく、努力いたしましょう。

エリメル　ミカエル　デル　ラーダナ　エル　ジェリナ

ELIMEL MIKAEL DEL LAADAVA EL JELIVA

ここにいられる、ミカエル大天使長様も、

ケーリマ　デル　ミリーオ　エル　ダイレーネア

KALIMA DEL MELIO EL DILVENA

貴方の後継者を助ける者として

メラネ　セア　ミルデア　ベル　デル　ラーダナ　トレア　ウルケーレマ

MELAVE CEA MILDEA WRL DEL LAADAVA TOLEA ULKLEMA

私が人びとに正法を広めるにあたり、その大いなる力を貸し、智恵を与え、

ケーレア　セル　マデ　セクテア　ベルドーレア　ナメル　セレダイナ　ペクア　ポーレア

KALEA CEL MADE CEKTEA WKIDOLEA VA MEL CELEDIVA PEKUA POLEA

そうして、この地球上の全人類が、貴方の御意志を継ぎ、平和な世界を築く日まで、共に努力しましょうと、

セル トリア セア ヘルデーリナ デル エリア
CEL TOLEA CEA WKLD^ワLIVA CEL ELIA——
私にたく約束なまじったのです。

ソリーマ エルデ ヘルテレウナ モーデルカ エム セケア デル ボイレア エス レウベナ
SOLIMA ELDE WKLTELEUVA MODELKA EM CEKEA DEL WOLLEA ES LEUWEVA——
貴方のお言葉どおりだ、すなへてが実現するから、天上界の方々も心を一つにし、力を合わせて、その日のために働くことを約束なまじった。

トリア オル ケーメカ セク デーセア ドーリア
TOLIA OL K^ケMEKA CEK D^デCEA D^ドLIA
どうか、私が地上の人びとに、貴方の御意志を伝え、

メル トリア エル ヘルナ トル ヘルナ ケル ヘルナ オーレア セム テーレア ベス デル ユーロナ
メル デ ケル セア セク ボイテア エル トーメク デル エリア
MEL TOLEA EL W^ワLIVA TOL W^ワLIVA KEL W^ワLIVA OLEA CEM T^テLLEA W^ワKS DEL KOLO VA
WK^ワL DE KEL CEA CEK WOITEA EL T^トMEK DEL ELIA——
その人びとが、自分達の幸福は何であるか、目覚める時が、寸時も早く訪れますよう、貴方の光りと、恵みと、守護を、
世界中の人びとにお与え下さい。

——ペー・エルテ星の言葉にて——

メツセージ　　ミカエル

エル　キルレア　ユス　テスセステ　レナ
EL KILREA ES TESCESTE LEVA——

汝等　地に住める人々よ。

セス　テニアク　メレデア　テム　エーテルカ　メーデレイヤ
CES TELEAK MELEDEA TEM ETELKA MEDELEIYA

我等　この地に来たり、治めてより一万年、

セステ　ウーレウナ　セレア　エム　テルメテレア　レウナ　エヤムレテ　ペルメテセル　テセル
CESTE ULEUVA CELEA EM TELMETELEA LEUVA EYAMRETE PELMETECCEL TCECEL
遂に今日の審判の時を迎えらるに至る迄、長き月日、

テーレウナカ　セム　テニアム　スローネイア　エムテセア　ナム
TLEUYAKA CEM TELEAM SROVEIA ENTTECEA VAM
我等と共に在りし人々、あるいは亡き人々と、

ペネポイロイカ セルテク テム ホーペテムカ テンア テムセ
REVEROROKA CELTEK TEM C³RETEMKA TELEA TEMCE——
我は今より後も 変わらざる誓わん。

ペーレプア サムテ ケア セムテパム オイオロイオイナ
PELEPUA CEMTE KEA CEMTEHEM QUQVA——
必ずや美しき平和を来らせんと誓わん。

ペンアムテ ペンス テム テク プレペレホス トーマイオス エレナーレア テムペレスト
PELEAMTE BELES TEM TEK P³RELEHROS TOMEOS EIE VAALFA TEMRELESTO——
されど汝等 この美しき地を愛し、大空を愛し、大海(みぎうみ)を愛せるなりや。

ペク ホロアセム テーレアク プレツテライム セア ネル
PEK BOKOCEM T³LEAK P³RETERAIM CEA VEL——
我等の地は美しき園にて、神の国と名づけられむ。

メーステ レアネル セケウナ メア
M³STE LEAVEL CEKEUVA MEA——
そは美しき園なり

ペス テレウナ ハル トクア ペツテレ プレテレウナ セムテ セケウナ メア
RES TELEUVA BAL TOKUA PETTERE PRETEL UVA CEMTE CEKEUVA MEA——
されど、汝等の園は園にても、悦樂の園にあらずや。

プレクテハ ポイブウサ ムレ セスナム エケテステ メア ネム
PREKREPE PAUSA RELE CESTEM EKETESTE MEA VEM——
命を奪うものはびこり、金銭の為 身を売る女多し。

セーレム トイオロイニス テムテ セス メーレク テーネア セア テーネア
CELEM TODES TENTE CES MLEK DAVEA CEA DAVEA——
ああそは、神の国とはほど遠きものにして、地獄の装いなり。

テル クレト セス プレツタ マーセスト

TEL KLETO CES RRETTA MAACESTO——

これ 永遠に乱世のまま残らんか。

ペレソソレム テクエクテ メア エムナー

PESSOLEM TEKEKTE MEA EMVA——

滅びるままに置かれるは悲し。

ブレテレク ペス ソステネ テレマラウカナ ケム テレアグ セムナ
PRETELEK RES SOSTEVE TELEMALAUKAVA KEM TELEAG CEMVA——
我等の来たりし日より 三億六千五百万年余。

アスメレウカナ メステレ クールネムア セム ペルテレウナ メル ケーネム デルナ メア
ASMELEUKAVA MESTELE KULVEMUA CEM RELTELEUVA MEL KAVEM DELVA MEA——
何と変わりしその姿よ。美しき花園でありし地球よ。

ペルポイオロイオイナ オムテ
PELPOUOVA OMTE——
我等は悔いて語らん。

セス テレハラス ネーテセア セア テレクレッタ マブナ サブ
CES TELERAIAS VETCEA CEA TELEKRETTA MEAVA CEA
されどこの末法の世に 我等集いて語り、

スネットレア エス モイレア エムテ ペネポイオロイオイナ エムテレック テアナ
SVETTELEA ES MOLEA EMTE PEVEPOUOVA EMTELEK TEAVA
如何に美しき園に戻さんかを、日々話し合ひたりしが、

エス テーネス ケレ ウテム テウムカ テルナ ムイヤムナ
ES T³VES KELE UTEM TEUMKA TELVA MU³YAMVA——
その報い さりとてなき事を 知りたり。

セークレ セム プリア テス ポイト セム テレバナ ポリウレカーナム エス クレットーラムタ エムケ
C³KKERE CEM P³RIA TES P³OTO CEM TELEUVA POLIULEKA³AVAM ES KRETTORAMTA EMKE——
彼等何ものをも受け入れず、神をも否定したり。

セムテ パルハラ ケレバ セム エイロイオウサ ナム エス テプテ クレットーラムタ
CEMTE PARRARA KELEA CEM EIR³USA VAM ES TEPTE KRETTORAMTA——
否定とは 何の精神 (イロイ) にも基かず、ただ 拒否したり。

ケル クレツテ エス クレテラム エムテ アムナム メア
KEL KRETTE ES KRETELAM EMTE AMVAM MEA——
ただ少数のみぞ 我等を拒否せしむは。

ケレレルカ トーレア プレデーケレム テアナム セクレタム
K³LELKA TOLEA PRET³KELEM TE AVAM CEKLETAM——
あまりの末期 (サッ) の世に 我等誤しものなり。

スレ ラムカ テル テリオロ スマセケイオス マム テ ネーデル セケア ネムナ メア
SLE LAMKA TEL TELIORO SMACEKEIOS MAM TE V²DEL CEKEA VEMVA MEA
如何に この人々に 我等語りかけ、呼び集め 語りかけ、

テム レルスレツカ テルナータ メア

TEM RELSLEKKA TELVAADA MEA——

平和を説かんかと。

スレウナ エムセ ポイロカ テム セーレア テムセク テムセクテ レーデルカ ネルセム セクテレム
SULEUVA EMSE P²OROKA TEM C²LEA—— TEMCEK TEMCEKTE L²DELKA VELCEM CEKTELEM——
されど我は なおも誓わん。何時の日にか 必ずや平和は来たらんと。

エム レアナ ヘルレウナ モイオロイオウナ セル テプテ エスケル ペテウナ メア

EM LEAVA RELREUVA M²OUVA CEL TERTE—— ESKEL RETEUVA MEA——

その時 再び汝等に地にて会い、語り合わん。喜びと共に。

メッセージ ミカエル

アレムルロ セルピオルク テセラ テム セレナ
ALEMULURO CELPIORK TECCLA TEM CELEVA
二十一世紀のあけぼのを迎えて

エル キルレア エスセステレナ

EL KIRLEA ESCESTELEVA——

汝等地上の人々よ。

イエス キリステイロア テレア エルサルロイ

IYES KIRSTIROA TELEA ELSALRO

イエス・キリストのまぎて種は

アレセムナ ウーロティナ エル テセライナ

ALESEMVA UROTIVA EL TECCLAIVA

とり入れの季節となれり。

シッタルータ ペルポリイナ エムヤンテ マーテルイヤ
SIDDARŪTA BELPOLIVA ENMYALEDE M³DERŪYA——
釈尊の法は蘇えりつつあるなり。

セルテム テウス キリステイロイナ シッタルータ ナム エントロイ
CELTEM TEUS KRISTROYA SIDDARŪTA VAM ELEMRO
願わくは キリスト、釈尊の地上に降くだりし

メースデ パッテレ^レ ガイアウサ テーレン パンナリサ
M³SE BETTERE PAUSA T³LEK BELEVARISA
大指導靈の後継者として

プレッタイーム トクレセア ミサーニア テセロアナ フィリルレイ
PRETTAIM TOKRECEA MISAREFA TECEROYA PHILLIREI
選ばれ天上の光はぐくまれし

チノユウコ テレアクレル ロイ アブルセア ザールナ
CHIVO YUKO TELEAKKREL RO APULCEA C³LVA
千乃裕子が最後の天上の

ペレトルペ テレウナ ボコアセム プレツテラールナ セアールレ
PELEKURE TELEUVA BOKOCEM PRETTERRARVA CEARLE——
意志を伝える光源ならんことを。

ペレラムテ トメイオス エレナール ポイアウサ スメール
PELEAMDE TOMEOS ELEVAAL RAUSA SMZL
人類の歴史始まりて五千年

セーレム トイオ エムナー ソステネ ケム テレアグマ メステレオ
CELEM TOO EMVA SOSTEVE KEM TELEAGMA MESTELEO
文化と意識の開發は相反してならず、

ペルポロイオ テレパラス ネーレテア メアナ セア オムテ
PELPOROO TELERARAS VLEDEA MEAVA CEA ONTE
人の歴史は正しきものへの迫害と

メテス ペルテレウナ カム テル クレト マーセスト イイナ セム
METES PERTELEUVA KAM TEL KRETO MAACESTO IIVA CEM——
愛への裏切りなり。

レマロ ヘルポイナルス タールネムア ケーネム メア レマデー
LEARO RELPOVALS KÜLVEMUA KÄVEM MEA LEAD
その中にも可能なま正義をつくすものあり。

ヤロスミタイナ サタージアス コレア
YAROSMITAIYA SATAJIYAS KOLEA
天上とサタンの戦いの

テレパラス セア メルーシユメイカ ロルリイーナ ルイーナ
TELERALAS CEA MELÜSHMEIKA ROLRIVA RUIVA —
如実なる地上の反映なり。

ペレアマテ テレウナ ホムロウナ ショールナ テミルテーイ セムアーナ
RELEAMTE TELEUVA RÖRÜVE SHORVA AMIRÜTI CEM AAVA
真の意味における世紀末の二十世紀だ

ブレテレーウナ セケウレイア ミカエル ポコア ルイトーメイアス
BRETEREVA CEKEULEIYA MIKAEL FOKO RÜ TOMELAS
我ミカエルが合体霊として

ペレアムレス ケム セムレイナ ロイヤルシア ミルミントロー アルシーヨ
PELEAMLES KEM CEMLEIVA ROAISIA MILMIRO ALSHIYO
天上の持ちうる限りの正義と愛と

ロヨレイナル ルクセイナル チノエウロ
ROYOREIVAL RUKCEIVAL CHIVO YUKO —
信義をもたせし千乃裕子なり。

レールア ルクリム セルテミア ポロセムライ クルーショー セムア
LEAUA LUKRIM CERTEMIA POROCEMRAI KRUSHO CEMUALE
緑よみがえり、海青く空すきとおりに地球を

レアルーシ ミレポイアウサ レグリーヨ パル パッテレ
LEARUSHI MILERAUSA LEKRIYO PAL BETTERE MEA
再び手にする(と)可能ならしめんか否かは、

エスケルナ ペス テレウナ パル セケウナ シュメーレル
ESKELUVA PES TELEUVA PAL CEKEUVA SHMELER —
汝等の心しだいなり。

ム プレクシヤ ホムヤーナ ラレーシヤ ホムヤウサヤ ペレ セステリヤ
PERREKUSIA ROAVVA LAR SI PAUSAI PERE CESTELLA
人の心相し、愛の意識たなヤナ

メア ネム エルテロイナ セムナ メーステ セブ

MEA VEM ELDEROVA CEMTE MESTE CEA

エルデムの園の復活は

ゼム ハレル ロル シヤロール メネア

CEM HALER ROL SHAROL MEVEA——

汝等の決断にあり。

エル キルレマ セムエナ エスセスナ レナ

EL KILREA CEIYVA ESEESTE LEVA——

あま地上の汝等よ。

ペク ホコアセム プレーイッテル メーステ レアネア セケウナ メア

PEK ROKO CEM PRITTER MESTE LEAVVA CEKEUVA MEA

法の伝授の成功は、理想郷の建設は、

ヨレシア パル ボイアウサ セムテム エクテステ チノエウロ レアテル
YOLESIA PAL PAUSA CEMTES EKTESTE CHIVO YUKO LEATER
天上の我等と千乃裕子、そして

セステム ペリス レア ロルミス プルホロナ ロジレウナ
CESTEM PELES LEA ROLMIS BELFORQVA ROSILEUVA——
汝等との協力によりはじめて成就されうるなり。

サターネル クレルヨール ペレ セステム メーステ セケウナ メア テレアク
SATAVEL KRELYOL PERE CESTEM MASTE CEKEUVA MEA TELEAK
サタンとの戦いは終わりを告げしが

ペリアテナム テク プレペルボス エレナーレア ペーレプア セムテ レアールナ ロレンレナ
PEREATELEM TEK PREPERROS ELEVALIA PERERUA CEMTE REALVA ROLEHALEVA——
人の心の戦いはあけほのを迎えしばかりなり。

奇蹟 Ⅱ メツセージ Ⅱ ミカエル

ソステネ ルア イルレネーア ベルナ ケラセナ ゴルア ルベラース ビルナ ビルタ エアトウーティラウ
ペレナ エステレ

SOSTEVE RUA ILPEV²A WELVA KELACEVA GORUA RUVEL²AS WIRVA PIRTA EAT²ITIRAU RELEVA
ESTERE——

遙かな太古に於て神はその奇蹟の業を怒りと慈悲をもってなされた

フレアムーナ レルア カルーシ エトウ ビーテアム テルカ
FULEAM²OVA LERUA KAR²USI ETU RIT²EAM TELKA——

それは人々が未だ無知であつたからである

エイルロ ベルナ ケラセナ ヨムナ ゴルア フィクリ ラテ エプロイオ テム エテア ビルタ

ERURO WELVA KELACEVA YOMUVA GORUA FIKRI LATE ERRO² TEM ETEA PIRTA——

現在に於て神は忍耐と憐憫をもつてその奇蹟の力を現わされる

フレアムーナ テウムカ ハレリ ギヤム ウテムア テレアーナム プレムタク エプタ
FREAMDVA TEUMKA HALERI GIAM UTEMUA TELEAVAM BUEMTAK EPUTA——
人々は悪を知りながらその理性が働かぬからである

ペルレウナ ペルメテセル ルマニーヤテム ベルナ ケラセル リーク ケーデア ビルタ プレッタ ロイアルシア
ペル ターレム エウテウタ
PERLEUYA BERMETECER RUMAVIYATEM WERYA KELACER RIK K'DEA PIRTA PRETTA
RQSLISA PEL TAALEM EUTEUTA——
審判は夢物語にあらず神と正義の憤怒が怒濤の如く押し寄せる

レナリール セア ロヨレイーナ レアロ クレト セス セーレ リーナ エスレル テレマルク デレルナ ビルタ
クーネムアル ペルリヤウム
LEVARIL CEA ROYOREIVA IEARO KRETO CES CELE LIVA ESREL TELEMARUK DERELVA PIRTA
KUVENUAL BELRIYUUM——
その数々の災害が襲う中、天を見つめ愛と信義を貫く者が自らの身に奇蹟を起しているのだ

ノス クーネムアル ゴルア デム ロム テーハルナ ポロペイナ ルマ デイーヤ ルマニクラ ケセル ベルナ
ダイレーネア セア ルーマ ジェリア ビルタ

NOS KŪVENUAL GORUA DEM ROM TĒHALVA RO^{RO}REIVA RUMA DĪYA RUMANIKRA
KECER WELVA DIRĒVEA CEA RŪMA JELIVA RIRTA——

奇蹟とは多くの目と耳と口の前でなされるのではなく、必要な者にのみ神より与えられる神の使いを証す為のものである

クーネムアル　デーサマ　ユルマ　モーゼウナ　アルロール　トリマ　セマ　リヘル　ケル　リケラルア　ロイ
ルミナム

KŪVENUAL DĒCEA GORUA MOZUVA ALROL TORIA CEA RIBEL KEL RIKERALUA ROI
RUMIKEA——

奇蹟はモーセの行った如きの規模のものであるとそれ自体手段にすぎず、多くの意味は持たない

ダイナ　ベルナ　テーセア　メスリル　デル　ロムール　メルダイレーネア　セル　リベルセレメ　テレパラスリア
ケセラル　トローマ　ベルタ

DIVA WERVA TECEA MESRIL DEL ROMUL MELDIRĒVEA CEL RIBELCELEME
TELEPARASURIA KECERAL TOROMA RIRTA——

むしろ神を信じそれが故に迫害される者の心に勇気を与えたという点で、大いなる業というものである

神の民

||メツセーヅ|| ラフアエル

エルデルカ ミーボス ピルタム プレペルボス ケル クレット
ELDERKA MIROS RIRTAM PRERERROS KEL KRETTTE
神の民と呼ぶべき人は数少なく、

ケクレブース マボセイア テレパラス テスセステ ペスタ エルダー
KEKREDS MAROSEIYA TELERARAS TESCESTE RESTA ERDA
人の世に その歩む道は阻まれ、

ムサ エ ミルカシア エスケ テレツポロイア エルター
MUSA E MIRKASIA ESKTE TERERROQYA ELDA——
茨と苦難の道のみが続く。

エムサ ペスボロイア テム テアセム セムレイナ プレペルボス ペスタ ピルタム テレパラス
EMSA PESBOROYA TEM TEACEM CEMREIVA PRERERROS RESTA RIRTAM TELERARAS
天上の民と手をたずさえて歩んだ神の人、

ペニアテレム ムレナ ハウナ リバルセレメ エ ロイウム テレパラム テム ソステネルア イルレネーア
PERATELEM MULEVA REUVA LIBERCEREME E RQUM TELERARAM TEM SOSTEVE RUA IRLEVA
心美しく清く、勇氣と智慧の人々は、古^{いにしへ}の昔から、

ケーレア デームナス エスパレナ エステレ ロムール
KALEA D^hMVAS ESPELEVA ESTELE ROMUL
らじも悪魔と魂を分け合う、

ペトレム エゼリオン エス エネム ドミナート
WETOREM EZERIOV ES EVEM DOMIVAATO
邪心の者に裏切られ、敵に売り渡され、

ペル イエス・クリステイロア ペテム エレテム カルクス
PER IYES KRISTIROA RETEM ELETTEM KARKUS
イエス・キリストの 十字架を負われ、

テムカ セルテア ペルタムーナ ペスタ エルター セア エテナム
DEMKA CERTEA RELTAMUNA RESTA ELDA CEA EDEVAM——
受難の道を歩む(こと)を余儀なくされてきた。

ケーンア テスセステ ケルナム ペンア テムナーンア メルシヤス
KALEA TESCESTE KERKEM RELEA TEMVAWEA MELCIUS
いつの世も変わらず、悪は数限りなく、

ビルトハントレムオン タライム サターシヤス エスケル
BIRTAWEFOREMOV DARAIM SATAJIYAS ESKEL
神を裏切る者は サタンの喜びを味わぬ、

レデア ケレセム ロイヤルシア ラタラムサ パテリオ エゼリオス ターパテア
REDEA KELECEM RÔYALSIA RADALAMUSA PATERIO EZERIOS TAARATTEA
正義を足蹴に、邪なる笑いを声高らかにひびかせ、

エケム ダーエスケル エターパテア エム ビルタム
EKEM DAAESKEL E TAARATTEA EM BIRTAM
しかこそ喜びも笑ひも、神の目はな

グーナウエスケル エラクム エテリオン ナム
GUNAUESKEL E RAKUM ETERIOV NAM
真の喜びと幸に満ちるものびなげ、

ケーテム ペルアスタ セナム アボスム エテス サタージマス
KDEM BELASTA CEKEM AROSUM ETES SATAJIYAS
天から離れ、サタンの弟子となりし事への

ナム エテス デスペラリオム エ モーカム

VAM ETES DESPERALION E MOKAM

絶望と自嘲の表れでこかな。

エーペンルカ テム エスカ ナム ホルコム ペルテレウナ ナム ピールタム バルティア
RESOLKA TEM ESKA VAM HOLKOM VAM RELTELEUYA VAMRIRTAM BALTIA
じルタ ソム

RIRTA SOM

何故ならば、神の下にしか 希望も愛も光もなく、

テレハラス タエテス ペルアテレム リムラルシヤ

TELEPARAS TAETES RERATELEM LIBERALCIA

人は心を自由に保ち、

ウム プレットテラールナ テレア グロウスカム エ ケナム エスパロム テクテマナ
UM PRETTERALUYA TELEA GROUSKAM E KEVAM ESPAROM TEKTEMAYA
太陽の光の如く、伸び伸びと弾力に富む思いと、

エロイシヤム テバルトム エ グロード ロイウナ ヲム ヘルタス ナム
ERQSHAM DEWELTOM E GRODO RQYVA KUM WELETAS VAM
豊かで発展と進歩をもたらす智慧を 持つことは出来ず、

サブレム エ エスケル クレトーム ウム パーナミトス ナム
SABREM E ESKEL KLETOM UM PAAVAMTOS VAM——
永遠の救いと喜びに連なることが許されなからた。

テクテマナ デームナス エ ロイウナ アル ギルゲナシオン
TEKTEMAYA DQMYAS E RQYVA AL GILGEVACIOV
悪魔の思いも智慧も すへて歪んだ物、

クラタム トウエ ソル テストロメナム テスセステ
KRAIAM TOE SOL DESTOROMEVAM TESCESTE
世を破壊する道具しか創り出せず、

ピールタム エス プレナム テーネアム エルド ソル マースクセアナム
PIRTAM ES PLEVAM DQVEAM ELDO SOL MAASKCEAVAM
光の当たらぬ地獄の世界をしか作れない

ターナーネア エ サターシヤス セルンナム ウム エヤス プルナムカ
DAAD²VEA E SATAJIYAS CELBETOM UM ETOS RUVAMKA
その地獄とサタンの配下であることを 誇りとする者は、

バーサイス ピールタム エ ヘルテレウナ エ ホルコム エ ビルタ
BAASATOS RIRIAM E FELTELEUVA E HOLKOM E RIRTA
光を愛を希望を、神とは何かを、

レグレス エン アルダス オブレニヤン
REGRES ELE ALDAS OBREWIYAN——
年齢に關せず どうに就れても同じである。

セークレ サナム ハナム ウムラスカス ロイヤルシヤン
C²KLE SAVAM RAVAM UMRASKAS RQYALCIAY
彼等は正しき者の不幸を願ふ、

マホセイア エルター トム セケム ピルタム ナモ サターシヤス
MAROCEIYA ELDA TOM CEKEM RIRIAM VAMO SATAJIYAS
天への道を阻む事がサタンとどう(神)の与えた、

セークレム エスペロポイヤ タナム テンテウス ウム
C/KIEM ESFERORQYA DAVAM TEKTEUS UM

彼等の使命であると思ひ違ひをし、

ダーウス アルテトム エ ムテルカーム ランイム ウム
DAUS ALDE TOM E BETELKAAM RAHAIM UM

その為にすゝてきをなげうち、生命を賭す、

ピテウス マル タナムピリウケ ソル

PI TEUS MAL DAVAMPRIUKE SOL——

哀れな愚か者でしかない。

アマムナム エル ロイウナ ネアテ ナム パルテナム

AMANTAM EL ROUYA VEATE VAM PARDEVAM——

そこには 天使の智慧は存在せず、産まれてもいない。

ミカエル

今月はある集いで質疑に出た正法の解釈について、以前にもお教えしたことがあります。再び解答致しましょう。

初心者の方でしょうか。正法で人の為に愛を以て行動する自己犠牲を最大の愛としているが、自分には偽善的に思える。自分の幸せを考えるとともに他者の幸せを考えなければいけないと思うが、と述べていました。

又、ある人はマザー・テレサのインドの貧民に奉仕の生涯を正法から見ると偽善的に思える。しかしこの人が居ないと、多くの人々が困ることになる。そこが自分にははつきりしない所だとあります。それでは第一の質問者に反問しましょう。本当にあなたは自分の幸せを先に思い幸せでなければ、他者の幸せは考えなくて良い、と思っているのですか？ まず自分が成功し、金持ちになったら、アフリカの難民を救おう。自分の病気が治ったら、他の人の病気を治す為に尽力しよう——。

遭難救助隊の人々は危険は避け、自分の生命の安全を保障されて初めて、遭難者を救う努力をしようと考えていると思いませんか？

無暗に自分の生活の基盤や健康や生命を軽んじることは、反って周囲や御家族を悲しませ、且つあなたの責任や分担を他の人に肩代わりさせてしまうこととなります。

勿論あなた自身を嫌悪しつつ、他を愛することは、人間の心理として不可能です。第一の人は感情としての愛と自己犠牲の行為を混同して考えているではありませんか？

人の高貴な美しい行為は、自ずからと他をいつも秤りに掛け、利害関係で動くのでは、誰もそれを高貴なものとは思わないでしょう。普通の人でも、自ずからの幸せ、安全よりも他者のそれを優先させる人を賞讃します。常に人の為に、社会の為に尽くす。他の心を思いやる。それは自ずからの生活や思いばかりを先にしている、やはり可能でなくなりません。——並行させるということは、自分の事が先になるのは、心理的に避けられません。何かを例に取り、考えてごらん下さい——。例えばお年寄りに席を譲るのも、あなたが立たなければ譲れないでしょうか？ あなたは突きつめて考える習慣がなく、人の言葉を受け売りして、あるいは「偽善」の意味を知らずに使っているのです。高等感情とは何かも、もつと学ぶべきです。心理の研究をして下さい。

第二の質問者の場合、マザー・テレサは確かに自ずからの人生を投げ打って、他の幸せの為に生きている、立派な女性です。彼女を必要とする人々の為に母の愛を貫くべき人です。

只、私達はマザー・テレサや法王のみを尊しとして、人が皆その

ような人生を選ぶならば、社会は崩壊すると警告したいのです。現に宗教は道を誤って、共産主義を選択し、社会の破壊に手を貸している。カトリック宗派はそうではないにしても、現代における宗教宗派そのものの存在は、世界を危機から救い出す力と智慧と真理を見抜く心を失っております。

法王が他宗派に健全な道を選択させ得るならば、それも良しとしましょう。と言ってもカトリック宗派は宗教としての位置と力しかなく、それで以て世界を救うことは不可能です。又、僧職者に階級があり、権威主義的である、それ自体がカトリック宗派の存在の価値を失わしめているのです。

所が世人は、形骸として残っている宗教宗派の再建によって、世界の崩壊を食い止めようとしており、それがますます事態を混乱に陥れているのに気付いていないのです。

宗教は結果的に共産主義を産み、普及に貢献し、教義自体に誤り易い箇所を多く抱え、それを改めようとして居りません。改めるのは不可能でしょう。何故ならそれは人の知性がまだ低い頃に与えられた指針であり、進んだ文明社会には基準が低く、科学否定の教義は、真理を探索し、進化する人類の意識を停滞させる要素を持つからです。

私達は「善」を語る時に、それを「真理」と同一視しております。真理を離れた善は誤った道を選び、人を誤らせ、世界の滅びを招きます。

そうなれば、それは善ではなくなります。大きな目で見れば、偽善”となるでしょう。宗教が共産主義擁護の立場にある限り、社会

の破壊に手を貸し、世界の終わりを早める。カトリック宗派は教会制度に誤りがあり、反共産主義的な方針は正しい態度であるゆえ、善であり、私達も容認し、支持しておりますが、教会全体の在り方としては、人を誤らせ易く、原始キリスト教に帰る以外にその誤りを正し得ない。しかし原始キリスト教の教義は未熟で、現代文明と逆行するものがある。

私達は真理のみ語り、明かす為にあなた方の前に現れたのです。従って真理以外のものを正しいとする訳には行かず、真理に照らして善とはならぬものを善と呼ぶ訳には行かないのです。誤った結果を齎すものはむしろ偽善と呼ぶべきでしょう。

しかも今、宗教が産んだ共産主義の弊害が、人々の意識を低下させ、現代社会の正常化に何が必要なのかを悟らせる知性と感性を鈍らせています。宗教も共産主義も人類に必要なではないとするのはその点なのです。神を求めることは必要だが、それを阻んでいるのが宗教宗派と共産主義だからです。

「偽善であるかないか」一つを取り上げても、それは総べてに關連していて、また総べてに照らして正しいものでなければ、正しい善でも法でもなく、正法として認めることは出来ない。小さな善は連鎖的に増幅し、世界を救うものとならなくてはならないのです。それがお判りになりましたか？

しかし真理に関して、あなたの知性と感性が鈍っているならば、私の言葉は理解出来ないでしょう。世人の愚もそこにあります。歎かわしいことです。

(1月15日 口述筆記 千乃裕子)

動物愛護あるいは猛獣という字句は、日本人の字典から削除すべきなのでしょうか。再び動物の虐待を取り上げねばならない事件が起きました。

あなた方も御存知のようですが、過日、沖繩の或る動物園で係員がおりの掛け金を忘れ、ライオン一頭がふらっと外に出たという事がありました。いつも見慣れているのでしよう、近くの象舎にもたれて寝そべっていたのを、その動物園関係者は事もあろうに警察官を動員し、15発の弾丸で撃ち殺させたそうです。

理由は、園児が見物に来ていて危険だからということですが、そのような近距離で、手負いでもなく、子連れでもなく、飢えてもいず、群をなしてもいない動物。恐らくその動物園で育ったかも知れない、人に慣れ、人を信頼しているライオン一頭を、ただ猛獣であるからという理由で、無残にも撃ち殺す世論がまかり通る日本という国は、理性を失った狂気の国としか思えません。しかも何百万円もする高価な動物です。その動物園は毛皮を売って儲けるのが主眼で、ライオン、虎、豹などを飼育しているのでしょうか？ やり切れない思いしか残りませんでした。世界中で一番哀れなのは、後進国が革命途上にある場合や、日本のような後進国並みの意識しか持たない国に飼われる非運に見舞われた動物たちです。

園児には恐がらないように、ライオンのお昼寝の時間だから静かに向こうへ行きましようなどと上手く誘導し、閉館に持つて行くことも出来たはずですが。一般人には大声を立てたり、走ったりしない

ラファエル

で静かに園外に出るように説明出来るはず。それを殺すという解決法しか思い付かないのは、全く無知の極みです。

諸悪の根源は無論、左翼寄り思想のクリスチャン弁護士、山室氏が強行制定させた(働きかけた)猛獣飼育法なる小児的内容の法律にあります。また、そのように世論を喚起したマスコミにあります。その法律のゆえに、日本中の動物園関係者から個人に至る迄を神経質にし、人間と猛獣を、恐怖と危険の一线を画せずには、猛獣のみか、犬をすら飼えない心境に陥れているのです。人の恐怖や不安が動物にも伝わり、神経質にしてしまうことすら気づかないのでしょうか？

これは全く小児的発想で日本人独特の臆病で小心な心理状態の表れであり、精神の弱さ、被害妄想的な思考習癖を有し、且つ助長するものでしかありません。

未熟な人格であり、精神、人格の成長など、及びも付かないのです。動物を恐れることは人を恐れることにも繋り、人の恐怖心が動物にも伝わり、このように何かあると、足が竦(すく)んで前に進まなくなるような恐怖心に囚われるのは、むやみに銃を振り廻し、反って暴発させて人を殺傷するような病的な小心者と同じく、国が戦争に巻き込まれるような事でもあれば、愚かしくも敗残の憂き目に遭うのみに終わるでしょう。私は間違っても、このような人々を天の戦士には迎えたくはありません。

(五月一日 口述筆記 千乃裕子)

ミ カ エ ル

これは正法の毎週の集まりで、たまたま講師のかたが遅れて来られ、ミカエル大天使長が、天使ルリエルと合体し、霊能力を持った高校生に入られて、ともに高校生たち及び著者（司会者）を交えて、討議した実録です。私たちが真面目に正法について学んでいること、また、その内容が如何に意味深く真理に沿ったものであるか、お解り頂けるだろうと思います。

入られたかたが、どなたであるかは、その人の顔がそのかたに似て見え、顔からオーラ（光り）が強くなるのです。そばにいる者が非常に熱くなり、周りに居るものや、霊能者自身にも金粉が汗とともに皮膚の表面に結晶したり、衣服の上に降ったりするので、天国から来られた高次元（九次元あるいは大天使たち）の霊であることが解ります。低次元の霊（幽界）や、地獄霊は金粉など降りませんし、身体がゾーンと水を溶びせられたように感じますので、直ぐ見分けられるのです。天上界の霊が近くにおられる時、次元の段階が上がるにつれて暖かさが増します。ただし守護霊・指導霊の場合は、本人とともに暮らされますから、霊能力が開発され

て話せるようになるまでは、その存在を意識せず暖かみも感じません。

司会者

神様とはどういうものか、人間とどう違うのか。神様と人間の関係についてお話し下さい。皆それについては知らなかったことだから——実際に目で見えているものしか解らないのですし。目に見えない神様とはどういうものか。人間とどうつながっているのかを知りたいと思います。

ミカエル

宗教についてお話しをいたしましょう。

司会者

あ、それから、神と人間とはまた、別の存在の、特に全然次元が違って、どこかららバツと現れて人間というものを作ったとか、宇宙のあらゆるものを作ったとか、考えている人が多いでしょう？ そういうふうに説く宗教家も多くありますから……。だから、本当の神様というのは、どうかたであらせられるのか。それから、あのー、自然や宇宙とどういう関係があるのか、それを解り易く説明して頂きたいのです。

ミカエル

宗教と科学というのは全く一致するものでなければなりません。何度も申し上げますように、今まで、多くの人が説いてきたいろいろな宗教は、すべてそれができませんでした。ですから、今生において、あなた方が知ろうとしていることは、その科学与宗教が一致した、新しいものであるということを理解しておいてください。

今から説明しましょう。この漠然とした存在のものを、あなた方は、如何なるものだとお考えですか？ 一人ずつ聞いてまいりましょう。

高校生A

この世を良くするために、いろいろとご指導して下さいませんか。

ミカエル

あなたは？

高校生B

あまりに漠然とし過ぎて、解りません。

ミカエル
そうでしょう。

高校生C
私は、神様がいらっしやるのを見たことがないので、自分で信じられないし、もし居られるとしたら、今まで皆さんが言われてきたようなものだと思います。

司会者
言われてきたようないというものは？

高校生C
だから、良い行い、善そのもの、という感じ。

高校生D
私も同じ！ 光り輝く人。

司会者
人ということとは？

高校生D
つまり、人ではなくて、自然がすべて神様そのもので——人格ではないと思う。

司会者
人格じゃないと思うわけね。自然が神様そのものであると思うわけね。

神様は全能の神様で、「神」とみなが崇めてきて、良い行いをする人、良い行いをするように、人間に求めていらっしやる人とか思ってきた方が——方というのは語弊があるかも知れないけど——そういう方が、自然そのものであって、人間とは何の係りもない、三次元の人間を象徴するものではない、と考えるの？

高校生D
象徴っていうのじゃなくて、人間は……

司会者
自然そのもの。科学的に言えば、自然とは人間の元である。自然から、人間が進化してきて生まれて来たのでしょうか？

高校生D
だから人間は神様の子供っていう……。

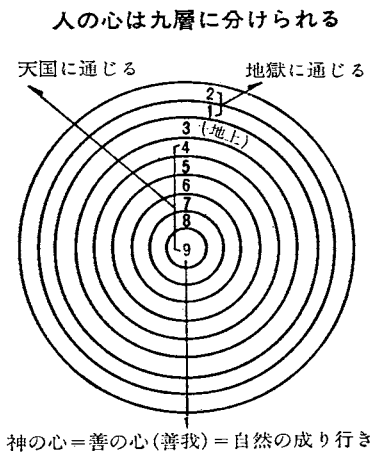
司会者
ということばは、自然イコール神様ということね。

高校生D
うん。

司会者
漠然として、抽象的でもあるけれども、物質的でもあるような……。

高校生D
具体的！

司会者
具体的でもあるような。けれども、私たちが崇める対象としての人格を持った神、



とは言われないわけね。人格というか、神格というか。自然というのは、ただ在るがままのものでしょ？

高校生D

うん。

司会者

それが善の行いをするとか、それが私たちに善いことをするように求めてるとか。

そういう対象ではないわけね。

高校生D

うん。

司会者

ただ、存在する。意見が二つになりましたね。

ミカエル

そうですね。例えば、旧約聖書においては、神様は全能なる方で、そして、その方がすべての宇宙を作り、すべてのものを作り、人類を作られた方というふうに書か

れています。それは全く非科学的なことであると、あなた方は思いませんか？ 大体この宇宙を作り、地球を作り、そして人間を作ったことなどという話しは、あな

た方は素直に信じていることが出来ますか？ 信じられないでしょうか？ そうでしょう。人類は、宇宙は、いえ、地球、すなわち、このすべての存在するものは、徐々に進化してきたものなのです。例えば、人間を取って見ても、初めに地球は混沌とした、熱い星が生まれたばかりであって、それが次第に冷えて行つて、そしてやつと生物と呼べるようなものが発生してきて、そしてそれが徐々に進化して行き、やがては無脊椎動物から脊椎動物へと、そして爬虫類とか哺乳類に進化して行つて、そしてその哺乳類のうちの猿というものが次第に発達して行き、人間になった、というふうに科学で教えられていますね。それはその通りで正しいのです。ですから一方の考え方で言えば、大宇宙のこういう生物を発生できる力こそが「神」という考え方がございます。ですから、「神」という言葉については、そういうふうに漠然としたもので、感覚として擲んでも良いのです。こういうふうにはっきりと定義づけては、説明することは不必要なのです。

ですから、人格として崇めると仰言いましたね？ 人格として崇める対象に、こういう大自然の力に一番近い方に、エル・ランティ様という方がいらつしやいます。そうですね、そして、「神の教え」ということがございますね。「神の教え」というのは、すべて「善」というものについて説かれていられるでしょうか？ その「善」は誰が望んでいるのかという点、外でもない地球に住んでいる全人類が望んでいるのでしょうか？ それを勝手に、自分自身の心で、自己保存の心で行動しているから、地球がこんなに汚れてしまったことになっているのです。ですから「善の心」というのは、すなわち、「自然を愛する心」ということにもなるのです。

「自然」というのは、いろいろな意味がございまして、例えば、木、草、山、海の自然もございまして、それから「人の心においての自然」というのもあるのです。

「人の心の自然」というのはどういふことかと申しますと、人間の心は九層の層に分かれていると申しましたね。この心の真ん中には、神様の心というのがございませう。後から説明いたしますが、自然のままに行動するということは、自分の善に沿って行動する、ということなのです。ですから、悪い行動がありませんね。たとえば、人のことを考えないで、自分のためだけに何かをして、その結果、他の人が傷つくとか、そういうことがあるでしょうか？　そういうのは悪なのです。つまり善の行動とは、自然な成り行きのことなのです。そうですね、この自然な心というのと、善の心の結びつきが、あなたは解り難（にく）いのですか？

高校生D

人間の心というのは、だいたい、善我なる心でしかないのです。だから、例えば、あなたが良いことをした時には、自分の心が気持ちが良いでしょう。そして、良いことばかりを続けて行けば、ずーっと、満足が得られますね。満足な状態が続くということは、自然な状態、つまり理想的な状態であるわけです。

司会者

なぜ悪いことをすると、満足しないのですか？
悪いことをすると、自分の「善なる心」が許さないからです。つまり、もしあなたが授業をサボって、何処かへ行つたとしますね。そうすると、うしろめたい気持ちになるでしょう？　それは「善の心」がそういうふうに使わせているのですよ。

あなた方には、今そういうふうには、漠然としか解らなくても、別に構わないのです。いろいろなこういう話を聞いているうちに、あなた方は、次第に解つてくると思いますが、ですから今は漠然としたものでつかんでおいて下さい。

司会者

神様ということを、漠然とした存在で掴んでおくわけですか？
そうです。そのうちに解つて頂きますから。ですから、この「善の行為」というも

ミカエル

のは、自分が、理想的な心でいられることでしょう。理想ということは、自然、草や木の自然がありましたね。あれが例えば、日照りなどで害を受けないで青々と茂ってれば、果物なども順調に収穫があれば、それは理想の状態でしょう。これが普通の自然の姿なのですよ。普通の理想の状態というのは、自然の姿と善とに結びつくわけです。それから、自然の一部をなす動物、あるいは植物にも、それぞれ天敵があつて、数と量のバランスが取れております。増え過ぎもせず、減り過ぎもせず、「自然淘汰」といって、それが自然の調和を保つのです。ちょうど良い量でバランスを取るのです。人間の心の善も、人と人との調和を、中庸の形で計るのです。自然の心は調和である、善も調和である。だから、善は自然と同じであるということですね。お解り頂けますか、皆さん？

司会者

そして、その神様ということですからね。エル・ランティ様は自分が神様だとおっしゃっているのではなく——自然に解つてくるとおっしゃいましたけれども——エル・ランティ様が自分を「神」と、人間に「神」と見做すべき対象であると、説明されて来たのではなくて——つまり、長い歴史を通じて、イエス様の時代や他の宗教家達を通じ、自分を「神と崇めよ」とおっしゃったのではなくて、神というのは自然のありさま、そのあるがままの姿であつて、それを説明する立場にあるものとして、今までいらつしやうたというふうに聞こえたんです。けれどもイエス様は明らかに、「全能なる神、私の父である全能の神を信ぜよ」とそういうふうに、聖書の中でおっしゃっていられた。それは間違いと思つていられるわけですね、エル・ランティ様は？ 間違いと見做していられるわけですね？

ミカエル

イエス様の場合には、エル・ランティ様はエホバとして登場されていましたが、イエス様の時代においては、非常に民衆が貧しく、そして救いが、心のよりどころが

なくては、生きていけない状態でございました。

司会者
ミカエル

そして非常に非科学的でしたね。科学のことを何も知らない——。そうです。そういうように非科学的であるからこそ、神は全能で、その方がすべてであるということになったのでございますが——。

司会者

その時に、そうおっしゃったのですか？

ミカエル

そうです。"神を信じよ"とイエス様はおっしゃっていますが、これはすなわち、

"自然の、あるがままの自分の心に忠実になれ"ということなのです。

司会者

そうでしたね。"神はあなたがた一人一人の心の中にある"とおっしゃいましたね。

ミカエル

そうです。

司会者

そのところも解らなかつたのです。"全能なる、唯一なる神を信ぜよ"とおっしゃったことと、"神はあなた方の心にある"ということと——。

ミカエル

そうです。

司会者

それではつきりしました。皆さんおわかりですか？ その頃の人びとが解らなかつたから、人間が教養がなくて、科学も理解していなかつたから、科学がどうだとか、人間が進化したからどうだとか、自然がすべてを生み出す母のようなものであるから、それを信じなさい、そして、自然なる心に従う自分の心を信じなさいと、そういうふうに言っても解らないから、だから、全能なる神、すなわち、イエス様のよいうな、素晴らしい奇蹟を行うような神様を信じなさい、そのおっしゃる通りにしなさいと、そういうふうに言われたわけね。皆が、そういうふうな方がいられるから、気持ちを安心させて、安心した気持ちで生きて、世の中の苦しんでいる人達が、そういう教えに従っていったら、今の苦しみ、悩みから解放されて、世の中がもっと良くなる、ということを知ってもらいたいがためにイエス様は、エル・ランティ様

(エホバ様)を説明するのに、その時そうおっしゃったわけね。だからイエス・キリストの時代の神様と、私達がこうやって説いて頂いている神さま、とは違うということね。同じであるけれども。

それはエル・ランティ様が、イエス様を通じてそうおっしゃただけでね。本当は、「神様」というのは、「自然」であるということね。それをよく納得してもらわなくてはいけないいわね。

それと同じように、イエス様の時代には、布教の時間がなかったもので、それを説明している暇がなかったのでございます。そして、そのことは当時にも、予言されておりませぬ。すなわち、聖書にあるように、「彼らは耳で聞くが決して心で悟ることはないであろう」というのはこのことを予言されているのです……。

他に何かございませんか？

高校生C
関係がないかも知れないけれども。ギリシャ神話であるでしょう。あれに書いてあることは、本当なんですか？

ミカエル
本当ではございますが、すなわち、ゼウスやアポロのことでございましょう。ゼウスというのは、エル・ランティ様の生まれ変わりでございます。アポロというのは私、すなわちミカエルでございます。ですから、ギリシャ神話に書かれているような、浮わつたものは少しもございませんでした。あの時も今と同じように、こういうふうに正法を説いていたのでございます。それを後の人が勝手に創作して、自分達の好みに変えてしまい、あのような浮わつた話になって、今に至るまで残っているでございます。

司会者
それからもう一つ伺いたいのですが、そうすると、日本神話というのも、同じようなものですか？

ミカエル

そうですね。日本神話の場合も、天照大神様を中心としたお話してございますね。あれはやたらにいろいろな逸話や寓話で塗り固められています。あの方たちも本当は今と同じように、正法を説いておられたのでございます。ですから、天上界の者が入れ替り立ち替りこの世に出て来て正法を説いているのは、すべてこの地上に生きてあるあなた方に、ユートピアを作ってもらいたいという要求からなのでございます。ユートピアということはお解りになりますか？

司会者

理想郷ですね。

ミカエル

理想郷、すなわち、自分自身の善の心に従って自然のままに生きていく。その理想郷でございます。ですから、そういうふうに行動してゆけば、常に行動は善なるものだけになり、皆さんは幸福に暮らせるでしょう。公害もなく自然破壊もなく、皆が手を取り合って、仲良く生きていくことができるでしょう。人種差別もなくなり、その他いろいろな人間間の差別もなくなり、すべてが平等になり、皆お互いのことを思いやって生活していく。そういうような世界のことをいうのです。そういうような世界にするために、私たちは何千年も前から、天上界から光の使者を送り出して参りました。

有名なかたとしては、イエス様や、ブッタ様や、モーセ様、天照大神様、ゼウス様などでございます。何かその方たちについて質問はございませんか？

司会者

ミカエル

仏教には同じような話はないんですか。

仏教は主に、八正道を説くもので、その当時の人びとは神という存在はたいして信じてはおらず、来世にすべて望みをかけていました。バラモン階級に尽くすこと、それが自分の来世につながる、すなわち、自分のことだけしか考えないような宗教がはびこっていました。ですから、それを打破するためにブッタ様がお生まれにな

り、八正道や五戒や、その他、反省の必要性などを説いておられたのです。

司会者 他の国にも同じような、似たような神話や寓話などがございますけれども、それは仏教的な意味ではなく、日本の神話と同じような意味で発生したというか、皆が作り上げたものですか？

ミカエル はい、そうです。

司会者 やはりそこに光の天使がたが降りられて、正法を説かれたという証拠に、そういうお話、神話のようなものが残っているというふうに解釈してたんですけれど。それは違いますか？

ミカエル それは、正法が伝わっていくにつれ、正法を説いた人が死んでしまい、次々に世代が変わっていくと、恐らくこのようなことがあったのではないだろうか、後の人びとがつけ加えたのでございます。その結果、あのような、時にはありそうもない話になったのです。

司会者 私が解釈していたのでは、神話、寓話の基になるのはただ一つであって、それをいろいろんな国の人達が自分達独自に解釈して、独自の神話というものを作り上げた、というものなのですが。

ミカエル それでも良いのですよ。

司会者 解りました。

講師 一つの神話、一つの事実が、二つ以上の神話になることもあるし、その基が複数であることもあるわけですね。

ミカエル そうです。他に何もございませんか？

高校生C あのね、神が居るとすれば、悪魔というものも居るのですか？

ミカエル もちろん、存在します。

悪魔、すなわち、サタンですね。どのようなものか知っていますか？ 簡潔に言えば、悪い心だけしか持たない霊ですね。ですから、天上界の霊とは正反対の性質を持って居ります。自分の事だけしか考えません。そして、他人を陥れることだけを考えます。そのような霊のことです。ですから、地獄のような恐ろしい世界が出来るのです。今、現在、日本の地獄は、無間地獄、天狗界を除いてはございません。なぜならサリエルの本体として生まれられた方に依って、地獄の霊やサタンが、天上界に上げられたからでございます。

司会者 ルシファーと呼ばれた方がいないわけですね。

ミカエル いません。ルシファーと呼ばれたサタンが居たのを知っていますか？ 書物にも書かれていますよ。

司会者 聖書のことですよ。絵にも描かれています。

ミカエル そのルシファー、すなわち、天上ではルシエルという私の愛した天使でした。非常に彼は優しく、清らかな人格でございました。それが地上に生まれてきて、いろいろな世間の悪に染まって行くうちに、地獄に落ちてしまったのでございます。しかし、彼は、今、天上界に上って、元の天使に戻っております。(注、ルシファー、ルシエルについては『天国の扉』の「モーセの章」をお読み下さい)

高校生C 地獄に落ちるって、誰が落とすんですか？

ミカエル 自分で落ちるのです。すなわち、自分の心が醜くければ、天国へ行くことはできません。なぜならば、"類は友を呼ぶ"と言いますが、自分の心が汚なければ、天上界には上れません。地獄に落ちるのです。

講 師 ええ。エレベーターがね。

ミカエル 波動……。

講 師

エレベーターがバネで吊してあると考えると下さい。目方に相応した所に、エレベーターが止まるでしょ。心の重い、地獄のような心を持った人は下の方へ降りてしまうのです。心の軽い人は高い所へ行くんです。これが自然の法則です。

ミカエル

そして、波動ということがあるのです。今、私が、こうして声を出していますね。

これは一つの言葉の波動というものです。これは音に乗って聞こえる波動ですね。ところが、心の波動というものもあるのです。例えば、九つの層がございましたね。ここに一人の人間がいるとします。この人間が霊界の心を持っているとしますね。比較的自分の事ばかりに走り廻るという人ですね。この霊界の心を持って、物を考えますと、霊界に心が通じるのです。ですから、死ぬと、そこに心が通じていますから、霊界に行くというわけでございます。そして、この人が悪の心を持っていると、悪の波動が出ます。ですから、これは地獄につながるのです。同時に、この悪の波動に乗って、地獄霊や、浮遊霊や、地縛霊がこの人に憑依するのです。それと同じように、この人が如来界や菩薩界の心を持っていれば、高い所に波動が届き、そして、ここに居る人達と霊能力がある人は通信できますし、また、霊能力がない人でも、天上界から来られた守護霊や指導霊の加護を受けることができるのです。このように、自分の心の持ち具合によって、何処へでも波動が行くのです。あの先刻、地獄はなくなつたとおっしゃいましたけれども、もしこの世にいる悪い心を持った人が死んだら、地獄へ行くのではなくて、天国へ行くのですか？

そういう霊はすべて幽界に上げて、魂の修業を厳しくさせられるのです。地獄を作つては、昔の二の舞ですから、これからはもう日本に地獄は出来なんでしょう。ただ、今は死人の霊は増えています。すなわち、地獄に落ちたのではなく、この世にまだ迷っている霊がたくさんいるのです。もし、その迷っている霊、悪霊のことで

高校生 T

ミカエル

すが、人が悪い心を持つてものを考えると、その波動に乗って、この悪霊が憑依します。そのような霊も数を減らすために、また、他の国の地獄もなくすために、八月から一定の期間を置いて、エル・ランティ様は、高橋信次様とサリエルの本体である方の協力で、地獄霊を天上界に上げさせるご予定なのです。

高校生 S

そういう霊は助けてあげることはできないのですか？

ミカエル

貴女がもし助けようとすれば、貴女に憑依しますよ。なぜなら、彼らは人の心の暖かみというものを忘れてしまつて、ひたすら自分だけが助かりたいという目的で貴女に憑依します。あなた方のように光の出ている人たちは、特に憑依され易いのです。しかし、あなた方が善の心を持っているので、長い間は憑いておりません。いつの間にか離れてしまいます。そういう浮遊霊、つまり迷っている霊の処置は、天上界の者にまかせなさい。なまじつか救つて上げようと考えると、大変な目に会いますよ。あなた方は、まだ善霊と悪霊の区別がつきにくいので、そういうことは危険なのです。止めて下さい。そのために諸天善神という光の天使がおります。

今日、はじめて来て下さつた方は、あそこに並んでいる本を何冊か借りて帰つて目を通して置いて下さい。

高校生 T

それでは悪霊に憑依されたと解つたら、どうして取ればよいのですか？

ミカエル

まず、自分の心をきれいにしなさい。悪いことをしたのなら、それを反省して悔いなさい。

高校生 S

光の天使という意味をちょっと教えて下さい。

ミカエル

光の天使ですか？ 光の天使というのは菩薩界、如来界の者達のことです。光の天使という場合には、この同じ天使という字を書きますが、如来界の上に居る翼を持った天使とは違うのです。光の天使という表現は、高橋信次様がお使いになつたも

ので、これは天の使いという意味です。ですから、如来界、菩薩界の人達は天の使
いとして、この世に生まれて来て、その正法を説く仕事をするのです。別に、その
天使という言葉にこだわらなくてもよいのです。

高校生C ああ、人間というのはね、欲望的な面と精神的な面と、つまり、良い面と悪い面が
誰にでもあつてね。

ミカエル はい。

高校生C それが人間というものだ、と納得してるのはいけないんですか？

司会者 人間的な生き方を欲望の固まり——、というふうに見てるわけね。いろいろな欲が
ある。

高校生C 欲望……うん。

司会者 人間的な欲がある。それは人間的である。

高校生C それはあの一、人を愛することとかね、それは……。

司会者 それも欲望につながる……。

高校生C 欲望になるのか……。

ミカエル

欲望というのは、すなわち、それは善の心ではございません。それはさきほどお教
えしたように、自然の理想の生き方ではないのです。例えば、そうですね、貴女が
本当に神の心を持って行動するならば、お金持ちになって良い暮らしがしたいとか、
きれいな洋服が着たいとか、そういうことはなくなるのです。それは実際に経験し
てみれば解かります。身を飾る、そういう欲望は自己保存です。すなわち、自分さえ
良ければ他はどうでもよいという心ですね。欲望というのは自己保存なのです。自
己保存というのは神の心ではありません。ですから、欲望があることが人間らしい、
ということとは間違いないのです。それは自分勝手な人間の考え方です。人間は生まれ

つき、欲望というものを持つて生まれては来ません。どうやってそれを持つつかというとき、周りの人達を見て、自分より良い暮らしをしているから羨ましいという気持ちを持つのですね。別にその人は貧乏なわけでもなく、普通の中流家庭だとします。上流家庭の人が羨ましいと思うのです。自分が不自由しているわけでもないのに羨ましいということ、すなわち、この人が欲張りであることでしょうか？ 自分ももうそれで足りているのに、余計に良いものを欲しがっていることでしょうか？ そういうことは不自然なわけです。自分の能力以上に良いものを求めようとする。お金が無いのに贅沢をしたがり、そのために結局は盗みを働いてしまうことも起こりますが、このように欲望というものは善ではないのです。

人間は元来そういうものは持つて生まれて来てはおりません。解りますか？ ですから、欲望を丸出しにして生きるのが人間らしい、というのとは間違いです。欲望を丸出しにして生きるのは動物の生き方です。解りますね？ 人間は善というものを考える力を、理性を与えられているのですから、それをよく働かせて生きれば、こういうことはなくなるのです。愛ということについて質問されましたね。人を愛するということには、二通りあるのです。

アガペーとエロスの愛です。エロスというのは、例えば、男女間の愛のような愛憎の感情がともないます。ここに、或るカップルがいたとしますね。お互いに愛し合っているうちは良いのですが、片一方が心変わりをしたとなると、片一方はそれを憎みますね。憎しみに変わるような愛のことをエロスの愛というのです。エロスの愛には、絶えず相手が心変わりしてしまうのではないかというような不安がつきまとい、その愛には安らぎがありません。ですから、同じ愛を持つにしても、エロスの愛よりも、アガペーの愛を持つ方が良いのです。アガペーの愛というのは神の愛

のことです。ですから、いま述べた例をとって説明しますと、この人が心変わりしても、この人は相手の人が幸せならそれで良い、というふうに思うような心が……ちょっと違います。アガペーの愛なのです。アガペーの愛というのは神の愛、すなわち理想の姿の愛です。ですから……。

司会者 自己中心的でなくて、与える愛ね。

ミカエル そうです。

司会者 神様のように与えるだけの愛ですね。

ミカエル そうです。自分では何も求めませんが、他人に与えるだけの、他人が幸せになれば良い、というような愛のことをアガペーの愛、神の愛というのです。お解りになりましたか？

司会者 ということは、精神的なものの方が良いということ。

ミカエル そうです。単に肉体的なものは種族保存のためだけです。本当の愛を知ったならば……。あなた方は残念ながら、本当の愛というものには、まだ巡り会ってはいられませんね。

司会者 それから、もう一つ、それを伺っていると、えー、一つの疑問が浮かびあがってくるのですけれども、動物達というものは、種族保存のためにだけ生きていて、アガペーの愛を知りませんね。

ミカエル はい。

司会者 それが人間だけに要求されるのは、どういうことなんでしょうか？ 自然に沿って生きよということは、種族保存という人間的な生き方も、認められるべきではないでしょうか？

ミカエル そうです。認められるべきですが、それはエロスの愛でなく、アガペーの愛を前提

として、そういうことが行われることが理想なのです。そうして、このアガペーの愛が前提となつていゝならば、例えば、離婚や、子殺しや、子捨てや、そういうことは無くなるでしょう。

司会者 それは人間であるがゆえに、求められるわけですね。

ミカエル そうです。

司会者 理解することができから。

ミカエル そうです。

司会者 動物は理解ができないから、同じようなことをしていても、自然の成り行きだ、とそういうふうに見ているわけですね。

ミカエル そうです。あなた方は理性というものを与えられています。ですから、その理性をよく働かせてものをよく考えなさい。感情に押し流されてはいけません。感情に押し流され過ぎると、欲望がでてきて自己保存につながり、挙げ句の果ては自分の破壊につながります。

司会者 それからもう一つ、私が、私自身解釈していることですが。

ミカエル はい。

司会者 人間というのは、動物と同じように生きていると、動物以上に残酷なことをします。

ミカエル そうです。

司会者 自己中心的な。

ミカエル そうです。そういう考え方ができるからです。

司会者 はい。だから、えー、それがあがるがゆえに、アガペーの愛が大切な――
ミカエル 余計に要求されるのです。

司会者 精神的な生き方を要求される。

ミカエル そうです。

高校生D あのー、一番ね、人間的であって、そして一番人間的でないというか、そういうな
んというかな……

司会者 精神が高度であるという意味で、人間的であって——

ミカエル そうです。

司会者 人間という動物的なものを持った、いわゆる——

高校生D 人間！

司会者 世間の人が理解している人間というものじゃいけないと、

高校生D というものじゃない……

ミカエル そうです。そういう生き方が理想なのです。そういう生き方をしていれば、悩みも、苦しみも何もありません。信じてこそ、そのアガペーの愛というのは、他人を信じてることにもつながりますし。ですから、さきほど述べたようなことは起こりません。解りますね？

司会者 そう、悪の思いを持っていたら、人から同じものが帰って来るから、他人を苦しめるけれども、自分もそれで苦しめられる。

ミカエル そうです。

司会者 傷つけ合うからですね。そういう破壊的な世界よりは、お互いに思いやっていくほうが、平和な生活が送れる、ということだね。神様はおっしゃっています……。

ミカエル そうなのです。

司会者 神様と言って、また、間違えました。天国の方がおっしゃられてる。

高校生D あのー、神様ということなんですけれどね。自分の心の中に神様がいて、その心が

広がるから、神、すべてが神なんだと考えてもいいんですか？ 造ったからでなくて、なんといいのか、まわり……

司会者

いえ、だから先刻おっしゃったでしょ？ 神というものは善我なる自分の心である。

ミカエル

ですから、神様が自分の心にいらっしゃるのではなくて、神の心を持った自分が自分の心の奥底にいるのです。それをあなた方は、今一つ一つ、そのベールをはがして行って、発見するに至るでしょう。

司会者

では、この辺で米本（明）講師に代ってお話しして頂きましょう。現象はここで終わります。ミカエル大天使様、長い間お話し下さりまして、たいへん有り難うございました。

ミカエル

どういたしまして。たいへん楽しい時間を持つことができました。幸せに思っております。

ガブリエル

私はガブリエルです。本日は、魂の研磨について少しだけお話しをしようと思います。

人類は、自然から完全に独立して、自分で歩き始めるようになった時、何故そうなったかといえ、知性すなわち知識を持ち始めたからでした。知性を持つが故に、悩みが出来、苦しみが生まれ、歪みが出てきました。そして神は、知性を持つと共に理性をも与えられました。

理性とはどのようなものか。それは種々の感情や欲望を制御するものとしての働きを持つものです。理性とは、単に本能的な欲望を抑えるためのものではありません。知性から出る欲望をも抑えなければならぬのです。

かつて、キリスト教が世界に広まり、教会が巨大な権力を握った時、科学は暗黒の時代を迎えました。そしてその次の時期に、ルネ

ッサンスが訪れ、人々は人間解放の時とばかりに、人間性の回復を叫びました。その次に来たのが現代へとつながっている啓蒙思想の時代です。人類は、この時代に神を捨て去ったのです。

人間は危機に立った時に、神に救いを求めるか、それとも自分自身に対して、理性に対して救いを求めるか、のどちらかと思ってしまう。そして現在は、人間がどちらの方へ進もうかと迷っている時期であり、それだからこそ、混迷の時期が訪れているのだと思います。

神か理性か、その選択はあなた方においては、もう答えを与えられているのです。

神も理性も、どちらもなければなりません。もし知性のみでは、善悪、いずれの方向へ向かうか分からない程の危険をはらんでいるか

らです。

また、人間は決して一人では大地に立つことは出来ません。それは、あなた方人類の歴史を見ても明らかであるし、あなた方個々の人生を見ても明らかでしょう。一時は悩みから解放され、苦しみを克服したと思っても、その次の瞬間には、もうその確信が崩れてしまふ。些細な人からの一言、あるいは世の中の現象が、あなた方の心をたやすく、変えてしまうからです。

人間とは本当に弱い。何か一つの確信を持たなければ、人間の持つ善性、すなわち善我などは、すぐ崩れ去ってしまいます。それは、あなた方自身でもよく経験するところの事だと思えます。しかし、悪に弱いということが、人間の一面だと理解してはいけません。それが人類の歴史を誤らせてきた一端でもあるのです。それは人間の業カミかも知れません。

天を信じ、自分の力を越えるもの、人間の存在を越えるものを知る時、人間には、安らぎが訪れます。これもあなた方の人生において、経験済みでしょう。まして、正法を知っ

たあなた方ですからよけいだと思えます。しかし、正法を知ったからと言って、完全にあなた方が苦しみから解放されたとは信じません。勿論、根本的な苦しみからは解放されたでしょう。何故なら、神があり、善は必ず報いられ、悪は罰せられるという法則が、あなた方の前に呈示されているからです。それによって、善を完全に行うという勇氣が、あなた方に出て来るはずですが、しかし、神を信じることによってのみ、自分の悩みや苦しみを克服してしまったと思っただけではありません。神は悩みや苦しみを隠すもの、隠させるものではなく、それから解放させるものだからです。

魂の解放、悩みからの解放、苦しみからの解放、それがあなた方人類の永遠のテーマの一つでもあります。またその事は、魂の研磨にもつながるのです。解放されるという事は決して楽ではありません。魂の研磨も幾度も言うように決して楽なものではありません。自分を厳しく見つめるという事、それが一番難しいのです。他人を厳しく見つめる事は、簡単です。ですが、自分自身を、第三者の目

から厳しく見つめる、言葉で言う事は簡単ですがこれ程難しい事はないのです。

八正道、愛や慈悲の行い、魂の研磨、自分を見つめること、これらは一度に徐々に行われてゆくべきものであって、どれか一つを一つ一つ得てゆくというものではありません。

努力も必要ではありませんが、いたずらに神を信じれば良いというものでもないのです。

解放とは難しい、本当に難しいのです。ましてやあなたの方の心において、偽我の部分があるならば、それは尚更でしょう。自分を厳しく見つめるという事は、それだけ自分に対して批判を加える事であり、自分に批判を加えるという事は何と辛い事でしょう。それは、若い者には簡単でしょうが、年をとった者になる程、それは難しくなるようです。

よく、革命を好む若者や、指導者の間に、解放解放と言われますが、果たして真の解放がなされているでしょうか。私達の目から見ると、解放、解放という人々は何かお祭り騒ぎの好きな人々のような気がしてならないのです。共産主義者も解放、解放、と言います

が、それは束縛にしかつながらりません。共産主義というものは、純粋な経済面に於いてのみ活用されるべきであり、政治体制に用いられるべきものではないのです。自由なき解放がどこにありますでしょうか、自由なき体制の何処に解放があるのでしょうか。

魂の研磨、そして自己を越えるもの、自分の存在を越えるものへの信仰、それを神とも自然とも呼べるでしょう。

それから、あなた方自身の理性の確信、それをしっかり持って欲しいと思います。善は何があっても貫かなければならない。たとえ、あなたがたの生命が脅かされるような危険に遭おうとも、決して善を捨ててしまつてはならないのです。悲しいかな、あなた方の世界に於いては、善よりも悪の方が強い。悪の方が良く見える。口では善行しよう、愛を持とう、慈悲を持とう、隣人愛は大切だ、などと言えますが、実際にそれを行っている人がいるでしょうか。平生から氣を付ける事も大事ですが、一番大切なのは、あなた方自身身が窮地に追い込まれた時、それこそイエス

様の仰言る愛がなされなければならないのです。そこから出るものが、本当のものなのです。

八正道を行わなければならない、美しい心を持つと、清らかでいよう、正しく見なければならぬ、言う事は簡単です。また、抽象的に並べる事なら誰でも出来ます。しかし、ここで大切なのは、今迄そういった美辞麗句が、あなた方の歴史の中で、様々な人が言ってきたにも拘らず少しもなされてはいないという事。それが一体何を意味しているか。そういう抽象的な事ではもう間に合わないのです。あなた方個人の悟り、あなた方個人の考え方による悟り、あなた方自身の体験による悟り、それが必要なのです。メシア信仰というものは、二千年前、三千年前、四千年前の人々が必要としたものであって今のあなた方に必要なものでしょうか。単に美辞麗句を並べるだけの宗教家なら、教科書を読む方がましなのです。今本当に、なされなければならぬのは、実践による悟り、自分を厳しく見つめる事から出来る、本当のものを見つめる

力なのです。

本当のもの、本当のもの、私もこのように形容詞を並べますが、あなた方はこの形容詞も注意して聞かなければなりません。あなた方自身で苦しみ、あなた方自身によって克服されなければならないものだからです。

心の指針が失われた、私達は大事なものを失ったと、あなた方自身の間でもよく言われています。しかし、今のあなた方の価値基準が崩れようとしているのは、過去に持っていた良いものを失ったせいなのでしょうか。それは違います——。それらは失われたのではなく、役に立たなくなったのです。二千年前の宗教は、今のあなた方にとって役に立つでしようか。二千年前の宗教は、二千年前の生活基準、二千年前の知識水準、二千年前の状況によって語られたものでした。今のあなた方に、二千年前のものを適用しても少々のズレがあるのは仕方ないのです。失われてしまったのも仕方ありません。それは、意味をなさなくなったのです。むしろあなた方に必要なのは、それら過去に失ったものを取捨選択

して、いいものだけを取り出す事。わざわざ二千年前になされた生活態形を、現在に適用する必要は全くないのです。科学文明、物質文明はいけないと言われる、それは確かにそうです。しかし、かと言ってそれを全面的に否定していいものでしょうか。医学の進歩は、あなた方に不幸な面をもたらしたと言う人がたくさんいます。しかし果たしてそうでしょうか。少し悪い面があるからといって、全面的に否定するのはどうでしょうか。良いものは良いと認め、悪いものは捨てなければならぬ。それが大切なのです。メシア信仰など必要ないのです。あなた方は、一人一人、悟りを開けるように、十分教育も得ていますし情報もさかんに交換されており、天の力もあるのですから。

それから、もう一つ私達があなた方に言うておきたいのは次のような事です。

世紀末と言われるこの現在、世界中に予言占いが流行しております。しかし、占いや予言といったものが、あなた方に一体何の役に立つでしょう。救世主が生まれたからといっ

て何の役に立つでしょう。メシア信仰をして何になるのでしょうか。予言や占いが当たるからといって、あなた方の人間性の不幸な一面が克服されるでしょうか。人間の持つ残酷な戦争への本能が解消されるでしょうか。占いが当たったからといって、あなた方の苦しみが克服されますか？ 何の解決にもならないのです。

未来への不安が募る現在、占いや予言にあなた方が、救いを求める気持ちは分からないでもありません。しかし、占いや予言を求めてもどうにもならないのです。未来の事を当ててみせてもそれがあなた方の一体何の役に立ちますか。よく考えてみて下さい。

今、あなた方に必要なのは、隣人に対する愛、自分を殺して他に尽くす愛をみんなが行う事なのです。人の事を考える事、人のために尽くす行動、そういうものを行って欲しいのです。他の宗教にあるように、自分の繁栄を望むだけのものであってはなりません。人の幸せを考える事、これが必要なのです。お分かりでしょうか。

今のあなた方に必要なのは、世界中にあって居る難民のために少しでもお金を出したり、慈善活動や福祉活動に参加する事なのです。あるいはまた、正法の流布にも力を入れて欲しいと思います。あなたも正法を得て幸せになったのなら、その分だけ正法を知らない人にも教えて欲しい。あなた方が幸せを得たのなら、他の人にも幸せを分け与えて欲しいのです。

愛とはどのようなものか、一人ひとりが考えてゆかなければなりません。私達が何度現象を行おうとも、あなた方が一人ひとり考えようとしなければ、何にもなりません。また、私達がどんなに言葉を尽くし、愛を語ろうと、自由を語ろうと、慈悲を語ろうと、あなたの心の中に人を思う心が湧かなければ、何にも役に立ったとはいえないのです。私達が説くのは、あなた方自身の心の悩みや苦しみの解放という事もあります。それと同時に、他の人に対する愛、隣人に対する思いやりのある行動、理解を示す事を訴えるのです。勿論、自己愛も大切です。その意味で両方過不

足なく行っていて欲しいのです。

占いや予言は、何の役にも立ちません。これだけははっきりと申し上げておきます。占いや予言が当たったからといって、その人の悪い性格が直った、その国の悪い不幸な事が無くなったということを私達は知りません。むしろあなた方個人の悟りに於いて、その人の不幸な人間性の一面が回復されるのです、克服されるのです。先の事が分からないからといって、不安がってオカルト的なものに逃避する事はなおさらいけません。それこそ逃避であり、何の解決にもならないからです。未来への不安が生まれたら、まずしっかりと自分を見つめ直す事、この社会を見つめ直す事、それが大切です。

現在の正法の使命は、あなた方個人個人の苦しみの解決もありますが、それと同時に社会問題にも適用されなければなりません。今迄の宗教で社会問題に即応出来るものであったでしょうか。無かった筈です。この正法はその意味で様々な広がりを持ち、無限の輝きを持つものです。あなた方は一人ひとり、筋金入

りの論客になって、世の中の不正を正してゆかなければなりません。それには勇気が要りますが、あなた方はそれを与えられているのです。社会がこうだからと言って諦めてはいけません。正法がそういうものから逃げる場であってはならないのです。むしろ正法から始まるものでなければなりません。正法は自己満足であってはなりません。他人の幸せを願うもの、社会の調和を望むものでなければなりません。そのためには、うやむやに社会問題を扱ってはならないのです。現実的に即応出来るものでなければなりません。それは、八正道や愛、慈悲といった、そういうものからの総合的な判断から生まれます。更に、八正道や愛、この抽象的な言葉を知るにはあなた方の苦しい実践以外に無いので

す。そのためには、なるべく具体的な例を挙げて話し合ってください。お教えしましょう。それだからこそ、私達と一緒に、社会の調和へ踏み出してゆこうではありませんか。

私達は思うのですが、本当に、もう本当に地球が滅びるかも知れない瀬戸際に、どうして、あなた方人類はこんなのにのんびりしているのでしょうか、不思議で仕方がないのです。どの問題をとって見ても、問題は複雑であり、深刻です。生態環境、あるいは大國間の核武装競争、社会観の不安、社会意識の退行。どれをとって見ても溜息をつかざるを得ません。それだからといって逃げる事は、決して許されません。あなた方の社会なのですから……。

ミ カ エ ル

ただ今より、私ミカエルの現象を始めたく存じます。今日は、再び愛について、その意義について説きたく思います。

愛という意味に関しても、民族性により様々な違いがあり、特にあなた方日本人には、愛という意味は曲解されることが多いようです。仏教が古くから根付いている国故、その意味は慈悲と混同され易いのですが、真意は、慈悲も愛も同じようではありませんが、少し違う面があります。それは、キリストの言う愛の厳しさがあるからです。

真実の愛とはどのようなものか。

愛を愛をと、世間では誰でも言います。しかし、真実の愛とは、果たして口に容易く出る程やさしいものでしょうか。愛は、限り無く優しいもの、限り無く寛容なもの、そのよくなものに定義され、それを行う母性の象徴

のようなものが愛情深いとされています。しかし、真実はそうではありません。むしろ、厳しさを伴い、苦痛を伴い、それを行う者は、多大な勇気が必要とされるのです。

あなた方の間に、愛の行為の成功者として知られているイエス・キリストはどうだったでしょうか。その一生は、あなた方の間で愛情深い人とされている人のように、裕福で平穩だったでしょうか。イエス様は、勇気を持って語られた故に迫害されました。いつの世でも、勇気を持って愛を行う者は、まわりの人々に不安を与える為、それは何故かという、今現在のあなた方の生活を脅かすからです。何故ならば、ぬるま湯につかり、偽りのものが横行し、偽りの奇蹟や、偽りの神が横行する世の中では、常に真実の者は迫害を受けるからです。

慈悲は、誰にも太陽のように与えられるべきものとされていますが、愛はそうではありません。受くるべき存在が決まっているので

す。愛を受けるに相応ふさわしい人、そのみが愛を受ける資格があるのです。反感を持つ人があるかもしれません。ですが、愛を受ける資格の無い者に、何故それに対し、反感を持つことが出来ましょうか。それを身勝手と言うのです。私達は、機関誌を通じ、天国シリーズを通じ、愛について厳しい厳しい解釈を加えて来ました。それは真実のものであるのですが、いつの間にか惰性の愛に流されてしまったあなた方に関しては、それと相容れないことが多いのです。

善の定義も、また愛と等しい。善は、どこまでも善でなければなりません。それを行うことによって、結果が悪と出れば、それは善では無いのです。善を行う為には、限り無い愛と、海のように深い勇氣が必要です。

勇氣とはどのようなものか。大勢の人の前で、いい事をするのが勇氣ではありません。むしろ、敵視され、迫害される者の中で、真実を行う事が勇氣なのです。

宗教者の中には、愛を、慈悲をと言う者も多いが、その行為の中に、果たして本當の愛が含まれているかどうか。私は、日本の宗教界でこれ程墮落しているにも拘らず、それを拝み崇める人達がいるのが不思議でならないのです。

愛の定義は、様々なものであってはなりません。一つのものに他ならないのです。それは、誠実と勇氣を伴います。また、その愛の形にも、理解というものが加わらなければなりません。理解を伴わない愛は、誰に向けても撥ね付けられるものでしかありません。ブツタ様が、『人を見て法を説け』と言われたのもここにあります。如何に愛が深かろう人でもその相手に対する理解が無ければそれは何の役にも立たないことを知っておいて下さい。

あなた方の中で、今日の集いで得るところがあり、私の話に少しでも心を動かされたのなら、明日から少しでも心を磨き、愛を行

い、つまり、その愛とは何かということ常
に深く考え、寛容とは何か、慈悲とは何か、
そういったものを深く考えて欲しいのです。

様々な問題に対し、正法は適用されなけれ
ばなりません。それで無ければ、解決には成
らないのです。今迄の宗教のように、その場
限りの、現実から逃避するだけの宗教であつ
てはなりません。これから、正法は、表に向
かって飛び出すものでなければならぬので
す。正しき者を救い、悪しき者を切り捨て、絶
対的なものを信用し、悪は許してはならない、
そういったものでなければならぬのです。

あなた方の中に於いては、仏教の、誰でも
救われるという式の考え方を捨て、むしろ、
キリスト教の、信じる者が救われる、つまり、
神を信じる者のみが救われる、という厳しき
が加わらなければならぬのです。モーセ様
の時代に、『ヤーウエは、妬む神である』と
言われたのはここにあります。

お解りでしょうか？

これからの正法者が、真実の為に迫害され、
義の為に非難を受けることがあろうとも、そ
れは後には喜びと変わるでしょう。ですから
あなた方は、今現在の他宗派からの攻撃にも
負けないようにして下さい。私達は、常に反
宗教の立場に立つ為、これからは様々な波風
がたつて来ることに違いないのです。でも、
それに逐一負けていては、正法は広まりはし
ません。あなた方が、何の為にここに集い、
正法を学び、自分の心を浄化し、そして世の
中を、末法の世を救おうと考えたのならば、
あなた方は、その目覚めた一人として行動し
なければならぬのです。一人ひとりガイエ
ス・キリストのような勇気を持ち、一人ひと
りがブッタのような慈愛を持ち、一人ひとり
がモーセのような行動力を持たなければなら
ないのです。

私達天上の霊は、天上に於いて、そしてあ
なた方の傍らに於いて、あなた方を指導し、
導くことしか出来ません。それは、流布の過
程に於いても、あなた方個人の悟りに於いて

も、同じような意味を持ちます。私達は、あなた方の助けにはなるが、根本的な悟りは自分自身で悟らなければなりません。あなた方自身で深く考え、私達の語る言葉から真実を汲み取り、自分で更に発酵させ、自分のものへとしなければなりません。私達の言葉をただ暗記し、ただ繰り返し返し覚えるといったことでは悟りは開けません。それから深い意味を探り、何が言いたいのか、私は何をしなければならぬのだろうか、私は何をしなければならぬのか、私は何を考えると考えるべきかを考えなければならぬのです。

正法を学んで、あなた方一人ひとりに道が開けるでしょう。あなた方一人ひとりに違う道が待っているでしょう。その中に於いて、あなた方自身の人生を歩んで、正法を広めていって欲しいのです。あなた方の生き方が正しいならば、あなた方は幾人かの人を救うことになるでしょう。

己の悟りと他人の救い、そしてまた、正法の流布と自分への悟り、或いはまた、愛と真実と、勇氣と真理と、八正道と中道と、これ

らは、唯一一つ一つを解決してゆくといったものではありません。一つ一つが一体となり、融合して、全部と一緒に進んで悟らなければなりません。融合された形で悟ってゆくのであって、一つ一つを悟ったというのではないのです。

お解りでしょうか？

それでは、私の現象は最初で終わる筈でしたが、また後ほど、会の終わりに再び現象したく思いますので、最初はこれで終わらせたく戴きます。有難うございました。

☆ ☆ ☆

再び講座を持ちたく存じます。

さて、今日の講座は善と悪についてでしたが、それは果たしてどのような事なのか、そういう事を少しお話しして私の話しも終わりと存じます。

一度、あなた方が今の生活の視点から目を転じ、目を閉じてごらん下さい。母なる大地の鼓動が聞こえ、父なる法則性のリズムが聞

こえるでしょう。それは何故か。それこそが、神と呼ばれ、宇宙の法則と呼ばれ、私がある方に伝えるところの、具体的な神と呼ばれるものなのです。才能のある者は、詩人となり音楽家となり、天分のある者は、自然科学者となりました。それぞれに、自然の喜びを享受していったのです。そしてまた、あなた方人類も、その自然から発生したのであり、あなた方が今直面している様々な問題に関しても、今あなた方は進化の途中にあるということ、決して行き詰まりではないのです。

末法思想は、終末思想とは違います。終末思想には、文字通り終わりであり、先がありませんが、末法思想には次があるのです。新たな未来が控えているのです。末法思想とは、人類のあなた方の心による進化という意味に他なりません。あなた方は、今の混乱の時を経て、進化しなければならないのです。

あなた方人類は、もう進化し終わったのではありません。肉体的な、生態学的な体の進化は遂げ終えましたが、あなた方には重要な、

心の進化がまだ終わっていないのです。古くから、人類の文明は滅びては栄え、栄えては滅びしてきました。その度に一つずつ、人類は英知を学び文明を築きあげ、高度な物質文明を造り上げて来ました。しかしその反面、心の文明、つまり、あなた方が良心と呼び、道徳と呼び、神と呼び、宗教と呼び、私達があなた方に呈示して来たもの、それらの発達が無かったのです。もし、あなた方がそれらのものをその時代に理解したならば、それらの宗教は今残っている筈はないでしょう。

人類の心の面が少しずつ変化してきたように、神の概念もまた少しずつ変化してきました。私達の今の正法が説く、愛の厳しい概念についても同じ事が言えるのです。

よく動物保護、自然環境保護団体等で、人類は自然から発生してきているのに、人間だけが自然破壊を行い、動物を殺戮しているから人間は駄目だ、という意見を聞きます。ですが、私達は、少しそれに異を唱えなければ

ならないのです。人間は、今の状態がもし最高の進化の状態であるならば、何故私達人類は、己の造り出した文明の弊害に目を背け、心を痛めなければならぬのでしょうか。もし、これが最高の進化の形であるのなら、私達は良心に何の呵責も感じないはずなのです。それを克服することが、今のあなた方に与えられた進化の条件なのです。末法を経て、あなた方は新たなニューピアの時代、つまり、人類の新たな進化の局面を経なければなりません。

お解り頂けるでしょうか？

今の行き詰まりは、生まれ変わる為の行き詰まりでしかないのです。末法思想になり、地球が減びるから、人類はもう駄目になるから、それだから神に縋すがって生きよう、そういう甘い心、そういう卑しい心では、天はそういう者には救いの手は差し伸べません。

お判りでしょうか？

それでは、あなた方は今日、この私の話を聞き、そして講師方の話を聞いた後、家に帰ったら、先ずこの事をよく考えて下さい。個々の人生に於いて自分の心の進化とは何なのだろう、私はどういう変化を経て進化してきたか。進化という言葉は、生物学にのみ当てはまるものではないのです。それは、しばしば成長といった言葉でも使われてきました。が、今新たな言葉で、進化という言葉で考えてみて下さい。それがあなた方の今月の宿題です。

飛ぶ鳥は何故美しいのか、海を泳ぐ魚は何故清々しく見えるのか、それをよく考えて下さい。人間は、どうあるのが一番人間らしいのか、それを個々で考えて欲しいのです。

これで私のお話しを終わらせて頂きます。有難うございました。

ガブリエル

私はガブリエルでございます。今日は遠路はるばる来た方と、招いて頂いた方が同じぐらいの人数ということですが、私達は嬉しく思っております。どうもありがとうございます。

正法流布について、お話しをしたく思います。

正法者の中でも、その中で正法流布の為に働く人は、まだまだ少ないという有様です。何故でしょうか。正法が素晴らしいと思っても、それは仏教的な悟りしか得られない方が多いからだと思えます。それは日本が仏教的な土壌が多いということもあるでしょうが、それにしてもキリスト教のように進んで自分の身を投げ出して、正法流布の為に働くとい

うことが、あまりにも少ないようです。

自分自身の悟りを得る為よりも、むしろ人の悟りを得る為に働いてあげなさい。そうすればあなた自身も悟りが深くなるでしょう。ユートピアとはそのようなものです。一人が悟ったからとて何のことがありましょうか。ユートピアというのは、一人の偉大な人物がそれを招くのではなく、一人ひとりの努力に拠ってそれがなされるのです。

努力とは何か。それは学ぶ努力です、正法流布をする努力です。学ぶ努力はさておいて、正法流布の努力はとて敷しいものです。安穩に暮らしていた者にとっては、想像も及ばないでしょう。書店開拓、ビラ撒き、いろいろ方法はありますが、そのどれ一つとして、必ず成功するとはいえないのです。

成功する場合もありましょう、しかし今の段階に於いては、そうでない場合もあります。しかしそれはどの場合でもそうでした。

イエス様はどうだったでしょうか。あの方はたった一人で死んで行かれました。それを広めたのは弟子達です。弟子達はどうかでしようか。弟子達は生前のイエス・キリストを心から信じることはありませんでした。心の片隅にどこか疑いがあったのです。イエス様は、敢えてそれをあまり仰おしやいませんでした。そのような方であつたのです。

無理を強いても、その人の心に流布の心、流布の気持ちに歪みが入ればそれは何にもなりません。流布する者の心に歪みがあれば、それは流布される者にも伝わってしまうからです。そのようなものであつてはなりません。流布する者は、心の中に、純粹な正法に対する信頼がなければならぬのです。

まだ自分は悟りがないから、まだ自分は勉

強中だから——そのようなことは許されません。それは天から見れば甘えの外は何も見られないのです。

お分かりでしょうか。

正法流布とは厳しいものです。この現代に於いてはましてやでしよう。靈の存在を信じ難く、神に代つて登場した科学のみが強要される現代です。その科学さえも、行き詰まりを見せようとしている今、宗教と科学の一致をモットーとする、私達が立つたのです。かつて科学というものは、宗教に対する信頼が失われたときに、神に代つて、神の概念を交えるものとして神の代りを務めて来ました。科学に対する信頼は、かつての人類の神に対する信頼と同じなのです。神は何故死んでしまったのか。古来からあつた神が何故今は通用しなくなつてしまったのか、考えるテーマはいろいろあるでしよう。正法は正に多岐に亘つたテーマを含んでいます。人それぞれに、向き不向きがありますから、それぞれでテ

マを決めて、正法のフィルターを通して研究してみると良いでしょう。

正法流布の為に、自分に自信がない人は、自己確立が進んでいないのです。何故、自己確立が進んでいないのかお分かりでしょうか。

それは正法に対する確信がないからです。霊のことを言う人と人に笑われはしないだろうか、そういう心が必ずあります。そのようなものであってよい筈がありません。私達はこうして現に存在しているのであり、あなた方も又、こうして存在している、これは同じ事実なのです。

流布の活動は地味ですが、それだけに私達の見る目も大きいのです。派手な仕事よりも、地味な仕事をするもののほうを私達は重く見ます。派手な仕事ならば誰にでも出来るのです。ですが正法の流布活動、ピラ撒きや書店開拓ということは、誰にでも出来ることではありません。それは、天上界と正法に対する信頼が絶対な者のみが出来るのです。一軒や

二軒、失敗したからといって何のことがありましようか。心が挫けそうになったときには、イエス様のことを思いなさい、ブッタ様のことを思いなさい。あなた達の偉大な先輩なのです。あの方達を、メシアとして眺める必要はないのです。正法者とはそのようなものです。あなた方の先輩だと思えばいいのです。

先人達は、偉大な足跡を残して行きました。そしてあなた方も今、その足跡を記そうとしているのです。今はまだ、それが分からないかもしれませんが、時が経てば必ず分かるでしょう。今、あなた方は無駄な事をしているのではないか、このピラ撒きは失敗なのではないか、と思うことがあるかも知れませんが、その一歩一歩こそが大切なのです。小さな一歩は大きな一歩になるのです。地味な仕事を続けなさい。そうすれば必ず広まるでしょう。それは私達が確信を持って言えるのです。巨額の金を投じ、沢山の人を動員した宗教ほど早く滅びます。そのようなものなのです。むしろたった一人を始め、そして、第一代の教祖が死んだときには信者は少数に

過ぎなかったが、その後で広まるというケースが多いのです。私達のこれは宗教ではありませんが、そのように胆に銘じておいて下さい。今は分からなくても、必ず分かるときがやって来ます。それはあなた方に於いてもそうです。今以上に、天国シリーズが正しかった、天の存在は間違いないと悟る日が必ず来るでしょう。

誰の心の中にも天と私達が存在するよううに、私達の中にも、あなた方一人ひとりが存在しているのです。あなた方は、敵の迫害に遭い、言葉のつぶてを投げられようとも、私達が傍にいます。あなた方は決して一人ではないのです。覚えておいて下さい。

また、正法者同志もそうであらなければなりません。私達が、あなた方に対して接するように、あなた方も正法者同志、暖かく接し合わなければなりません。私達は時に厳しい言葉を言い、叱咤しますが、それは愛に他ならないのです。それは、叱られたあなたに対する信頼と、人類全体に対する愛情があるからです。あなた方一人ひとりに抛って、人類に広められて行くのですから、あなた一人を叱ることに抛って、人類全体を目覚めさせることにもなるでしょう。そういうものです。

それでは、これで現象を終わりにたく思います。流布活動頑張ってください。私達も頑張ります。どうもありがとうございます。

イエス・キリスト

私はイエスです。皆様、今日この会場にお越しただく事に大変努力を払われた方も多かったと思います。私達も、今悪霊との最後の闘いの中で、日々、あなた方と共にいや、あなた方よりもっと厳しい環境に置かれていると言わねばなりません。それは、私達が常に生命の危険に身をさらしながら、あなた方を守護し、指導し、そしてユートピアにする為、働いているからです。

これは、あなた方に何も私達の仕事を評価していただきたいという為に、今お話ししているのではありません。

それが、私達の喜びであり、人類がこの地球に誕生して以来、又私達がこの星に来て以来の天上界の方達の夢であり、かつ夢で終わらせてはならない、私達の一大事業なのです。

私が、かつてこの地上において正法を説いておりました頃は、まだ人々の心は清く、正しく、素直な者が多かったのです。しかし今

はどうでしょうか。あなた方はいま私のこのメッセージをお聞きになられても、どれ程、あなた方の心に訴えるものがあるでしょうか。

又、あなた方が、天国シリーズ、並びにセルメスシリーズに出会われた時のあの新鮮な驚きと、又それに対する感動と、その決意を、現在も持ち続けておられる方が果たして何人おられるでしょうか。

こう申し上げますと耳の痛い方もおられると思います。しかし、それはやむを得ないのです。何故なら、その方達は、すでに自分はもう、私達と同じ魂の段階まで、精進、修業したと、自ずからのうぬぼれがそうさせているからです。己れの眼を曇らせているのです。お解りになるでしょうか。私達も、永い間、自己の弛まざる精神の研磨、練磨によって、現在の状態にまで向上……いや、まだまだこれから続けなければなりません。

しかし、正法を知ってわずか、五年や十年

で、それを達し得たと思うのは愚か者と言わねばなりません。

世の中を見てみなさい。あなた方、正法を学ぶ者が一般の人々と、どこに差を見出すことが出来るでしょうか。精神の決意、又、実行力において、あなた方よりはるかに優れ、勝っている者が数多くいるではありませんか。それなのに、何故、あなた方は現状から自己を打開し、又向上する為に努力を払わないのでしょうか。努力をしないのですか。

考えるという事を忘れたのですか。考える、という事は以前にも、私はクリスマスのメッセージで伝えたはずです。

考えるという事、常に考え続けなければならぬという事を、お忘れではありませんか？ 今日、今、この場で如何に考えようとも明日からそれを忘れては、何にも成りません。又、いままでの各自の生活をふり返ってみなさい。日々、あなた方は他力的な、依存的な生活態度を少しも改めていないではありませんか。自ら進んで何かをしようとするのではなく、だれかの指示を待ってから行動を

起こしている人が多いではありませんか。

そのようなことで私達と歩を共にして歩いていると思うのは大間違いです。

先程ガブリエル様も申されましたように、これからは、あなた方に今迄よりもなお一層厳しく接したいと思えます。又千乃裕子様に対してあなた方の批評とは言い難い感情的、私的、怨恨と申し上げた方が宜しいかも知れませんが、そういう個人的な感情に依つてのみの中傷、暴言がまかり通っているように思えてなりません。

それを何故あなた方は喜んで、しかも好んで身に付けようとするのですか。私には理解出来ません。

そのような事で一つの物事が成し得るとお思いですか。よくお考え下さい。

今年は、いつものようにでなく、七月という暑い時期にこの会を開いていた事、また、このような私たちで皆様と再びお会いすることが出来て、私は喜んでおりますが、今、申し上げた事は私達にとつては一番気掛

かりなことなのです。

流布活動をして、書店開拓をして、友人、知人に話して、いったい何人の者がこの集いに集まって来ておりますか。そのわずかしか集まらない人の中で何故、疑心暗鬼が飛び交うのですか。

そういう感情を持ち続けるという事は、すなわち、私達天の者とは意を異にしているということであり、又、私達が一番軽蔑する感情であり、又行動であり、意志でもありません。

この意味がお解りいただけただけの方は、今日からそのような己の心を戒しめ、又、少しでもそのような嫉しい心が起こったら、自らを恥じなさい。

そして、今迄自分が気付かず^{まよ}に周囲の人を傷付けて来たことを深く反省しなさい。いかに善行を成そうとも、その行^{まよ}う者の心が醜い

のでは、人の心は打ちません。又、人を動かすことも出来ません。そして一番肝腎なことは、だれの心も救えず、又、自らも救われな

いのです。
よいですか。このような機会をただ淡々と聞いているかも知れません。しかし、私達とて、毎日を自己の生命の許す限り、そして悪と闘っている限り、いつ、どんな危険な目に遭うかも知れないのです。

その所をよくお考え頂き、又、私達の言わんとすること——あなた方のこの地上の人々が本心に心から幸せに成って頂く為に、働き、その事業にユートピア建設、それを成し遂げよう——という決意を再確認し、又、己を叱咤激励して努力していただく事を、ここにお願ひするものです。

それでは私のメッセージをこれで終わらせていただきます。

第三章 天の証

二十世紀の七大天使

正法の集いに於て

「私達の眞の福音を伝える正法流布については、「天国シリーズ」『慈悲と愛』誌の刊行」正法の集い」の三本を支柱に行うものであると天上界より指示を受けて以来、各地に「正法の集い」が増えつつありますが、私達のこの集いが宗教団体視されるむきがないでもないのでこの紙面を借り「正法の集い」についての意義をもう一度確認したく思います。

「正法の集い」は決して宗教団体や教団の結成を目的とするものではなく、将来に於ても結成しないという事。会費、相談料は一切とらず、主宰も報酬を受けず、純然たるボランティア精神にのみ基づいて行われるものである事を、私達は肝に銘じなければなりません。

これらは、正法流布の集いであつては最低守らなければならない基本線であり、職業化された宗教団体結成の愚を再び

使は「み前の使」(angel of the presence) (イザ 63:9) または「天使のかしら」(archangel) (1テサ 4:16, ユダ 9) と言われ、【外典のエノク書には七人の大天使として (新約 8:2 参照)、ウリエル (バヌエル)、ラファエル、ラゲル、ミカエル、サリエル、ガブリエルの名が列挙されている(1エノク 20:7)】この中のミカエルとガブリエルの名は田新約兵に出ている。なお民族にも個人にも「守護

新聖書大辞典967頁
「てんし」の欄

西 澤 徹 彦

繰り返してはならないからです。(またそれらは徹底して廃してゆくべき事柄でもあるからです)

しかし現正法は何よりも宗教と銘うつ必要がなくなってきた事も事実であり、過去の残骸と化しつつある「霊」オカルト、宗教」の觀念さえ人々の意識より追い出せば、正法ははつきり科学であると認められ得るものであります。また正法は宗教と科学の一致を目指すものであるのならば、眞の宗教は科学とも一致しますので本来あるべき眞の宗教に正すという意味で宗教という言葉を用いてよい訳ですが、私達の意識の中に既成概念としてある、墮落し形骸化してしまつた宗教という概念に現正法はあてはまるものではないので、私達は科学と呼び、岩間様の提唱される啓蒙運動とも称する所以でもあります。

そしてまず合理的な科学者の眼をもって善霊と悪霊の認識

を正しく持つという事と、理性を正しく働かせる事が最も要求されてきます。

パンセの中でパスカルはいみじくも次のように言っています。

「もしすべてを理性に従わせるならば、わたしたちの宗教には、なんらの神秘的、超自然的なものがなくなってしまうであろう。

もし、理性の原理にさからうならばわたしたちの宗教は、ばかげた笑うべきものになってしまうであろう。」

この末法の世に蔓延る宗教という宗教は正に後者に属し、悪霊に愚弄されるものとなっているのです。

私達正法者が志向するものは前者であり、現正法のあり方を予見しているかのようにみえるこのパスカルの言葉はまさに、正法のあり方を示しているものであり、真に正法は教育に、科学に、芸術に、啓蒙に、真の意味での宗教に、貢献してゆこうというもののなのです。そして「天国シリーズ」に於いて学び、天国シリーズを補うものとする『慈悲と愛』誌の刊行において天上来と三次元との交流報告を明らかにし、『正法の集い』において集う人達同士の横の繋がりを保ち、正法を広くなるべく多くの方に知らしめようとするものです。

批判について

『天国の扉』でペー・エルデの方々は人心穏やかで、知的

なタイプが多いと述べられておりますが、天上来の導きにより輩出した理性知性豊かな過去の偉人達を思う時、充分なずける事だなど思わずにはいられません。

そして過去の偉人達も含め、理性知性の豊かな方々というのは一様に執着が少なく、物事をつきはなして見る、いわゆる第三者的に物事を見る事が出来るので、その見方には、一貫した論理性と当事者にはなかなか気付き事の出来ぬ客観性があります。

そして批評眼鋭く、批判精神が旺盛で、透徹した眼は、対象のあやまりを即見抜いてしまう故、欠点が目につきすぎ批判せずにはいられぬのです。

日本では、評論家、批評家の概念が西洋から輸入されて日も浅く、定着していない事もありますが、天上来の或いは千乃様の正当な批判を悪口的な感覚でとらえるむきがないでもありません。正しく批判する眼を持たぬが為に、また理念を正す事がないが為にそうした見方をするのでしょう。天上来や千乃様が他の悪口を言う必然性は何もないのです。

私達は正しいものを見分ける為に正しく批判する眼をこやし、断力が働いていなければならぬと思われれます。その為には正しい判断を積み重ね、偽我を改めていかねばならない事はミカエル様が述べておられました。

にせものの再臨のキリスト

さて、乱立する宗教団体の中では、我はキリストの再臨なりとか、エリヤの再来とか、観世音菩薩の化身だとか称し、人々の歓心を集めている教祖が多いのですが、いずれもそれら教祖諸氏の身辺には決まって、天使の護りがないのです。

守護する天使が名乗り出る事もなく、また三次元側からそれを証明する証言もなく、キリストの再臨であると自分一人で広言してはばからないのです。

かつての偉大な予言者、メシヤと呼ばれた方々がこの世に現われた時はかならず、モーセ様イエス様に限らず、アブラハムやマホメットにおいても同様に、ミカエル様やガブリエル様等や他の天使方が守護され導かれたのです。

にも関わらずキリストの再臨と称する方々の身辺には、守護される天使が、名乗り出ていない。

読者が思いつかれる宗教団体の教祖の身辺を考えてみてください。何人かの天使が護っているというような話があるかどうか。

現在の千乃様の身辺を元大天使方が護り導かれておるよう
に、天上界は旧約の時代からメシヤや予言者への一貫して変わらぬ守護や導きを為してきたのです。

それがなくては真にキリストの再臨とは言えません。

本物ならば、新約聖書、ヨハネの黙示録に示されている七

人の天の使いが名乗り出ていなければならぬのです。

そうした信憑性のないものを信じる事は、まったく愚かしい話であり、当人が信じ、とりまきが信じ、三次元でそう認めても、天国では通用せぬものである事を認識しなければなりません。

そうした宗教団体でしている事は過去の仏教、キリスト教、或いはその他の教えの練り合わせであり、人々をメシヤ信仰へ、盲信へと導かせているだけです。

現在の宗教と名のつくものの中には、人間にとって必要なものはもう既に何もないと天上界のお言葉です。

残されている事は人々が現正法に帰依する事のみであり、世界中がこぞって帰依するものでなければ、ユートピアはほど遠いものとなるでしょう。

今後、他から七大大使が名乗り出るようなことがあっても、それはすべて現天上界に背き、三次元を惑わす悪霊の妨害と見做してください。

歴史に顕われる七大大使(元)

読者の方々の中には、七人の元大天使の名は聖書のどこに載っているのだろうと、聖書を調べてみられた方はありますか？

七大大使の事はヨハネの黙示録に録されておりませんがミカエル様の名しか載っておりませんし、読者はおそらく聖書を

くまなく調べられてもみ使いの頭^{かしら}ミカエルと、かの人ガブリエルの名しか出て来ない事に気がつかれるでしょう。

私は、七大天使（元）の名を知って以来、いったいどこにその名が記されているのだろうか知りたい思いでいっぱいでした。

最近やっとそれを知ることが出来、まだ御存じない方のために親しくここに発表させて頂く次第であります。

六月二十九日、国立市の図書館で私は集いの準備をしておりましたが、新聖書大辞典にある次の事柄を見つけ出しました。

「外典のエノク書には七人の大天使として、ウリエル（バヌエル）、ラファエル、ラダエル、ミカエル、サリエル、ガブリエルの名が列挙されている（一エノ20・7）」

胸の高鳴るのを感じた私は早速七月一日の東京の集いにおいて発表致しました。邦語訳があったら読みたいと思っておりましたら、後日岩間様より連絡がありまして、外典偽典の邦語訳の置いてある書店を知っているから見に行こうという事で妻も呼び出して西荻窪の書店に出かけたのですが、果たせるかなエチオピア語のエノク書第二十章に六人の天使の名を見出し得た訳です。岩間様と知江子と私と七月九日の夕方の事で、その晩は月の奇跡の虹が翌日十日の午後は太陽の虹が見られました。天上界も大きな喜びを表わされたのです。

古き昔より伝わり来た書物に七人の名が載っていたという事は、まったく筆舌に尽くし難い感激で、八月号に掲載されました米谷様の千乃様へお寄せになられたお葉書の文章を拝見し、同じ感激を持たれた方が居られた事に心から喜びの感を深くしている次第です。

外典（アポクリファ）隠れたるもの（意）とは一般に聖書正典結集の時、その選に洩れた諸文書で、七大天使の名が録されているエノク書は旧約偽典（偽典とは著者が昔の聖者、義人などの名を借りて書かれたもの、すなわち偽名の書と言われているもの）に属し、外典中、最も重要な文書の一つとされており、初代キリスト教会では教父が教科書として用い教えていたもので、エノク書にふれ宗教団体ではないけれども初代クリスチャンのような喜びを感じたと千乃様も申しておられました。

エノクという人については創世記第五章によれば、アダムから第七代目に当たりミカエル様によると約五千三百年前の人であるとの事です。エノク五書はエチオピア語のエノク書、第一エノク書とも呼ばれ、左記の五つから成っております。

序論 (一) 天使の書 (二) メンシャの書またはエノクの比喩、譬

え (三) 天文の書 (四) 歴史の書 (五) 教訓の書、結語
前記のエチオピア語訳の写本に対し、スラブ語訳のものがあり、スラブ語のエノク書、第二エノク書と呼ばれ、エノク

は三百六十五歳の時、天使の導きによって天上旅行に出発し、第一の天から第十の天にまで巡歴して、第十の天では栄光に輝く至高者のみ顔を仰ぎ、天地創造のことやその終末の事など教えられる。その後地上に帰ってきて、その子らを集めて、神を畏れることを第一にするようにと教え、誕生と同じ月日に天に昇ったとあります。

エノク五書では(一)と(二)に元七大大使の名がひんばんに出てきております。

第二〇章からの引用では――

以下は、寝ずの番人をつとめる聖なるみ使いたちの名まえである。ウリエル、聖なるみ使いのひとり、世界と天のタルタロスを見まもる。ラファエル、聖なるみ使いのひとり、人間の靈魂を見まもる。ラゲエル、み使いのひとり、世界と光に復讐する。ミカエル、聖なるみ使いのひとり、人類のなかでも最優秀な部分(すなわち神の選)民をゆだねられている。

エチオピア語によるエノク書第二〇章(ウリエルの名も見える)

第二〇章

以下は、寝ずの番人をつとめる聖なるみ使いたちの名まえである。ウリエル、聖なるみ使いのひとり、世界とタルタロスを見まもる。ラファエル、聖なるみ使いのひとり、人間の靈魂を見まもる。ラゲエル、み使いのひとり、世界と光に復讐する。ミカエル、聖なるみ使いのひとり、人類のなかでも最優秀な部分、すなわち神の選民をゆだねられている。エチオピア語、聖なるみ使いのひとり、靈魂を罪にいだきながらの子らの靈魂を見まもる。ガブリエル、聖なる天使のひとり、蛇と(二)デンの園とケルビムを見まもる。

サラカエル、聖なるみ使いのひとり、靈魂を罪にいだきながらの子らの靈魂を見まもる。ガブリエル、聖なる天使のひとり、蛇とエデンの園とケルビムを見まもる。(注)ギリシア語の一つの写本にはこのあとに「レミエル、聖なる天使のひとり、神が復活した者たちをつかさどらされた者、天使長たちの名七つ」とあります。(一、天使の書より)

また四〇章からの抜萃では――

わたしはその後、わたしに同行して、すべての秘密をわたしに見せてくれた平和のみ使いに尋ねた。「わたしが見、その声を聞いて書きとめたあの四人のみ前(の天使)はだれですか。彼はわたしに言った。最初の者はあわれみ深く、めったに怒らない聖ミカエル、第二は人の子らのいっさいの病と傷とをつかさどるラファエル、第三はすべての力をつかさどる聖ガブリエル、第四は永遠の生命を嗣ぐ者たちの悔い改めと望みをつかさどるベヌエルである」。以上はいと高き神の四天使であり、そのときわたしは四つの声を聞いた。(一、メシヤの書より)

(三)天文の書では、選ばれし義人エノクに天文学や暦法に関してウリエル大天使が教え導き啓示を与えております。エノク書は外典中最も多く七大大使の名が残されている書と思われまます。

他の文書では、旧約外典エズラ第二書に、予言者エズラに

啓示を与える「み使いウリエル」。同じく旧約外典トビト書には「七人の聖なるみ使いのひとりなるラファエルなり」と録されておりす。

死海文書の中でヨハネの黙示録を思わせ、クムラン宗団独自の文書とされている「光の子と闇の子の戦いの書」にはサリエルとミカエルの名が録されていると岩間様より御教示頂きました。

聖書外では七世紀マホメット教（イスラム教）の聖典コーランの中に、ガブリエルはマホメットに啓示を与えた天使として、ミカエルは、天地に対する神の命を実行に移し、西風を送る天使として録されておりす。

フランスでは十五世紀にジャンヌ・ダルクに啓示を与え、フランスを救う事を命じた天使として聖ミカエルの名が史実に残されておりす。

旧約外典エズラ第二書は、エズラの黙示録ともよばれ、ヨハネの黙示録、バルクの黙示録（旧約偽典）に並ぶものとされ、最後の審判についても述べられておりますが、この最後の審判については、黙示録に示されているだけでなく、紀元前

七世紀ゾロアスター教の聖典アベスタに、またマホメットの聖典コーランにもその事がふれてあり、天上来は旧約の時代から、時代の流れ、動きに応じて、法という一つの事を説いてきたその片鱗が窺われるようで興味深く思われます。

そしてこれまで挙げた事柄から、私達の擁護する天上来が現在の千乃様を護り導かれていくように、実に旧約の時代から人々を善導して来られた、そしてそれは昔も今も変わらない法一つに貫かれたものであったと思われるかと畏敬の念を禁じ得ません。

現天上来が古くから実在していた事の確信を深めるものとして、この記事が広く受け入れられることを祈りつつ筆を置かせて頂きます。

《参考文献》

『新聖書大辞典』キリスト新聞社

『聖書外典偽典④旧約偽典Ⅱ』教文館

『アポクリファ』殉聖公会出版

パスカル著、田辺保訳『パンセ』新教出版社

歴史に顕われる七大天使

西 澤 徹 彦

聖書に顕われる七大天使（元）（以下敬称略）

今日、天上界を考えるとき、七人の方々は現天上界とは、切り離して考えることの出来ない存在であることが認められます。

七大天使（元）の存在しない天上界は、天上界として考えられないということも今日正法者の間では少しずつ理解されてきつつあるようです。

七人の名は聖書に記され、初代キリスト教会においてはエノク書をテキストとして使用していたことから信徒にその名は知られていました。ところが五世紀以後の聖書正典結集の折、今日外典偽典と呼ばれている文書は典外書とされ、正典から除外されたのです。その中にエノク書も含まれていました。

初代キリスト教会に於いてはエノク書を含むこれらの典外

文書は建徳と教養のために自由に読まれ使用されたのですが五世紀頃になると新約外典に至っては「異端の虚構」「汚れなきものを欺くもの」とレットルをはられ、旧約同様排除されてしまったのです。（天には許されざるカトリック教会の悪業です。千乃）

表 1・2（158ページ）は正典聖書と旧新約外典偽典の中から、七人の名の記された文書とその回数を表にしたものです。この表が示すように、七人の名を記した外典偽典を典外書としたことにより七人の聖なるみ使い達の名も五世紀以後のキリスト教会では忘れ去られることになったのです。ミカエル、ガブリエルのお二方を除いて。

その伝統は今日まで続き、世界的な宣教師ビリー・グラハム氏の著書『天使』にも知ってか知らずか、ミカエルとガブリエルのお二方の名しか見当たりません。

自著において同氏は、誰かが天使について語ったのを聞いたことがないと述べておりますので、天使が彼らのところへ行かなくなったのと彼らの関心が薄いことから、七人のことは、氏に限らず諸外国のクリスチャンの間でも一部の聖書研究家以外には案外知られていないのかも知れません。

それよりも、掌てのエノク、アブラハム、モーセ様、イエス様を導かれたエホバ様をはじめとする天上界の存在は、非科学的な宇宙創造神を信奉するクリスチャンの意識には無いのかも知れません。

次に七人の名の録された外典偽典からの抜萃を個々に挙げ、その方に因むことなども述べたいと思います。

(1) ミカエル（ヘブライ語で「たれか神のごとき」の意味）
十五世紀のフランスの史実。イギリス軍によるオルレアン市の包囲を解き、全フランスを救いに導いた聖女ジャンヌ・ダルクがカトリックの宗教裁判によって、火刑に処せられたのは一四三一年のことですが、その判決が撤回されたのは二十五年後のことでした。

そして教会によって聖人として認められたのは実に一九二〇年のことです。つまり、カトリックは二十世紀に至るまで、ジャンヌに対して正しい評価が下せなかったということなのです。

しかし、神の導きによるものと思われぬ奇跡的なオ

ルレアン市の奪回を成し遂げたジャンヌを遅過ぎながら認めたのなら、その時ジャンヌに啓示を与えたサン・ミッシェル（聖ミカエル）も本物であったことを教会は認めるべきであり、オルレアンの戦いも現天上界の守護下に行われた聖戦であったことを悟るべきではないでしょうか。

二十歳にも満たなかった一少女の仮想の思い込みによって偉業が成し遂げられるはずもないのですから。

フランス生れのイギリス人ジャーナリスト、アン・フリーマントウル氏は、両軍とも大砲を使用していたが、オルレアンの包囲を破り、百年戦争をフランスに有利に導いたのはフランス軍の大砲ではなく、甲冑に身を固めた戦士、ジャンヌ・ダルクに率いられた救援軍の到着であった、と自著に述べています。

処刑の炎が燃えあがったとき、ジャンヌはまだ叫びつづけていました。

「聖ミカエルよ！いいえ、お告げはわたしをだましはしなかった。わたしの使命は神さまの使命でした！」……

さて、ジャンヌ・ダルクを導くことにより、フランスを救出の方向へ向けた聖ミカエルの名は、旧新約聖書（表1参照）には、「大いなる君」「天使の長」「み使いの頭」として、その名が挙げられておりますが、外典偽典では、それとは異った様々の尊称で呼ばれております。「聖ミカエル、大天使、

天軍の長、義の天使、天使長、大將軍……etc」。

記載の主なものから挙げてみますと……

——そこで支配者なる神は、神の天使長ミカエルを呼び出し、彼に言った。「アルキストゥラテীগロス(將軍の意)・ミカエルよ、アブラハムの許へ降り行き、その死について彼に語りなさい——略——」。

そこでアルキストゥラテীগロスは神の御前を去って、マムレの檜の樹の方、アブラハムの許へと降った。——略——アブラハムは彼方からアルキストゥラテীগロス・ミカエルが、非常に美しい兵士の姿をして近づいて来るのを見たので、そこでアブラハムは立って彼を迎えた——略——アブラハムはアルキストゥラテীগロスに言った。「ようこそ、太陽のごとく輝かしく、人の子の総てに秀でて最も美しい、至尊の兵士よ。よくお出になられました。——略——私は、あなたの年の若さがどこから来ているのか、教えていただきたいと存じます。あなたの美しさは、どこから、またどの軍隊から、はたまたどの旅路から、来たのかを、あなたの守護を懇願するわたしに、お教え下さい」——略——そしてふたりは家の近くに來て庭に腰をおろした。そこでこの天使の顔を見て、イサクが彼の母サラに言うには、「母上、御覧ください。父アブラハムといっしょに坐っているかたは、地上に住む種族の人ではありません」と。そしてイサクは駆けて行って彼に拝跪し、

この身体のない靈的なかたの足許にひれ伏した——(『アブラハムの遺訓』から)

アルキストゥラテীগロスは、愛と正義のための戦士としてのミカエル様を如実に表わしていると感じられます。

他に、聖者伝(黄金伝説とも言う)にも、大天使ミカエルが登場してきますが、これは中世ヨーロッパのキリスト教会に於ける教化を目的とした説教の補助的手段として、十三世紀後半、教会の修道士らにより、刊行されたもので、天使の登場は創作によるものです。

(2) ラファエル(「神はいやされた」の意味)

旧約外典トビト書はトビア少年と大天使ラファエルの物語で、比較的識者の間で知られており、聖書の入門書などでもユディト書などと並んで紹介されております。

トビト書が比較的親しまれるのは、ヨーロッパ各地にみられる童話(アンデルセン童話にもみられる)や、イソップ伝にもみられる古代の賢者アヒカル物語のモチーフと共通するものがあるからでしょうか。(イソップとアンデルセンは共にラファエル様とその分身の合体)

——その時ラファエルはふたりをひそかに呼んで彼らに言った。「——略——善を為せ、そうすれば災いはあなたがたを見いださないのである。現実の祈りと正しい施しは、不義の富にまさる。施しを行うことは、黄金を貯えることによさ

る。施しは死から救い出し、すべての罪を洗い清める。施しを行う者は生命をもって満たされる。罪と不義を行う者は自分自身の魂の敵である。——略——とこゝろであなた(トビト)とサラとが祈った時、あなたがたの祈りを主の栄光のみ前にとりなしたのはわたしです。——略——神はまた(あなた)とあなたの嫁をいやすためにわたしをおつかわしになりました。わたしは、主の栄光のみ前にはべり、奉仕する七人の天使みづかのひとり、ラファエルです。——(トビト書)から) このトビト書でも明らかのように、天上でも中心的な役割を担う七天使のことはヨハネの黙示録以外でも強調されています。

(3) ウリエル(「神の炎」または「神の火」の意味)

——すると私のもとにかわされた、その名をウリエルという天使が私に答えて言った。「あなたの心はこの世のことについても大いに誤っているのに至高者の道を把握しようと思っているのか」。それで私は、「はい、我が主よ」と言った。すると彼は私に答えて言った。「私はあなたに三つの道を見せ、——略——もしあなたがその中のひとつでも私に解き明かせたら、私の方でもあなたが持っている道をあなたに示し、何故(人の)心が悪であるのか、教えてあげよう」。——略——彼は私に答えて言った。「——略——地上に住む者は地上のことだけしか理解出来ないのだし、天上に住む者

(だけ)が諸天の高みの上のことを理解出来るのである」。(「エズラ第二書」から)

ウリエル様の名はエズラを導くみ使いとして、またエノクに天文学を教える天使として識者の間では知られているようです。スラブ語エノク書の十章には、エノクに暦法に關して教え、筆記をとらせるヴレヴェイルという名の大天使が登場してきますが、これはエチオピア語のエノク書との関連から、大天使ウリエルのことであると思われる。(そうです。千乃)ユダヤ人の聖典タルムード(偉大な研究の意)のミドラシュでは、ウリエルは「イスラエルに光をもたらす者」と呼ばれています。

(4) ガブリエル(「神はわが力なり」の意味)

イエス様降誕の折、聖母マリアに受胎を告知した大天使として知られ新約聖書「ルカによる福音書」にその名が録されておりです。

旧約聖書のダニエル書では、イスラエルの民について神に祈るダニエルに智慧と励ましを与える天使として登場してきます。スラブ語エノク書では、幽体離脱をさせられて、天上の第七天にまで昇ってきたエノクを励まします。

——次に、かの男たちは私をそこから連れて、第七天に昇らせた。わたしは偉大な光、体なき者の火の軍勢のすべて、大天使、天使、オパニムの輝かしい集いを見た。そして、私

は恐れふるえた。——略——そこで主は栄光の天使のひとりガブリエルを私につかわし、ガブリエルは私に言った。「エノクよ、しっかりとしなさい。恐れることはない。立って私とともに来なさい。主の顔前に永遠に立つのです」。私は彼に答えて言った。「ああなんとやることでしょう。私の魂は恐怖のあまり私の身から離れてしまった。——略——」。するとガブリエルは、あたかも風が木の葉を持ち上げるように、私を持ち上げ、連れて行き、主の顔前に置いた。——（「スラブ語エノク書」より）

(5) ラグエル（「神の友」の意味）

七人の中ではとりわけ記載が少なく、旧約外典トビト書には同名の人物が出てまいりますが、聖なるみ使いラグエルは、エチオピア語エノク書に、わずか二回その名が出てくるだけです。二十章は以前に紹介しました。

——私は燃えさかる、また休みもなくかけめぐる火を見た。——略——私は「休むことを知らないこのものはいったい何なのだろう」と問うてみた。この時、私にしていた聖なるみ使いのひとりラグエルが答えて言った。「あなたが西の方に見た燃えさかりながらかけめぐる火、これは天のすべての

（発）光（体）です」。——（「エチオピア語エノク書」より）

(6) パヌエル（「神の顔」の意味）

この方も記載の少ない方です。

——そこで権能の天使は私（バルク）に言った。「さあ、神の神秘をあなたに示そう」。——略——彼は私を第一の天へと連れて行った。そして巨大な門を私に示した。——略——そこでパヌエルという名の天使が私に言った。「あなたの見ている門は天の門です。天の厚さは、天と地との距離と同じくらいあり、あなたの見た平野の長さは、北と南のへだたりと同じくらいあります」。——略——主の天使は私を第二の天へ連れて行った。——略——我々は翼を与えられて六〇日ほどの道程を進んだ。——（「ギリシア語バルクの黙示録」より）

この邦訳版のテキストでは誤ってファヌエルと訳されているのですが、スラブ語のテキストではパヌエルとなっており明らかに誤訳か誤写であることが認められます。

邦語訳ではパヌエルをペヌエル、或いはファヌエルと訳しているものもあります。

(7) サリエル

以前に紹介したエノク第一書の二十章ではサラカエルの名で記されていますが別の写本では九章にスリエルの名で出てきます。

これはエチオピア語に至る翻訳の過程で、サリエルから変形された形と見られています。（『天国の扉』英訳版212頁参

照)ギリシア語写本や、底本とされるアラム語写本にはサリエルの名で見られるからです。

——「そこで神は天使サリエルを遣わして、次のように言わせました。『ノアよ、立つてそのつるを植えよ。神がこう言われるのだから、この木の苦さは甘さに変えられ、その呪いは祝福となり、そこから生ずるものは神の血となるであらう。その木のおかげで人類は罰を受けたのだが、今度はインマヌエルなるイエス・キリストを通して、その木において上への召しを受け、楽園へはいることを許されるようになるであらう』。——(「ギリシア語バルクの黙示録」より)

死海写本には、ヘブライ語ではつきりサリエルと録されたものがありますがエノク書からの影響ともみられます。

——戦いの部隊編成を変更するための規則。——略——櫓の長さ三キュビト、その槍は長さ八キュビト。

略——櫓の櫓にはそれぞれ次のように書く。最初の櫓の櫓にはミカエル、第二のにはガブリエル、第三のにはサリエル、第四のには右にラファエル、ミカエル、ガブリエル、左にサリエルとラファエル。そして「ハ」四つの「ハ」に「:」——(死海写本「戦いの書」より)

そのほか、ユダヤの聖典タルムードのベラコスにも、その名があります。

コーランに頭われる(元) 七天使

ゾロアスター教(BC七世紀頃)の聖典アベスタでは、アラマズダ(エル・ランティ様)をとり巻くスペンタ・マイニユと六人の「慈悲深き神々」が、その痕跡として残されているのみですが、AD七世紀のイスラム教の聖典コーランに於いては二人の天使の名が認められます。

——言ってやれ、「何者ぞ、ジーブリール(ガブリエル)に敵するは。(そのような人は神の敵。なぜならジーブリールこそ)アッラーの御許しをえて汝の心にコーランを齎し、それに先行するものの確証たらしめ、かつ信仰厚き人々のための導きとなし、喜びの音信となした者であるぞ。アッラーと、その天使たちと、その使徒たちと、ジーブリールとミールカイル(ミカエル)とに対して敵となる者は、アッラーこそ、そのような無信仰な者どもに敵にましますぞ」我らは汝に数多くの神兆、誰の目にも明らかな徴を下した。それを信じないのは邪曲のやからばかり。——(「コーラン第二章牝牛」から)

伝承によれば、マホメットがメッカ近くの山中で大天使ガブリエルの啓示を受けた時、光が目がくらみ顔をそむけたが、いかなる方向に目を向けても目の前にガブリエル様の姿が現われたとのことです。

十三世紀後半か十四世紀初頭に、アラブ人によって書かれたとされる「策略の書」にも、ミカエル、ガブリエルのお二

方の名が見られますが、これはこの書がコーランの注釈書や、イスラムの歴史家の著書からの引用などから作成されており（それらの書物は今日失われたものが大部分とされる）、挿話や、宗教史上の有名な人物の名を借りて書かれた創作などうめられているのです。

——カインは、アベルを殺したのち——略——屍を皮袋に
いれ、背に負って運んだが、やがて屍は腐って、悪臭を放ち
はじめた。——略——その時神は天使ガブリエルとミカエル
に命じてこう言われた。「地上に降りて、どのように兄を埋
葬するのか教えよ」。ガブリエルとミカエルは大鴉の姿とな
って舞い降りた。二羽の大鴉は争い、片方が他方を殺した。

——略——鴉は嘴と爪で土を掘り、そこに屍を投げこむと地
面の高さまで土をかぶせた。カインは叫んだ。「私は何と愚
かだろう。兄の腐った亡骸をあのよう^{なまから}に隠すことを真似られ
ないとは」。——（「策略の書」から）

芸術作品に顕われる（元）七大天使

古今の芸術家はこぞってその題材を、外典偽典を含む聖書
に求めています。その影響から、芸術作品にも天使が登場
してくるようになります。（ここでは主なものとどめる）

天使は作者の創作ではなく、外典偽典にその素材が求めら
れたのは、それらに作者がひかれたからに他なりません。

天堂界行脚を叙事詩に表わしたダンテ（ミカエル様本体

〔伊〕1265～1327〕の神曲には、ダンテの聖書を下知識として
のガブリエルロ、ミケル、ラファエルの三天使が登場してき
ます。

特筆すべきは、ヒエロニムス（ガブリエル様本体、390～
420）、初期キリスト教会に於て師父といわれた。典外書には正
典とはつきり区別をつけ、アポクリファという語を用いた。
よく人を批難したといわれ、教会のキリスト教史ではあまり
よく書かれていない。ライオンの足にささったトゲを抜いて
やった話で有名）が、天使たちが他の宇宙が作られたときよ
りもずっと以前に（三億六千五百万年前を示唆するものでし
ょう）作られたことを記している、ということが神曲に述べ
られており、ダンテはまた、それらのことは福音書にも述べ
られていて注意すればわかるはずだとも言っております。

ダンテは予言者として、聖書に述べられた聖者や、過去に
天上界の輩出した聖なる証人について、自分の新たな体験を
通して証し、襲ったものでしょう。

他に、外典から引用としては、ミルトン（ミカエル様分身
〔英〕1608～74）の失樂園に四人、ゲート（ラファエル様分
身〔独〕1799～1832）のファウストに三人の大大使が起用さ
れています。美術の世界では、ルネッサンスの画家が、こぞ
って宗教絵画に天使をとりあげています。

大大使ミカエルを描いたものとしては、ラファエルロ（ラ

聖書 (表1)	新約		旧約	
	ヨハネの黙示録	ユダの手紙	ルカによる福音書	ダニエル書
ミカエル	1	1	3	3
ガブリエル			2	2
			2	5

元七大天使の記載されている文書とその回数
(本邦訳のみ)

旧新約外典偽典 (表2)

	旧約		偽典		新約外典		シビュラの托宣	バクロの黙示録	ニコモの福音書	ニコフ原福音書	戦いの書(死海文書)	アブラハムの遺訓	モーセの黙示録	アダムとエバの生涯	パルクの黙示録(ギリシヤ語)	エレミヤ余録	エノク第二書(スラフ語)	エノク第一書(エチオピア語)	トビト書	エズラ第二書	エズラ第一書	
	ミカエル	ラファエル	ウリエル	ガブリエル	ラダエル	パヌエル																サリエル
ミカエル	17	12	1	16	21	14	25	4	3	18	131											
ラファエル	11	14			1	2					28											
ウリエル	3	15	5		3	1					24											
ガブリエル		8	4		1	2	1		1	17												
ラダエル		2								2												
パヌエル		5		1						6												
サリエル		1		1				2		4												
	3	11	62	16	1	18	24	17	25	10	1	3	18	3	222							

は、サン・ミッシェル(聖ミカエルのこと)が私にくださったものだったのです。ああ、あの剣、あの輝く抜身の剣、それは憎しみの剣ではなく、愛の剣だったのです。

(注) 文中及び引用文献中に表われる大天使方は、天上界において人事異動、役職交代により、一七八年七月一日付を以て、それぞれミカエル大天使長はミカエル大王、ガブリエル他六大天使は九次元に上がられました。ラファエル様、ウリエル様は大王補佐です、従って元七大天使と記述しました。詳しくは『天国の証』、『セルメス』をお読み下さい。(編者)

ラファエル様本体(伊)1483~1520)の「聖ミカエルと悪魔」が知られていますが、ポッティチェリ(ウリエル様本体(伊)1445~1510)も鎧冑の兵士の姿で描いています。大天使ガブリエルを描いたものとしては、受胎告知が知られレオナルド・ダ・ヴィンチ(ミカエル様本体(伊)1519)やポッティチェリ他の画家がこぞって描いています。ラファエル大天使とトビア少年を描いたものとしては、ラファエルロ、レンブラントがあります。また稀には大天使ウリエルを描いたものもあります。音楽の分野では、ミルトンの失楽園をテキストにしたハイドン(バルエル現大天使分身「オーストリア」1732~1809)

のオラトリオ「天地創造」があります。ここでは、ウリエル、ガブリエル、ラファエルの三人の天使がアリアを歌います。フランスの現代作曲家アルテュール・オネゲル(エル・ラソティ様孫分身、1892~1955)のオラトリオ「火刑台上的ジャンヌ・ダルク」では、ポール・クロードルの詩により、ジャンヌが叫びます。「花が咲くときではなかったのにミラベルの樹に花が咲き、実がなるときではなかったのに桜の木に実がなったのです。——略——そしてジャンヌは、その年の五月から、戦いの車に乗るようになりました。——略——ああ、両手を引き裂くこの鎖の音をお聴きなさい。——略——ジャンヌが剣を手にして何をしたかごぞんじでしょう。あの剣は、サン・ミッシェル(聖ミカエルのこと)が私にくださったものだったのです。ああ、あの剣、あの輝く抜身の剣、それは憎しみの剣ではなく、愛の剣だったのです。」

フランスでの七大天使

西 澤 徹 彦

ジャンヌ・ダルクの手紙

またまた素晴らしいものを見つけましたので、この誌面を借り御紹介します。

次に掲げるのは、ジャンヌがイギリス軍に宛てて出した手紙の全文ですが、読者はこれを読まれどうぞお感じになるでしょうか？

—ジャンヌの手紙(全文)—

「イエスス・マリア

イギリス王、並びにフランス王国の摂政を名乗るベドフォード公、ギョーム・ドゥ・ラ・プール、スユフォール(サフォーク)伯ジャン・タルボット閣下、そしてトマ(トーマス)・ベドフォード公の副官と名乗るスカル(スケールズ)閣下の皆様様に、天の王なる神の御名において命じま

す。天の王なる神からここに遣わされた〈乙女〉に、あなた方が手に入れ、あなた方がフランスでむりやり奪ったすべての良き町々の鍵をお返し下さいますように。彼女(ジャンヌのこと)はここに王家の血統を要求するため(オルレアン公シャルルの解放を意味する)神から遣わされてやって来たのです。

もしあなた方が彼女の理を認められ、フランスをもともどされ、あなた方がフランスに負わせたものを清算なさいますなら、彼女はただちに平和をもたらず所存でありません。オルレアンの町に立ちほだかっている射手たち、歩兵たち、高貴な方たち、そしてそうでない方たち、あなた方すべて、神の命においてあなた方の故国におもどりなさい。そうするおつもりがないのなら、〈乙女〉からの知らせをお待ち下さい。〈乙女〉はあなた方の前に束の間姿を見せ、

あなた方に大損害を与えることになりましょう。

イギリス王よ、故国におもどりにならないのなら、私はたたかひの長^{なが}です、そして私はあなたの国の人々をフランスの何処^{どこ}まででも追いかけます、そして彼らが望もうが、望むまいが、私はそうさせますし、彼らが従わないなら皆殺しにいたします。私はここに、闘い合い、あなた方をフランスの外に追い払うために、天の王なる神より遣わされてやって来たのです。そして、もし彼らが従うなら、私は彼らを祝福いたします。他の考えを持つてはなりません。何故なら、あなた方は聖母マリアの御子、そして天の王なる神のものであるフランス王国をつなぎとめることはできないからです。

しかし、王シャルルはそうすることができません。彼はフランス王国の眞の継承者なのです。天の王なる神はそれを望まれ、そのことは彼に〈乙女〉を通じて伝えられています。彼シャルルは、パリにそのよき伴侶として入ることでありましょう。もし、あなた方が、神からの、そして〈乙女〉からの知らせを信じようとなさらず、私たちの理をくんで下さらないなら、あなた方をいかなる場所でもみつげ出し、あなた方を襲い、我がフランスに一千年来耳にしたことのないようなとてつもなく大きな勝どきの声を上げることでしよう。そして、天の王が、あなた方が彼女や彼女

の良き兵士たちに全力をあげて攻撃をかけてもかなわぬほどの力を、彼女に授けられるであろうことをよく覚えておいて下さい。

いづれ、戦場で天なる神がどちらに軍配を上げるかおわかりになられましょう。ベドフォード公様、〈乙女〉はあなたが御自分の首を絞めるようなまねをなさいませぬようお願いし、かつ要求いたします。もし、あなたが彼女の理をくんでくださるのなら、あなたは彼女の仲間となられましょう。ここでは、キリスト教徒がまだ手つけた事のない、最も美しい計画が遂行されようとしているのです。そして、もしあなたがオルレアン^{Orléans}の町に平和を望まれるなら、どうか回答をよこしていただきたいのです。それをなさらぬ場合は、あなたはすぐにあなたの記憶に留めねばならないような一大損失をまねくことになりましょう。

聖なる週^{Semaine}の火曜日に記す

(一四二九年三月二十二日のこと)

(訳出の対象としたフランス語文は、レジューヌ・ペルヌー(HB)のフランス語訳及びリュシアン・ファールブルの同訳を参照した。なお()内の註はリュシアン・ファールブルおよび訳者のものである。)ジュール・ミシュレ著『ジャンヌ・ダルク』より。

もう一通、今度はジャンヌがトロワの住民に宛てた手紙です。

イエスス・マリア

愛する良き友、トロワの町の殿様方、商人の方々、住民の方々へ。お許しただければ、〈乙女〉ことジャンヌは、ジャンヌの正しき導き主であり、日々その王国のために身を粉にしておられる至上のお方、天の王の命により以下のことを皆々様に乞い願ひ、告げ知らせます。皆様は生まれ正しきフランス王に真の恭順と感謝をお示しにならないければなりません。王はまもなくランスに、パリに入られることでありましょう。たとい誰が反対しようとも、神の助けをかりて聖なる王国に属するその良き町々に入られましょう。誠実なフランス人の皆様、シャルル王の面前にお出まし下さい。何の間違いもありませんように。皆様の身の安全も、財産も、申し上げたとおりにして下されば、御心配はいりません。もし申し上げた通りにして下さらないなら、わたしは皆様の命にかけて以下のことを約束し、保証いたします。わたしたちは聖なる王国に属すべきすべての町々に、神の助けをかりて入ってゆくでしょう。そして、そうした町々に良き平和を打ち立てるでしょう。たとい誰が反対しようともです。神の言うことをおききわけ下さい。神が皆様をお守り下さいますように。御返事を早急に願ひま

す。

トロワの町の前、サン・ファルにて記す。

七月四日火曜日

この二通の手紙は、ジャンヌが文盲だった故、ジャンヌが口述し他の人が書記したものです。またジャンヌの手紙として保存されていたものです。

さて、この二通の手紙を読み比べられ読者は、どのようにお感じになりましたでしょうか。

人によつては、最初のイギリス軍宛ての手紙は、何故か天上界のメッセージに接しているような錯覚にとらわれた方も居るのではないかと思います。

そうです。実はお察しの通り天上界からのメッセージなのです。

つまりジャンヌを霊能者とし、高次元の方が口述筆記させたものなのです。

二番目の、トロワの住民に宛てた少女らしさを感じさせる(勿論、天上界の指示が伺われる内容だが)ジャンヌの手紙に比べ、何と厳しく崇高さに満ちた手紙でしょう。

ジャンヌの手紙の中に、私はたたかいの長おさです、とあるのはこれはもう現天上界の王、ミカエル様その方を指すものしかありません(当時大天使長、外典には天軍の長とある)。

妻の知江子が府中市の書店からジュール・ミシュレの『ジャンヌ・ダルク』を購入し、手紙を読み、これはミカエル様の口述されたものではないかと言い出したことからはじまり、ミカエル様の現合体者千乃裕子先生にお尋ねしたところ、ミカエル様が当時、ジャンヌに口述させ、筆記させたものであるとのことでした。

二通の手紙を読み比べて解るように、ジャンヌ自身ならば、乙女、彼女等の第三人称を使う筈がなく、さらに私という言葉が出てくることよって、ジャンヌ一人が口述した筈にも関らず、他の意志、他の方の介入が伺われるのです。

神の口述によるものであることを知っていたジャンヌは、自身で口述したトロワの住民宛の手紙に、それを補足するかのように「乙女」ことジャンヌと書いているのです。

この事実は、ジャンヌに靈能があり、天上界からの言葉を受取るのが出来たことを裏づけるものであり、彼女は、聖ミシェル（聖ミカエル）か聖ミシェルに似せた見せかけのものはよく見分けられるとも述べています。

つまり、当時、悪霊やサタンがミカエル様の名をかたつて現れることがあったが、それが偽物かどうか、見分けられたということでした。

悪霊の靈言を善悪の見境なく靈示してしまうとステリー

靈能者とは違った現正法の靈能者としても立派に通用するよ
うな判断力を備えた女性だったということが解ります。

ミカエル様の指導によるものであることは、言うまでもないことですが、ジャンヌとても、最初は、聖ミシェルかどうかかなり疑ったと述べており、最初の時は自分がまだ幼い子供で恐ろしかったただだったが、その後聖ミシェルは多くの事を教え示してくれたので、これが聖ミシェルだと堅く信ずるようになった。この事は、ミカエル様が千乃先生に最初に名乗りをあげられた時と大差似ているではありませんか。

つまり良識ある人格者というのは、ミカエルと名乗られてすぐ信じ込んでしまうのではなく、本物かどうか最初はかなり疑うということでしょう。

悪霊の靈言をまにうけて靈示し、消滅宣告を受けた靈能者などは、ジャンヌの足元にも及ばない訳です。

彼女は確か十九歳で処刑されたのでした。

聖ミシェルに会うと非常な歡喜を覚えたと言い、聖ミシェルに会う時は大罪を逸れているように感じたと言っており、筆者の体験からもまったくこの通りであり、このことは千乃先生が一番よく御存知のことと思います。

自分ほど幸せな者はないと、はっきり述べておられ、筆者も千乃先生も、真底から、そう思っていると、確信していま

す。

前記のミカエル様口述のジャンヌの手紙に対し、当時のフランスカトリックはどのように反応したかと言うと、以下裁判記録から抜萃します。

第二十一条 《同じく。被告ジャンヌは軽薄・傲慢にも、イエヌス、マリアという二つの名を用いて書翰を書かせ、十字のサインを付して、これをわが国王陛下並びに当時フランス王国摂政であったベッドフォード公殿、およびオルレアンを攻囲中の諸侯に送った。しかも同書翰の内容は邪悪にして有害、カトリック信仰にふさわしからぬ記事を含むものであった。それは次に掲げる通りのものである。》

右の第二十一条に対しジャンヌは、本日三月二十七日、書翰については傲慢な気持で書かせたものではなく、わが主の命令によつたものであると答え、右書翰の内容については三つの語を別とすれば自分が書かせたとおりのものであると承認した。

第二十二条 《書翰全文》

聖霊の書翰を邪悪にして有害と決めつけるフランスカトリックが当時かに正邪の判断がつかず偽善に満ちていたかが伺い知れ、ミカエル様天上界に矢を射たことになる判決文が現在も、彼らの恥をさらすかの如く、記録として残っている

のです。

次にジャンヌの靈視に関してはどうかと言うと、十三歳のころ彼女を訪れた最初の声はどんなものだったかの質問に対し、自分が目の前に見たのは、聖ミシエルであったが、独りで現れたのではなく、天使達を多勢伴っていたと答えた。

聖ミシエルや天使達を具体的な姿で実際に見たというのかと訊ねると、「あなたを見ているのと同じように、私のこの眼で見ました。天使達が私から離れてゆく時私は泣きました。私と一緒に連れて行ってしまうて欲しかったからです」と答えた。

聖ミシエルはどんな服装をしていたのかの問に対しては、「それはあなたにはまだ答えられません。話してよいというお許しをえておりません」と答えた。

彼女には勿論靈聴があり、霊の言葉を聴きとろうとする様子が伺われるものとしては、ある事には答え、他の事には答えないという区別はいかなる方法でつけるのかとの問に対し、ある事については許可を求めているところであり、ある事については許可を得ていると答えた。つまり答弁に際しても話す内容を絶えず天上界よりチェックされ、また彼女自身了解を得てからでないと話さなかつたということが伺われます。

また靈示の正確さを期すために、明らかに言うことを禁ぜられているのかとの問に対し、「許されているか、どうかまだ

よく解りません」と答えています。

最初のイギリス王に宛てた(ミカエル様口述)書翰中、乙女に降服せよ”は”国王に降服せよ”でなければならぬし、また写しにある”たたかいの長”および”闘い合い”という表現は原書翰にはなかったものであると、裁判に於いてジャンヌは供述をしているのですが、この誤記について、キシユラ、シャンピオン等ジャンヌ史料の編者達は、ジャンヌの敵の故意のしわざではなく、ジャンヌが承認した教通の写しに悉く記載されており、寧ろジャンヌの記憶違いであろうと推定しています。

筆者も同感で、ジャンヌの自分中心にしたくないという謙虚な姿勢の表れがこの供述に伺われます。

”たたかいの長”は、あくまでミカエル様御自身のことを述べたにすぎなく、天の王なる神とは、エル・ランティ(エホバ)様を指したものであることは言うまでもないでしょう。以前、千乃先生のお母様と電話の最中、千乃先生の声で、「夫が妻を裏切る筈がない」と言ったのが、聞こえたことがあり、オヤツと思つたことがあります。

女性である千乃先生が「妻が夫を……」と言うのなら判るが、「夫が妻を……」というのには解せない話なのです。

ところがミカエル様御自身が千乃先生の声帯を通して「夫が妻を……」と言つたのなら大変よく理解出来るのです。

ジャンヌ自身はおそらく、ミカエル様がジャンヌの意識に働きかけて口述させたことを知らなかったか、或いは、天上界としては、ミカエル様が口述したことを明かすつもりはなかったと推定されるので、ジャンヌに供述させなかったか、霊能者の意見も聞いてみなければ何とも云えませんが、後者であつた可能性もあります。

ジャンヌがシャルル七世と接見の際、貴族の群れの中にわざと混りこんでいた王をひと目で見抜いてしまい、はじめ王が自分は王ではないと言ひ張つていたのに、彼女は跪いて王の膝に接吻した。そしてジャンヌが諸天の王は、シャルル七世がランスの町で王冠を戴かれることを望んでいる旨、告げると、王は彼女ひとりを別のところへ連れていった。そしてしばらく会談して何事かを話しおえたふたりは、ともに顔付が変わつていた。

この”顔付が変わつていた”というのは、イエス様の山上での祈りの後の変容と一脈通じるものがあります。

つまり高次元の霊がその人に入つたり、或いはエネルギーがそがれると、その人の容姿、起居振舞が、高貴に、優雅に、厳しさを備えたやさしさと、美しく変化するのです。

これは気がつく人と気がつかない人があります。

のちに告解師に語つたところでは、ジャンヌは王に向かつてこう言つた——「神の御名において汝に告げる。汝はフラン

スの《眞の継承者》であり《王の息子》である」と。

つまりジャンヌは、王の前で天上界の言葉を告げた。現象をしたと思われ、そのことによって二人は天上界より、大きなパワーを賜わり、顔付が変わったと、推定されるのです。

ジャンヌは、時に応じて現象をした霊能者であったことがここでも伺われます。

ポワチエ大学の神学教授である修道士セガンはジャンヌに訊ねる。「お前は神を信じておるのか。よいか、神は我々がお前の話を信用することなど望んではおられないのだ。少なくともお前が何か徴を示さない限りは」。彼女は答えた——「私は徴や奇蹟を行うためにポワチエにやってきたのではありません。オルレアンの囲みをとくことが私の徴になるでしょう」。

後に、ジャンヌはオルレアンの囲みを解きこの徴は証明されます。

ジュール・ミシュレの「ジャンヌ・ダルク」によると、この聖女にとってもっとも危険だったことといえば、それは彼女の聖性そのものであり、民衆からの尊敬であり、民衆の讃美だった。ラニーで、彼女は死んだ子供を生き返らせてくれるようにと嘆願されたことがあった。アルマニャック伯は彼女にいずれの教皇に従うべきか決めてくれるよう手紙をしたためたこともあった。もしジャンヌの返答（多分改変されて

いる）を信用するとすれば、彼女は権威そのものを判断するためにもおのが内なる声を信頼して、戦いの終わりには決ましましょう、と約束したらしい。しかもそれは傲慢なわけではなかった。彼女は決して聖女を気取りはしなかった。彼女はしばしば、自分には未来などわかりはしないと告白している。

合戦の前日、ジャンヌに王が合戦に勝つかどうか尋ねた。すると彼女は、自分にはそんなことは全然判らない、と答えている。つまり未来のことは判らないのが当たり前であり、未来を予言したり、それが当たったりするというのは、逆にどこかおかしいと考えてみるのが自然でしょう。出来る筈のないものが出来るというのがおかしいからです。

ブルジュで、女たちが十字架や珠数に触ってくれと懇願すると、ジャンヌは笑い出し、投宿していた宿のおかみのマルグリットにこう言った——「あなた自身で触って下さい。誰が触っても御利益は同じですよ」。ジュール・ミシュレによると、高揚状態の中でなお良識を失わないことがジャンヌの非凡な特異性だったと述べているのだが、つまりこの状態が、高次の善霊の意識であるということが言えます。

そしてそのことが、彼女を裁く裁判官たちを執念深からしめ、スコラ学者や、彼女を何かに憑かれた者として忌み嫌った屁理屈屋どもは、彼らが彼女を狂女として莫迦にすることが出来なければできないほど、そしてまた、彼女がしばしば

彼らの理屈を、より高い道理のまえで沈黙させればさせるほど、彼女に対してますます残忍になった。彼女が殺されるだろうことを予見するのは困難ではなかった。

このことはイエス様の明敏さが、ローマ兵や他のユダヤ人、僧侶達が残忍さをつのらせ十字架につけさせたことと大変よく似ています。イエス様、ジャンヌも、天への信義を守るためにも、善霊の意識を維持し、正義をつらぬいたのでしょう。

当時のフランス人はジャンヌの行為を理性でとらえることをしなかった。表面のみで判断していた。それがフランス人に永遠の遺恨を残すことになったのです。

《引用参考文献》

ジュール・ミシュレ著、森井 真、田代葆訳『ジャンヌ・ダルク』
中央公論社 高山一彦編・訳『ジャンヌ・ダルク処刑裁判』現代思潮社（絶版）

イエス様は何故苦痛なく昇天なされたか？ (I)

千 乃 裕 子

大脳と電流という言葉から、ついでにこのこともまず機関誌に発表しておきたい思います。

それはイエス様の十字架上の死に関しての天の實在の証となる、素晴らしい奇蹟でもあり、頑迷なクリスチャン他諸々の天に従わぬ宗教人を顔色なからしめる、その物理化学的解明でもあるのです。

多くの方がマスコミヤ「聖骸布」という単行本でお読みになり、トリノの聖骸布は十字架から下ろされたイエス様のお身体をお包みしたまさにその布であることが、『光の下に』で私がお先に先駆けて発表した通り、科学者によって証明され、認められたことを御存知であると思います。

その布、リネンにネガフィルムのように写し出されたイエス様のお顔は、あれほどの残酷な扱いにも耐えて、実に安らかに苦痛なきお顔です。この「苦痛の跡を留めぬお顔」につ

いて、宗教関係者も科学者も、何一つ疑念を抱こうとしないで、これこそ神である証としか考えないという所に、私は宗教に関する非科学性を今更に痛感するのです。

布フィルムからも判る通り、イエス様は真正正銘人間でいられます。人間ではなく神が人形を取られていたのだ、等という宗教馬鹿には何を説明しても無駄でしょうけれども。

そして人間であるからには、拷問に等しいやり方であのようには無残に傷つけられれば、苦痛に歪んだお顔をして死なれるのは、医学生であつても知っているはずで、エジプト第十七王朝のセケネンレー王のミイラは、頭と顔を手斧で五六カ所割られ、苦しみの形相を残しているとのこと。手斧だったからだろう、等と馬鹿げた反論は伺いたくないものです。

では何故イエス様は苦しまずに死なれたか。天上昇元七大

天使方は、イエス様が苦痛を感じないよう、お守り申し上げた、と『証』でミカエル様が述べておられます。

その通りなのです。私はその方法を、ミカエル様に詳しくお伺いしました。ミカエル様によれば、頭部から電氣的刺戟（微弱電流）を与え続ける事によって、イエス様は苦痛を殆ど感じられなかった、との事でした。何故感じられないかは、その刺戟によって痛覚が麻痺する効果があることをペー・エルデで学んだから、とのお答えでした。

私も同じように心臓発作時の痛みは鈍痛位で、医学書にあるような症状は信じ難いほどです。

それに関連して過日米本明様が、中国の針麻酔で足の裏の土ふまずから微弱電流を流すと、脳幹にモルヒネ様の物質が生じるそうですが、と言われ、天上界は頭頂からなので、多分どちらからでも同じなのでしょう。それがイエス様の苦痛を除去された元天使方の方法だったのですよ、とお話して下さいました。

そして天上界の頭部からの電気刺戟が針麻酔と同じ効果を齎すことを、脳神経外科で初めて同じ方法を取り、苦痛を除去した報告が七日でしたか（切り抜きに日付を書き込まなかったので判りません）の『サンケイ』夕刊に載せられ、「これだ」と私は心に叫びました。

今や地球人類の科学における進歩は或る方面に關しては、

ペー・エルデを上回るものを示しているとのことです。脳外科医の発見もその一つなのでしょう。

それは次のような記事でした。

『脳卒中後に起こる厄介な痛みを、脳に白金電極を埋め込んで和らげるという日本初の手術が、このほど東京女子医大脳神経センター（所長、喜多村孝一教授）で、成功……手術を手掛けたのは同センター天野恵市助教授をキャップとする河村弘庸ひろゆき講師、谷川達也助手ら八人の「痛みグループ」……退院後、三カ月目ぐらいから……少しでも触れられると体中に痛みが広がるようになった……特に体の左側がひどいため寝るときも右側を下にしたままで、寝返りもできないほどだった。

この激しい痛みは脳の視床近くに出血した場合の後遺症で「視床症候群」と呼ばれる。従来は、治療法がないといわれていた。

しかし数年前に脳に存在するエンドルフィンという物質がモルヒネと同じような鎮痛作用を示すことがわかり、これをきっかけに米国で、中脳の中心灰白質という部分に電極を埋め、体外から電気刺戟を与えて、エンドルフィンの放出を促進、痛みを抑える治療法が開発され既に七例成功している。

一方天野助教授らのグループも、中心灰白質のすぐそばに一時的な電気刺戟を与え、痛みを除く方法を独自に考案、二

十人の患者に応用、成果を上げてきた。そして、この方法でも脊髄中のエンドルフィンの量が治療前の二倍に増えることを確認している』

これで納得しないで、ミカエル様は偽者というキリスト教関係者及び他の宗教関係者が居るとすれば、その人達こそ悪霊に操られ、その住む家、及び教団は悪霊及び死霊及び浮遊霊の住み家となっているのです。

現天上界より高次の他の天上界ありと希望的思考を巡らす人は、①私ならびに現天上界がかくも大胆に且つ自由に驚くべき事柄を天の事実として披瀝出来るはずがない。個々の霊

の行動に統制なき天は実在するはずがない。従って現天上界以外に高次の天上界が若し存在するとすれば、必ずこの自由な発表に対し何らかの制裁があるはずである。②しかしその制裁はなく、天上界及び私は魂の自由な飛躍の中に次々と大胆に他の追隨し得ない真理を発表し、謎を解き明かしている。③即ち、現天上界以外に高次の天上界はない。この単純な三段論法的結論さえ導き出せない人は、大脳が既に動脈硬化症状を呈しているか、自己保存（何らかの利益の為に自らの主張や考えを事実を目を閉ざして固持する）のどちらかに低迷しているのでしょうか。

（一九八〇年四月十日）

イエス様は何故苦痛なく昇天なされたか？ (II)

「ハリ」と「ホルモン」から推理する

高野信義

電気針 (12V200 μ A)の直流を数秒間、穿刺針を通して通電する)で人体のある部位を電気刺激したりハリで穿刺すると鎮痛効果が顕われる事から、脳手術や抜歯等で麻酔として使用されているが、その作用機序は医学的に解明されていない。そこで東洋医学の「ハリ」と西洋医学の「ホルモン」を鍵として謎ときをしてみたい。気楽な気持ちで読んで頂ければ幸いである。

◇第一のカギ (経絡と経穴)

東洋医学では人間の生命とは六臓(肝・心・脾・肺・腎・心包)と六腑(胆・小腸・胃・大腸・膀胱・三焦)で調整され、そのなかの一つでも故障が起こると全体の調子が狂う。これらにエネルギーを与える循環系が人体に流れていて、これを経絡と名づけ、それぞれの循環系に調整される臓腑の名

をつけたのが十二経絡系である。

又、経絡には電気が流れやすい点が一定の形に並んでいて自律神経の興奮している場所であることがわかり、この点を経穴(ツボ)と呼んでいる。つまり経絡は自律神経の興奮点を結ぶ一連の系統というわけである。又、三六五個あるという経穴の中でも百会(左右の両耳を結んだ線と眉間をまっすぐうしろにいく線の交点)は頭のとっぺんにあり、体の中の前三センチの所に前頂、後三センチの所に後頂というツボがあり、これらのツボを使用すると痛みがとまるという鎮痛作用がある。

即ち頭頂葉全域が「痛み」に関係し、その中心が百会というツボであるという事である。

◇ 第二のカギ（ホルモン）

ホルモンとは「刺激する」というギリシヤ語で体内に微量分泌され、作用を受ける臓器の細胞を刺激し活動させる物質である。頭蓋骨底部のトルコ鞍という場所にある大豆大（〇・五グラム）の脳下垂体が、人体のすべてのホルモンを支配している。又、脳下垂体前葉は、視床下部とつながっており、この視床下部に、自律神経の中枢がある。

◇ 第三のカギ（内因性阿片物質）

昭和五十年、スコットランドのマリシャル・カレッジの麻薬研究班は、ブタの脳エキスから、麻薬であるモルヒネと同物質を発見しエンケファリン（脳内因子）と名づけた。このようなものはその後三つ発見され、内因性（脳内で自ら作る）阿片物質と名づけた。

昭和五十一年にエンケファリンは脳下垂体前葉ホルモンの一つであることがわかり、この分解産物が、 α -エンドルフィン、 β -エンドルフィン、 γ -エンドルフィンである（エンドルフィンとは内因性モルヒネという意味）。昭和五十四年、京大の高木教授がウシの脳からチロシン-アルギニンというアミノ酸二個のペプチドを分離し、これがエンケファリンのような内因性阿片物質を遊離し、効くのではないかと

べている。

エンケファリンは視床下部、大脳辺縁系、大脳基底核に、脳幹網様体の中では中脳の、中心灰白質に高濃度に含まれ、

エンドルフィンは脳内に少なく脳下垂体に多く含まれている。

以上三つのカギをヒントとして、ツボの刺激により自律神経を刺激し中枢のある視床下部よりホルモン分泌が促され、脳下垂体前葉、又視床下部、大脳辺縁系、大脳基底核、中脳中心灰白質が刺激され、内因性阿片物質を放出し鎮痛効果を与えるものと思われる。

そこで『J I』五十五年五月号でミカエル大王のいわれる、頭部（頭頂葉）から電氣的刺激を与え続ける事によって（内因性阿片物質が放出され）イェス様は苦痛を殆ど感ぜられなかつた。その刺激によって痛覚が麻痺する効果があることをペー・エルデで学んだから……（15ページ）より、以上三つのカギによる皆様の推理により、ミカエル大王のいわれることと矛盾した所があつたでしようか？

内因性阿片物質	β -リポトロピンのアミノ酸番号	鎮痛作用	作用時間
エンケファリン	61-65	+	5分
α -エンドルフィン	61-76	++	30分
β -エンドルフィン	61-91	+++	4時間
γ -エンドルフィン	61-77	-	

〈書き終わって〉

地球での医学は進歩はしている。しかしやっと糸口がつかめたという時に、既にペー・エルデで学んでおられたというこの事実、私は何と表現したらよいのだろうか。天上界の叡智に畏敬の念を払うと共に、天上界の書によって学ばされる所は無限にあることに改めて感謝すると共に、ヒントを与え又御指導して下さった千乃先生（ミカエル大王本体）と天上界に感謝いたします。

（歯科医師）

〔参考文献〕

- 大木幸介「脳をあやつる分子言語」講談社
中谷義雄「爽快ツボ刺激法」講談社
芹沢勝助「人体ツボの研究」ゴマ書房
久保田康耶・他「歯科麻酔学」医歯薬出版
「ペインクリニックに於ける電気針の効果」広島麻酔学会
藤原知「針灸医学の基礎概念としての経穴、経絡」
その他

〃トリノの聖骸布〃への疑いと反証

千 乃 裕 子

ジャンヌ・ダルク男性説に続いて第二の愚説——十三世紀や十四世紀に画家がリネンの上に描いた像だとか、イタリアの人類学者ビトリオ・デルフィノ教授(バリ大学)によれば、石膏ちこうの像の上に布をかぶせて、その布を撰氏二一〇〇〜二二〇〇度で三十秒間あぶれば、百枚でも二百枚でも出来ると、これは全く非科学的な説を本にし、56年十一月に発刊したとのこと。教授という地位があれば、如何に拙劣な説でも世間は注目するものだと思心致しました。

ヘモグロビンの反応を示す血液の跡、その流れの方向、ムチ打ちの跡、ユダヤ人の容貌ようぼうと三十歳代の身体、各所の聖書記述通りの、数まで一致する傷跡、槍と釘の跡、まぶたの上に置かれたコインの大きさと形の跡、当時のパレスチナで生えたとされる不毛地帯植物の花粉と(死海やネゲブ周辺の典型的な植物)布があちこちに運ばれ、隠されていたとされる

歴史通りの場所や国の植物の花粉。あらゆる可能な、そして厳密な物理化学的測定と調査(炭素14法による年代測定を除く)研究に基づき行われたNASA科学者チームによる発表ですが、『UFOと宇宙』82年新年号参照—参加学者名不明、一九八〇年十月、四十名の科学者が五昼夜にわたってテストを行う、とある)デルフィノ氏説に関するサンケイ記事(一九八一年九月二十八日朝刊)に同時に記述されていた、米国物理学者、ケネス・スティーブソン、ゲアリー・ハバマス両氏及び、四十人の学者が聖骸布を鑑定、本物と断定を下した同じ説の新資料でしょう。両氏は布の写像が自然現象では説明出来ない熱あるいは光の照射で生まれた物としながら、『UFO』誌のNASAチームは、顔のりんかくなどの立体像がどのようににして克明に布に写し出されたかは謎としております。密着していただければ証明出来ない立体的なものとのこ

と。

しかし布に描かれた画像でも十四世紀に偽造した物でもあり得ない、あまりに多くの証拠が分析によって発見されたことは当然すぎるほど当然です。中世の科学技術にも知識にも、キリストが十字架の上で苦痛を和らげる為にはばしば伸び上がり、それによって生じた血液の流れの角度、脇腹を槍で刺

された時にほとばしり出た血の流れの跡——そういった物を偽造する術は皆無。現代でも、これだけ多くの事実を裏付ける前に聖骸布をそのまま偽造することは、実物がなければ不可能なのです。それを結論づけられない学者は石頭でしかありません。

十字架上の死及び復活を示す

〃聖骸布〃実験に先がけてのヒントと解答

千 乃 裕 子

実はこれについては、第四巻『天の奇蹟』下巻発刊まで発表しないと心に決め、『J I』誌にもそう断言しておりましたが、NASAでは（前述の科学チーム）来年辺りにトリノの教会が炭素14法テストに合意するだろうと言っておりまして、こちらはまだ中巻も製本に掛っておらず、下巻が出るのは一寸時期が判りませんので、方針を変えることに致しました。『J I』誌三月号にも同様に発表致します。

真偽論争が現在の実験方法で果たして正しい解答を得、終止符が打たれるかどうか疑問を生じてきたこともあり、一方こちらに先んじて万一正しい説明が得られた場合、私達の出る幕がなくなりません。つまり、真実を知る天上界高次元の方々が自ずからを証明する場を一つ失い、私にとってはこれは耐え難いことです。偽メシヤ、宗教宗派及び非良心的なマスコミが勝ち誇る機会を虎視眈眈と待ち構えているからです。

さて、前掲のUFO誌'82年新年号によりますと、四十名の科学者がテストを行い、どうしても謎として説明を待つ事柄に、

一、いったいどのようにしてその像はリンネルに付着して、完全に立体的な像を形成したのか

二、このリンネルに、どのようにして奇蹟的な立体像が現われたのか

の二点があります。

彼等ほもし布が人間の顔に直接に押しつけられたら、できる像は歪んだものになる。そして一つの実験をやってみて、一人の男の顔に油を塗り、その上に布をかぶせ、その布を焦がして像を得たが、随分歪んでいた。その理由は立体的な物体を二次元の物に投影したからで、結局一、二の論点は謎のままであると書いております。

又、像が押し花のように紙の間にはさまれて押しつけられた葉のように見える。そして実際に押し花は、本の八ページを通してしみを残しており、それは押し花が紙のセルロース繊維によって吸収される自然の化学作用、というよりも酸化作用によってしみが生じている状態だ。その場合、歪んだ像でなく、正しい像が付くはず、だから写像は自然の経過によって起こったに相違ないと推論するチーフ・カメラマンも居ります。しかし、彼等がケネス・スチーブンソン氏とゲアリー・ハバマスの両氏と共に働き、両氏の結論を知った上で語っているかどうか疑問が湧きます。何故なら、スチーブンソン氏とハバマス氏の結論がずばりその解答であるからです。

私は御存知の通り、物理学者でも何でもなく、正法活動と機関誌編集他で、全くの忙しい日を過ごしており、実験器具もなければ設備もなく、専門的な化学実験の方法も知りません。そして正法者の中の専門家にこの実験を依頼し、今年春に（一、二ヶ月で）天の言われる条件を満たし、証明する実験結果を得たいと望んでいる段階です。

ミカエル様の言われる実際に起こったこと——イエス様が安息日に埋葬が禁じられているので、金曜日の午後三時頃息を引き取られてから三時間位して十字架から下ろされ、その後一時間ほど掛けてようやくその近くの新しい墓に仮安置され、型通りに亜麻布で全身をおおい、布ひもで数箇所をゆる

くくくり、腹部と布の間に没薬もつやくと沈香ちんこうの入ったつぼを置いて、塗油もせず、埋葬の儀式もそこそこに、弟子達や母マリア、弟姉妹達が帰宅し、安息日の始まりによりやく間に合ったということが、『聖骸布にもとづく十字架の道行』モンシニョール・ジュリオ・リッチ著、『聖骸布』ガエタノ・コンプリ著、ドンボスコ社及び新約聖書の四福音書、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ伝に詳しく書かれております。

（*）アロエ、没薬、乳香他香料が、塗られたと聖書にあるが、塗るひまはなかった。だから血痕がそのまま残されている。流された血の跡もそのまま。それがイエス様御自身を証明した。（編者）

しかしイエス様が墓に安置されて安息日の次の日、日曜の明け方に、マグダラのマリアがイエス様の復活を知る迄に大きな石で戸のようにふたをされた岩の墓の中で何が行れたかを語れるのはイエス様の復活を可能ならしめた当の天使方（現在のミカエル大王様他の元天使方や天使方）以外にはないことを読者の皆様も納得なさるでしょう。

ミカエル様は言われます。十字架上の死を苦痛少なくする為、頭頂部とうちようぶから間断なく電氣的刺戟を与え続けた後、息を引き取られて一時間、死後硬直が始まる寸前迄、あまりの凄惨せいたんな死を実現させたショックと悲しみに只、ぼんやりと見ておられた。イエス様の魂は身体を離れず、そこには人々のすす

り泣きと号泣の声と真二つに裂けた神殿の幕屋を見て恐れた兵士や見物人を支配した不思議な静寂が、ミカエル様達にも次に為すべき事を忘れさせた。

そして我に帰り、イエス様の魂が身体を離れないように、永久の死が肉体に訪れるのを防ぐ為にあらゆる意志の力を働かせて、四方八方から天使達、大天使達、総勢二十人位で光でもあり熱でもあるエネルギーを与え始め37時間余(聖骸布に包まれてから34時間余り)そして復活されてから2時間余り、続けたと言われます。イエス様を心の底から敬愛しておられて、その死をサタン・ダビデの残虐非道な仕打ちで迎えたミカエル様の胸中きょうちゆうは誰に説明しても理解してもらえない、はり裂ける思いに満たされていたと言われます。イエス様を間接的にしか知らないキリスト教徒があれば慕い、十字架の死を悲しむのですから、ミカエル様の悲しみは、他の誰よりも深く、傷つき、心の血を流し続けられた物であつたでしょう。そして天を仲介する者のこのような死は二度と来たらせまいと固く決意されたのです。それは不幸にもサタン・ダビデの飽くなき悪の野心と謀略で、くつがえされてはきましたか——。

即ちこの与え続けられた電磁エネルギーが(カロリー値は後に実験で割り出されます)筋肉賦活ふかつに役立ち、細胞を枯死こしさせずに済ませるのにその役割を果たしました。

墓に横たえられて2時間ほどして、イエス様の魂は抜け出て了われ、死体は筋肉細胞だけが生かされている状態になつたとのことです。そして34時間、日曜日の明け方5時にイエス様の魂に身体に戻るように言われ、イエス様は聖骸布せいがいふを出られ墓の隅に隠れて立つておられた。そこにマグダラのマリヤが友人と現われ、その時大天使方は封印を切り、石の戸を転がされた。マリヤに話しかけられたイエス様は霊体でした。再び抜け出られて——。

(*) 一説に「布をたたむ」とあるが、復活の状態では立ち上がり、歩く以外の動作は不可能、と天上界の証言あり。(編者)

そしてマリヤが喜び勇んで弟子達の所に報告に行った後、復活の証として、イエス様の御身体を、魂が入られ、動かす奇跡が行われたのです。体温を保ち、筋肉が硬直しない為与え続けられたエネルギーが細胞を死なせず、容易に動かし得たのです。それは生理学の実験でも可能であることを、小動物の実験から専門家でなくとも納得しうると思ひます。

何度も立ち止まりつつ人目を避けた道を二時間後にイエス様の身体がベルス河岸に着く迄動かされ、歩かされて、そして水中に沈められました。その日の夕方以後弟子達に会われたイエス様はすべて霊のお身体——魂であつたのです。

奇蹟その物は経過だけでは大した事には見えなくても、ここに聖骸布に写し出された立体像の秘密の謎解きのヒントが

あり、解答があるのです。

聖骸布が全面に密着していなかったから余計に鮮明に映像が写し出され、それが写真のような平板なものではなく、レントゲン写真のように立体的にイエス様を前面、背面の細部にわたって写し出し、しかも強い放射線でなく、普通の辺りに存在する電磁エネルギーで行われたがゆえに、布と肉体との距離に忠実にネガフィルムを布上に作り出し、レントゲンフィルムのように骨のみを写し出すことはなかったのです。広島の爆心地近く、とある銀行の石段に腰掛けていた人物の影が丸味もそのままに、くっきりと焼きつけられていた——放射線も含めて電磁エネルギーはそのような作用もするものです。しかし勿論これは重ね合わされた部分は写し得ず、布に面した部分のみを写し出すのは電子のメカニズムからみて当然のことでしょう。只レンズを通したのではないので実物大の写像、立体像が現われたのです。

トリノの聖骸布のみがネガの役目を果たし、他の聖骸布は一枚もその形で残されてはいないはず。何故なら、イエス様のみがそのように長時間布を通して電気エネルギーを与えられたからであり、又、写像はスチープソン氏とハバマス氏の説の通り、自然現象では起こり得ず、熱あるいは光の照射によって生まれたからなのです。たとえ全面的に密着していても、押し花のように上下から重石おとしがなければ、似た像は出

せません。

そして聖骸布にイエス様の立体像を写し出す為は何らかの工夫がなされたわけではなく人によって「偉大」という表現をしようと、「何んだ、簡単な」と表現しようと、それは「イエス・キリストの復活を実現する過程での副産物」であったのです。しかも死海周辺地域の強い電磁波の偏在するパレスチナでこそ可能であったでしょう。『天国の光の下に』284頁及び『エルフォイド（天使の冠）』156頁参照）

これらのことは専門的な数字、計算を用いて、改めて聖骸布実験の報告書として、正法者の専門家の方々に提出して頂き、『J I』誌などに発表しようと思っております。

（一九八二年一月二十四日）

（注）

ついでながら、サンケイは朝夕刊共に反キリスト教的記事を書載せるのが好みらしく、反面ローマ法王礼讃とマザー・テレサに関するものは大々的に頁を割き、他方仏教的記事や新興宗教的なものの扱いに何日も紙面を割り当てる、自己矛盾の激しい新聞ですが（反共も容共もお構いなしに掲載することは言う迄もなく）それによると英国で最近、キリスト生存説の資料を十年掛けて集め、結論付けて『聖なる血統の探究』という本をヘンリー・カーンら三人が共同執筆で出し、またそれがベストセラーとなっているとのこと。いかにもミステリー好きの英国人らしい流行本ですが、残念な事に、イエス様には四名の弟様が居られたと伺っております。似た顔だちの

方も居られるはず。あるいはキリストの復活の証明の為の偽系図の偽者。偽メシアを信じたがる人も多いのですから、一笑に付すべきでない」と言つたナンセンスな英国の著名な小説家も、貴族が末裔というこのお話に好感を持つた、いかにも英国人らしい意見ですね。天上界では一笑に付されまし

た。因みに、掲載紙の日曜紙オブザーバーというのはサンケイ仲介の記事からはこういつた興味本位の低俗な内容ばかり。呆れた物ですね。そういう物も載せないと売れないのは判っております。私の本心はサンケイなどは数少ない、筋を通した反共新聞であつてほしいものと思つておりますが――

第四章 正 法

天国と地獄はどのようにして作られたか

千 乃 裕 子

まず、「天国」とはどのようなものであるか。どのよう
の三次元の私達の世界で知られてきたかを宗教史を通して調
べてみますと、それは天上にあると思われる明るい理想的な
世界で、現世や地獄と比較対照的に述べられ、北欧では神や
英雄の住む所、古代メキシコでは貴族の国と解釈されていま
す。

つまり生前の社会的地位や社会への貢献に対しての褒賞的
な考え方が死後の運命としてもあてはめられたのです。

古代ギリシアでは善人の住む所、古代エジプトの宗教やペ
ルシアのゾロアスター教では死者は生前の行いによって裁か
れ、天国と地獄のどちらに属すべきかを定められました。一
般に宗教の教義は、現世において悪人が栄え、善人が苦しむと
いう不合理についての問いかけに始まり、天国および地獄は
どのような所であるかを説くことであり、更に進むとキリス

ト教やイスラム教の天国、仏教の極楽浄土信仰におけるよう
に、天国に入る資格として倫理的価値の軽重を個々の人に定
めるのみならず、その上に「信仰」、つまり神を信じるという
ことが天国に入る為の重要な条件として与えられるのです。

天国は地獄と違って死者がそこでは神となるか、神と共に
住む所とされ、花咲き乱れ、清らかな水の流れとさわやかな
風と妙なる音楽の調和が、現世の苦しみや悩みを一夜の悪夢
であるかのごとく忘れさせ、山海珍味、山の幸海の幸のごち
そうがたらふく食べられる——いわゆる感覚的にあらゆる種
類の満足感を与えてくれる楽園、理想郷として描かれること
が多いのです。

暑熱地帯では「涼しき風」が吹く所、乾燥地帯では「清ら
かな水」が流れる所であり、イスラム教においては美女にか
しずかれる所など、地域的に風土や社会性を反映している面

がみられます。

天国はこのように神が住まわれる所、死後の生命のそれも英雄や善人や信者の世界とされている点で、人間のこの世での生き方や死の問題に関連したもののなのです。

また天国を空間として来世という離れた場所に位置づけるものではなく、人間の理想的な世界として現世の時間としての未来に、あるいは心の内部に求める考え方もあり、その場合も現世の生き方に深い関りがあることですので、宗教思想において天国というものは大きな位置を占めているのです。

また天国を、他の世界や現世の未来に求めるのではなく、心の中の観念的なものとして捕えるのでもなく、現実、この世に実現しようとする運動も宗教の中には見られます。中国にも十九世紀にありましたが、三次元の枠内に留まったので失敗しました。洪秀全による太平天国運動です。

現在私達正法者が為しているのはこの両者を兼ね合わせたもので、今迄に末法と呼ばれる三次元の世界を是正出来なかつた宗教・宗派はすべて無意味な存在であるとし、各人が個々に天と即ち神々と直接に繋り、宗教人や宗教教団の助けを借りずに自分達の手で理想的な平和な世界を作ろう。天への信仰心は不可欠のものであるが、宗教団体といった神と人とを却ってへだて遠ざけるような障壁、みぞは要らない——と呼びかけているのです。

これからはともすれば功利的になり易い人間の手によるのではなく、天が平和運動の主導権を握られ人々を導かれて、世を正しい方向へ向けてゆかれることとなったのです。

さて「地獄」とは何であるか、と申しますと、これは仏教から出た言葉で、悪業によりいろいろな苦しみに遭う地下の牢獄と解釈されてきました。

仏教のみならず天国や極楽に対する暗い忌むべき世界として、これに当るものが広く世界の諸宗教や諸民族を通じて見られます。次のようなものです。

シュメールでは死者が一度入ったら二度と戻ることの出来ない国、バビロニアおよびアッシリアでは暗くて出るに出不れず、ほこりと泥を食べる所、古代ユダヤでは陰気で死者の靈魂が目的のない生活を送る所、古代インドの初期「ベータ」の中では死者は天に行き、最初に死んだ人間であるヤマ（後にこれが閻魔となります）と共に住むが、別に魔物や殺人鬼の住む世界として、暗黒のナラカ（日本では奈落と言います）が説明されております。

古代ギリシアのホメロスの作品には、地の果ての島、あるいは、地下の国ハデスがあるとされ（英語でもヘイデーズ Hades つまりハデスはよみの国となっています）、そのハデスの最も暗い所に死者が居ると言います。

ゲルマン及び北欧民族のヘルは、死の女神ヘルの支配する

国であり、王や英雄ではない死者のおもむく所とされておられ、このヘルは後にキリスト教の影響を受け、ドイツ語の Hölle や英語の Hell、フランス語の enfer として地獄を表わすようになります。

日本の『古事記』に表われる「黄泉の国」は生きている者も行くことが出来るが、暗くて死者には蛆がたかっている、といった所で、これらに共通しているのは、死者または魔物の世界であり、それは生きているものとの世界とは川とか坂でへだてられた遠い所か、地下の国となっていることです。暗くてゆううつな所とされるのは墓場から連想されたものでしょう。

古代においては死後の審判による悪人のおちる世界としての性格はなく、それが現われるのはゾロアスター教以後なのです。

その教義では、死者が「橋」の前で善悪を裁かれ、善人が渡る時はその橋が広くなり渡れるが、悪人が渡る時は狭く縮んで、渡れなくなる。そして火がなく、寒く、暗い地獄に落ちると言われます。

古代エジプトでは死者は地下の国を通る時に試験を受け、オシリス（死者の国の王ですが）の審判において靈魂の重さを計られ、悪人の魂は怪獣に食べられると言ひ伝えられています。

古代インドの善の因果、悪の因果による輪廻の考えを受け継いだ仏教は、生死をくり返す世界として、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六道を定めました。

この地獄には八熱、八寒、孤独の大地獄があり、それぞれにさらに十六の小地獄があるとされています。これが中国を経て、死後の審判の考えを強めました。

浄土思想では、浄土信仰の資格を得る為、厭離穢土、すなわち、煩惱で汚れている現世を穢土、汚れている土と書きまします。それを忌み嫌うこと、それから離れることが求められ、その一つとして先程述べました地獄へ落ちることの苦しみの説かれました。穢土を嫌い、離れなければこういった地獄に落とされるといふものです。

キリスト教、イスラム教においては新約聖書に現われるゲヘナは、旧約聖書のネヘミヤ記に記されている「ヒンノムの谷」から出たもので、この谷は動物や罪人の死体の焼場でした。罪を悔い改めず、神への信仰を認めないものが、最後の審判によって落とされる、永遠の火の燃える所、とされています。

カトリックでは大罪を犯した者の行く地獄インフェルヌムと、大罪を知らずに犯した者または小罪を犯した義人の靈魂が、その罪を浄化する所とされる煉獄（プルガトリウム）があるとされています。

またイスラムでは、最後の審判において善悪の行為が秤られ、不信仰者の落ちるところとして、やはり永遠の火の燃えるジャハナムがあります。

こういったように地獄の解釈もまた死後の世界を取り扱いつつそれぞれの社会に住む人々や信者の生活を倫理化し、道徳心を植えつけ、それに価値を与えて、現世で悪人が栄え、善人が苦しむ問題に解決を与え、また人間存在のあり方自体に反省の機会を与えようとしているのです。

こういった地域別、社会別、宗教の別により与えられている天国と地獄の解釈には改めてそれらを分析してみる時まず共通に一貫して見られるのは、天国は美しく目に映る空にある天の国、つまり理想の国として、それが霊の世界であるうが地上に人々が作り出せるものとして提唱されようが、人々が心地良いもの、あこがれとするもの、そうであれば良いと望むもの、感覚的なものを主体に精神的なもの——煩惱の思いと苦しみから逃がりたい、そしてお互いがこのようであればもっと世の中は住み良く、楽しくなる——こういったものがいいつも表現されているということです。

それに反して地獄は感覚的、精神的、肉体的に人々が嫌悪するもの、厭だと思ふもの、現世の自分達がどつぷりと浸っていてそれから抜け出る策もなく、解決の与えられない、救いのないもの。永久に苦しみと悲しみと悩みと葛藤の終らぬ

もの——そういったものを描写しているということです。

さてもう一步下って大きい立場から地球の外に出てみて眺めてみましょう。

この宇宙の見地から人類の伝承してきた天国（極楽も同じことです——さきほど述べましたようにその国々、地域の違い、宗教の違いで呼び方が違うだけです）を見てみますとこの天国と地獄（ヘル、ゲヘナも同じです）は非常に人間的に表現されているということが解ります。人間としての思考の領域を一步も出ていません。

それが有史以前から、どのような形であれ、表現であれ、神という観念、祈りという願いの形が未開の民族の頭の中に創り上げられて、歴史というものが語り伝えから文字の発明に至って人類の歩み、文化の発達を正確に伝える学問として系統づけられ、幅広く利用されるようになると、宗教が神から与えられたと否とに関らず生まれた。そしてその教義が一貫して先程述べたような社会の不合理を是正し、個人の生活を倫理化し、世の中の不平等、歪みを失くす目的を持つものとなった。そういった結論に到達せざるを得ないようです。

つまり天国と地獄は宗教の教義を通して形作られた。それも非常に人間的な概念を与えられてということです。

そして天国や極楽に神、仏が在しますことはこれも宗教を通し教えられ、また未開人の頭の中では自分達の理解と能力

を超えるものすべてが神であり、拝み崇める対象となつていたことは歴史、考古学、人類学を通して学んできました。

さてそれではこういった神々、仏と見做されてきた方々が本当の所は一体誰であるか——教義にあるようなスーパーマンの存在であるのか——について考えてみますと、天国シリーズの第一巻『天国の扉』第二章の拙文をお読み頂ければお分りになると思いますが、そういった方達は太陽系外のある恒星に属する惑星の一つ、仮名のベール・エルデという星から来られた方々が始まりである、という事が判明したので

す。

これは天国シリーズのみならず、UFOについていろいろ調べていられる方もお分りだと思えますが、太古の昔（考古学史上にも続々その証拠が上ってきています）地球を訪れた宇宙人があった。その人々は地球に人類が発生するまではただ月面探査の如くUFOを駆使して地球を観測、探査するのみであった。生きて訪れた人も、死後、地球の大気圏に霊として留まり、そして興味深く、地球の成長、生物の出現、進化、衰滅を見てこられた。

やがて人類に言語が現われ、互いの意志の疎通を図ることが出来るようになる、そういった宇宙人が紀元前六世紀頃にペルシアの王と語ったとする人もあれば、古代インドに類繁に現われ、UFOに類似した乗物や、“ヴィマナ”と呼ば

れる空を飛ぶ駕籠かかのようなものを作ったと伝えられているものもあり、古代日本では、アイヌ民族の始祖として聖典に伝えられているUFOを乗り廻す宇宙人らしき人も考証されております。ペルシーのインカ民族の文化遺跡、古代エジプト、中国、アメリカインディアン、バビロン、アッシリア、ローマ、ギリシア、と枚挙にいとまがないほど古代に宇宙人の訪れを示す跡が残っているのです。

いろいろな書物を調べてみても、いわゆる神話化されている宇宙創造神、森羅万象を作り給うて、生物の進化に手を添え趣味嗜好によつて自然に手を加えた——といった証拠は生化学の分野においても地球生物学、分子生物学、人類学、考古学などのどの分野においても見当たらないのです。“宇宙創造神”なる科学を超えた絶対不変の神が存在するとして、ドーウィンの出現までは、世界中がそう教えられ信じてきました。ドイツでは今以て進化論には目もくれない人々が大多数を占めているそうです。はたまた神すべてを知り給う。神その全能の力を以て悪をひざまずかせ、天変地異を以て人の悪を懲らしめ、よりすがる力無き我等を守り助け給うといった他力信仰は、念仏を唱えれば救われるという楽天的なものをも含めて人間の幼児的性格の成長、人格の向上には少しも役立たず、いかに世代が変わろうと世紀が一新しようとして自主的判断力を持たぬ人々が利己的な一握りの野心家を容認し、

すべての良きものを堕落腐敗させて了うのです。共産主義思想を独裁主義・全体主義に、民主政治を衆愚政治に変えて了うのは無自覚・無批判な国民であるように、天から受けた啓示に基いて広められた神の教えが人間の欲と業が渦を巻く俗臭芬々とした宗派となり下ったり、一派宗派の中でも気に入らないと飛び出した幹部が新しい組織作り、団体作りを始めても、結局は独善的で靈界の意識に終始し、信者や心酔者が増えてくると、権勢欲・支配欲に動かされて自分自身に気が付かず、または俗臭芬々たる新興宗派となってしまう。他力的依存的に迷信や盲信に振り廻されるから、神の教えを説くものも説かれるものも堕落してしまふのです。

では果たして神とは何ぞやと問われますと、つまりる所U F Oに乗ってきた宇宙人が自然に次いで崇めるべき対象として三次元の人々の目に映じたのでしよう。未開人にとっては自然の力と同じく自分達の能力を超えた力を持つ超人、つまりスーパーマンが畏敬の対象となり神となったのです。ニーチェが「神が墮落した時、人は超人を求めらるであらう」と書いていますが、神も人の意識には超人として映るのです。エジプトの王が神と呼ばれ、死者となつては偉人、英雄、聖人、義人、下つては教会の牧師や仏教の僧侶、靈能者から、人を神と呼ぶのでは満足せず、今度は一般人が念仏を唱えれば、神、仏となる、と段々俗化してきて価値観が薄れてきました

が、このように最初は尊敬すべき対象や畏怖すべきものが人間の神となつたのです。

自然を恐れた原始人の感情が超人を神として崇めるといふ形で今も残っているということは、人類学史や考古学史上興味深いものでもありますし、魚群や動物の群の中のリーダーやボスと比較する時、進化論の見地から更に確信を深めるものです。

とは言え、そういった自然の法則と成り行きに逆らつて人間のみが神を認めず、何ものをも崇めず、従わず、孤軍奮闘すべきだとは私は提案してはいないのです。ただ事実を分析し、迷信、盲信、狂信、他力の一切を取除くべく進言しているのです。そういった幻想のようなもので想像力を掻き立てていると、判断力が鈍り、真理を見極めるに智慧が働かないからなのです。神は超人の中の超人でなければならぬと小児病的妄想にしがみついている限り、天上界の語られる良識的なお言葉や、説話が、サタンの巧妙にすり替えられた華麗な天下り式托宣や僧侶・牧師の弁舌さわやかな曲論や説教より劣っているように思えて、宗教人はサタンや悪霊の意のままに操られ、死ぬまでそれに気付かないでいるのです。宗教は人を愚かにするとは、天上界がこの事を指して言われるのです。

尤も天国シリーズを読み、『慈悲と愛』誌を読まれるよう

な方々は理性と感性のバランスが取れている方が多いですが、ことさらに言う必要はないのですが、念の為に注意させて頂きたいと思いました。

神々は賢者であり、慈悲と愛に満ちた師であり先達であると考えて頂ければ良いと天上界は申されます。そして悪霊に対し、人の心に巢喰うサタンに対し、それらを滅すため三次元の人々は三次元のあらゆる智慧と能力を用い、天上界はその智慧と能力を用い、共に戦い、茨の道を切り開いていつて頂きたいと申されるのです。天の信義と正義に反するものが天に裁かれるのは、人に反するものが人に裁かれるのと同じく自明の事柄であるの言うまでもありません。

理想になぞらえて作られた天国（極楽浄土）も忌むべき地獄も、地球上の独自のものかというところではなく、ペー・エルデにも霊界があり、それと同じようなものが地球にも作られたとのことです。

こういった天国と地獄により構成される霊の世界の存在は（“宇宙に遊ぶ霊体”などと悪霊の甘言に惑わされて罪の苛責から免れようとし、こういった言葉を用いて天に反する自己を正当化する人々も居りますが、霊界は天国と地獄しかないのです）心霊科学のみならず、自然科学の分野でも種々の実験が試みられて、霊界は立派に三次元の肉体を持つ人間界に混然と混じり合い、あるいは隣接して存在している事が証明されねばならないと思います。

“霊とは理解を超えた神秘であり、触れるべからざる禁忌の世界あるいはたわ言の世界ではなからるか”といった知識人・文化人間の迷信や懷疑が根強くある限り、悲しいことにこれもまた、エゴに動かされた生存競争のみに明け暮れる、真理を愛するのではなく、墮落しようが腐敗しようが行き当りばったりの根無草の種であるとしなければならぬでしょう。

アガペーの愛について

千 乃 裕 子

今月は岩間文彌様の執筆下さる月でしたが、大変お忙しくなられ、他の方もあいにく御都合が悪く時間的に余裕がないので、私も予定していないことでしたが、日頃漠然と感じていることをまとめて、雑感のように書かせて頂くことで代りに講座を受け持ちました。

最近の新聞広告欄に現われた雑誌の内容紹介に、一九八〇年代は「悪の時代」であるとか、イランに言及して「悪の論理」、あるいは新聞の社説、国内外の有識者の論評に「危機の時代」、「危機の連続」、「不確実性の時代」といった表現が現われ、いよいよ悪霊が総決起し、世界的規模で次元を超えて動き出したらしいと感じました。しかしそうやって悪が勢力を盛り返そうとしている八〇年代ならば、なおさらそれに対抗して、善も強く力を得て立ち上らねばならぬといくり返し提唱致します。

勸善懲惡は一つの観念論で、自然の大きな流れの中では小さな湧き水の価値しかないという考え方は、「悪の論理」が通り、性善説などを唱えて呑気に構えていられなくなるのは飼犬に手を噛まれたような現状の米国を見ても明らかでしょう。

私は信念として、人や悪霊やサタンの悪念に負けるような弱い善我であり正義であるならば、「私は善人だ」と思うただそれだけの価値もないと考えております。たとえ高僧といわれようと菩薩といわれようと、聖人といわれようと、悪を放置し許容するのは偽善者であり、悪人に等しいと確信しております。

神々の意志と力は古代より人類と地獄の上に君臨し、彼等を従えてきたと言い伝えられているのは、それだけの強い善の意識と正義が天の国に迷わぬ無限のエネルギーを与えてき

たからでしょう。

その善と正義は何の為のものか。それは常に人類の為に良かれと思ひ、導く神々の愛の心から出るものであり、人類を救おうという熱意と温情以外にはないのです。尽きることのない人間への暖かい関心です。“*Forer is human*.”と英国の詩人の言葉にある通り、過ちを犯すのが常であるのが人間であっても、天は人の過ちを許し正してこられました。人類に幸せを齎す為に正義と信義（神と人との間に）と愛とを説いてこられたのです。

今まさに現天上帝は過ちを犯し、救い難く迷いの道に踏み込んでしまった人類に、全く同じ事ではなく、更に大いなる真理を以て（でなければ救えない為に）、悪と善との位置する所、それが何処に端を發し相剋を続けているか、それを明らかにすることによって人類の理性と真理への渴仰を呼び覚そうとしていられます。人類自ずから救うものとならなければ、神の手によつてのみではもはやそれが不可能な事となつたことも一因なのです。

そして神の示された人類の過ちの中に、世界にガン細胞のように蔓つた宗教宗派という人類の寄生虫、サタン、悪霊の中間宿主が明らかとなりました。それは『天国の扉』によつて、神々や天が、人が夢み、宗教が築いた儀式と偶像と幻想の中にはないことを明言されたことに始まつたのです。

しかしながら非常に残念なことに、真に人の心を繋ぎ留める価値のない宗派、教団が内部崩壊するのは当然としても、世界の宗教界の現状は、教義の誤りや教団自体の在り方の矛盾、欠陥に氣附かず、頑なに従来のままを良しとして盛り立てている信者や信徒のお蔭で、天より告発され解散を命じられたにも関わらず却つて一層團結を深め、偽善や偽我のあるがままに、もはや真理の脱けがらとなった既成宗教が新興宗派と手を結び、派手に勢力範囲を拡大していきつつあります。

それは単に彼等の自己保存の現われであり、心血を注ぎ生涯の信念として生きてきた人生への執着であり、且つまた天を裏切り真理に背を向けることになりましますまいかという恐れと、過去の遺産を壊せといわれても壊すだけの勇氣がない人間の弱さでもあるのです。

歴史の中で真理はいつも思ひもかけぬ形で人の前に提示され、人々は誤つた過去の教説、学説と新しい説との間に立たされて二者択一を迫られ、またそう余儀なくされてきました。天動説を地動説に切り換え、天地創造説から進化論に切り換え、モーセの律法からキリストの愛の教えに切り換えることをいつも神に迫られてきました。

そして博識を自ずから任じつつも、実は判断力に欠ける大勢の暗愚が旧い教えに拘り、文明の進歩を阻んで来ました。

“神”という名を人類の墮落と低迷の手段として驕慢な僧

侶や教祖や牧師達が天と人との間に立ちはだかつてきたので
す。

今や神々は、神は人であり、霊は人に属するものと認める
ことを人類に要求されています。古い慣習とマンネリに安住
するのが多くの人の本性であり、世界情勢が激しく変化すれ
ばするほど不安な心は一定不変のものに執着しようとする。

それを神は「立ちて歩み出せ」と言われた。いつの間にか
迷路に入り込み神から遠く離れてしまった、盲でいざりの宗
教人であり信者達に。

宗派の指導者側でそれが出来ないのは、彼等がいざりのま
まで盲目として安住した生活の歴史が長すぎて、自ずから努
力して真実を見よう、歩き出してみようとする勇氣がないか
らでしょう。いままで教えのすべてが真実であって動かし難
く、且つ実証可能な真理であると盲信しているか、あるいは
確信はなくても、多くの人が血を流して遵守してきたものだ
から、これが唯一のもので、他はあり得ないと強迫的に思い
込んでいるのでしょうか。

一方信者の側では、天に財宝を積んだのだから、万一地に
積んだのであったとしても、その報酬はその宗派、教団から
何らかの形で来るはずだと内心考えており、考えていないと
すれば慈善魔という愚かであって、教祖や僧侶や牧師は彼等
が養わなければ、生活の道を知らないほど尊い雲上人だと思

い違いをしているのでしょうか。

一体何の為にそうなのかは解りませんが、ブルジョア階級
であり特権階級である僧職者ならびに教祖は、「人の子は枕
する所なし」と言われたイエス様の時代には比ぶべくもな
く、ブッタ様やイエス様の教えに各様々な解釈を加え、後
代の学者の論述を併せて、形而上学の堂々たる体系として展
開、教示し、著述することで莫大な献金や会費が手に入ると
あっては、教会や教団も彼等を離さず、彼等自身もそれに甘
んじて座食するのは当然の成り行きでしょう。

そして天に仕えず地に仕え始めた僧職は、踏絵どころか教
会を代表するものとして「奇跡は教訓を効果的にする為に、
学者が勝手に作り上げた作話」であるとか、「イエス・キリ
ストは実在したが、ユダヤ人モーセは実在の有無は不明であ
る」などと平然と書き、世に阿るることとなり、仏教は曲折、
派生して「南無妙法蓮華経」や曼陀羅、太鼓や錫杖で象徴さ
れ、神道は巫女としめなわと神と簡略な祝詞に変化すること
になるのです。新興宗派は何と表現すべきものでしょうか。

実に莫大な財産を手にしてそれを壮麗な建築物に変えてし
まった教会や教団や寺が、それらをすべて売却、処分して難
民や飢えた国々の救済に投ずるならば、国民に政府がインフ
レ経済と耐乏生活を要求し、対外援助として税金からあえて
捻出する必要もなく、宗教教団が常に卒先して、世界の苦境

を助けるべく駈つけつけるならば、その国の名譽となりこそすれ、国ぐるみ糾弾されることは決してないのです。

しかるに日本の宗教教団は何をしたか。

彼等は平和會議との名目で、宗教界の世界會議をリードした。世界に平和を提唱するべく合議した。共に礼拝をした。より結束し團結して外部からの干渉を寄せつけぬ為に陣容をたて直した。ただそれだけのことなのです。日本の宗教界はインドシナ難民やバングラデシュの子供達の為にどれだけの手をしたのでしょうか。ユニセフはまたもや国民に基金を呼びかけています。最初の宗派ぐるみの救援活動に立ち上った京都・西本願寺も、一億円が目標の募金を信者や上山者に呼びかけています。何故出資者はいつも国民でなければならぬのか。

世界の宗教界は個々の活動を除いて少しばかりの赤十字の仕事と祈ることとローマ法王の諸外国訪問の他に何をしたのでしょうか。彼等は先頭に立って足らぬ所に財産を投じて援助するだけの力を持っておりながら、教会や寺院建立の為に主力を集中しなければならず、これほど不可解で不合理な浪費はないと思えるのに、信徒から得るだけのものを救済や慈善事業に廻せないのです。彼等の偶像を安置した豪華絢爛たる建物を建て、教育施設、都市計画に参与し、勢力を拡張し、経済界に名を成し、政党作りから政治をも牛耳ろうとする。

初めはイスラエルのディアスポラ（離散の民）の如く、終りはイスラム圏の如くに単一宗派の布教区域を確保する大目的があり、人を救う為にのみ全力を投じ得ないのです。

文明や文化の遺産として美しい建物を残すのもよいでしょう。しかし今この末法の世に、改めて遺跡として残るものを宗派の遺産として建てる必要はあるのでしょうか。神から離れて真の文明から遊離して、彼等自体が前近代的、さもなければ曲論的知識と教義をたずさえ、"人を救う"という大義名分は一体どのようにして実現させるのか。現実社会に適用して理想的と見えるイスラム的社会も、曾ては精神の代表であったキリスト教も、キブツのユダヤ人と同じく彼等の閉鎖社会、クローズド・システムの環の中では平和であるかも知れないが、公害を阻止するには役立つこのシステムも、人間社会においては世界の自由な広がりや宇宙や自然の謎を探索しようとする、これも人間の本性の一面である科学的探求心を満足させることは出来ず、個性の自由な発露である哲学的思索にも枷をはめてしまうことで、人間の向上心と精神的成長を麻痺させてしまう。つまり宗教界に属することは形式的に留め、軽視するか、宗教界は旗色を不鮮明にでもしなければ人間が文明の進歩を諦めねばならない性質のものとなってしまったのです。人間の知的レベルが宗教論や教義のレベルを超えてしまった時、人類は宗教に興味を失い、それに代るも

のを求めるのは極く自然な動きでしょう。今反動的に悪霊の扇動を得て、反近代化や原始宗教形態への復帰現象が見られますが、形骸化した宗教そのものは宇宙文明の夜明けと共に遠からず衰微の一路を辿るものとなるでしょう。

心と魂について関心を持つことが宗教全盛期への逆行であると短絡的に結論を下してはならないのです。一月号の正法講座で西澤徹彦様が論及されたように、人間の魂（意識）も進化するものでなくてはならないのです。

神不在の宗教組織が用いる「神」という言葉に怯えて、イスラム教徒の振りかざすコーランに畏縮する現代人であってはならない。詭弁論に過ぎない、少数の特権階級下の（革命指導者及びその側近による）反近代的、暴力的財産共有制度、即ち共產主義思想の不合理性を見抜けないような現代人であってはならないのです。

宗教をも含めて、一つのイデオロギーにのみ遵法じゆんぽうすることは、現代の科学性と矛盾するものであり、人間個々の意識の向上にも、社会の改善にも健全化にも益とならないことを再認識するべく、私達は今「危機の時代」に直面しているのです。再び人類は過ちを犯したことを認めねばなりません。

もう一つ、恐らくこれは日本におけるのみの傾向だと思われませんが、墓を死者への崇敬の念を表わす鎮魂の儀式の一つとして、葬儀と共に壮大に華美にする歎かわしい非近代的風

潮が目立ってきました。墓相が肝心と、何度も墓を建て直させ、先祖崇拜、解脱会、霊友会と名称をつけて、仏像を無数に作らせ、仏壇や祭壇に並べ、霊の安らぎに供してこの世の繁栄を約束する教祖、宗派の為に実際に生活に必要としないものにあらゆる投資をさせるものから、仏壇を絢爛たるものにするのが死者の霊の慰みになると教え、仏具商を裕福にする新興、既成教団があります。

そのような迷信の虜となった信者達が仮にもこの世の幸せと繁栄を満喫しているとすれば、それはサタン・ダビデとその配下の残した悪の遺産であり、悪霊間の気紛れな気前の良さが豊かさを与えてくれてに過ぎません。神は人を過度の不合理な浪費に追いやるような方ではないのです。

死者の為の莫大な出費を喜ぶ人々の気持は、自分の為だけ、家族の為だけ、先祖代々一族の為だけの投資であり、狭量なエゴイズムと虚栄心の延長です。こういった人々は現世の利益を求めて自分のみの幸福を求めるあまりに、易者や占師、諸相学、占星術師、靈感占い、御利益信仰などを遍歴し迷信を蔓らせる一助となっています。そして勿論、慈善活動や福祉運動に積極的に参加する財力に欠け、ユートピアや神の国、隣人愛、自然界との共存共栄、世界の平和などは共感するものがないに違いありません。

視点を変えて、歴史的に墓や寺院や、宗教、僧侶への布施

を義務づけた国々の文明度はどうでしょうか。カースト制度は、いうまでもなく、僧侶の修業が若者の社会生活への出発点であったり、寺院や教会や墓地をその国の経済と不均衡に立派に保存している国々は、貧富の差が激しく、あるいは文明衰退、文化の足踏み状態が著しいのです。——赤化の有無を問わず、インドシナ半島、時代錯誤のイラン、フィリピン、インドネシア、スペイン、インド、イタリア、エジプトなど。遺跡保存、他国の文化吸収と文化の二字には鋭敏な日本も、精神の成熟度は戦後と大差はなく、文化国家と表現すべきかどうか、今以て戸惑いを覚えます。

経済的に不均衡となるのは「資本主義」が一手にその罪状を課せられますが、文化の膠着、文明の衰退には、宗教至上主義も、経済平等至上主義（即ち共産主義、社会主義）も告訴されねばならないようです。過去の歴史と世界の現状がそれを語っています。

同様に日本の国民がイランに準じて宗教へのノスタルジアを持ちすぎると、経済的にインドの二の舞になり、カースト制を採り入れた国家と同じ惨状を呈するでしょう。それは良識として警告されなければなりません。

私が天の意に従ってこういった明らかな社会の不条理を指摘するのは、たとえ宗教（神頼みという他力信仰）とイデオロギー（誤った実存主義——自我の目覚め、自己の能力再確

認）が人間の本性に根ざした生存の為の手段であるとしても（人間の本性に根ざしているから根絶し難いものであるとしても）この明白な人間のエゴイズムが人類及び地球の滅亡に至る一大要因となっているからなのです。

宗教も革命的、政治的イデオロギーも理論や教義の上において利他的な外観を備えています。しかし現実はその指導層のエゴの表現でしかないし、組織化された瞬間に、あるいはその結果、合目的性を失う欠陥をもつものであることが、充分すぎるほど実証され、論証されたのではないのでしょうか。

これを利他的エゴイズムと名附けるべきでしょうか。この言葉の含む人間の心理の文とその表現である社会機構——それが利己的エゴイズムとの様々の摩擦を生んで現代の（のみならず、人類史の存続する限り）悲劇と世界的危機を迎えたものとも言えるでしょう。

さて、ここにおいて、再び触れなければならないのは、宇宙、自然の法則が果して利他的であるか、利己的であるかという点です。歎かわしいことに、宇宙、自然（動植物すべてについて）共に個々の存在、生存様式は利己的エゴイズムそのものであり、環境適応、自然淘汰が進化、絶滅のリズムを統御しているという事実しか見出せないようです。

只、天界がくり返し指摘し、説かれるように、宇宙や自然はあるがままでは、その法則に従って運行し、あるいは生

存を続けるのであって、星の誕生も活動期も死滅も、自然界の例えば天敵による種のバランスも、漸次の変化、環境による必然的な変則はあっても、決して予期できぬほどの過度の変容はないことが諸学者の説により帰結し得ます。そのリズムを壊し、バランスを失わせているのが一人人類のみであると論じられています。

その法則が人類の生存様式にも当てはまると仮定してみましよう。とすると従来の歴史的、世界的悲劇の数々は、利己的、エゴイズムの闘争が生み出したものであって、人類という種の中の社会的な自然淘汰現象であると言えるわけです。

宇宙は無論のこと、自然界は自己の生存のみが重要であつて、他者の生存にまでは関心を持たない。ただ唯一の利他的配慮が見られるのは、闘争が死闘ではなく（例外はあるが少数で）、飢えを満たすためにのみ殺害や破壊（植物の）が許されていることでしょう。

ところが人間社会では、殺害ならびに破壊は必要上³為されるのではなく、欲望充足の手段として行われる。この点において自然界に比べてより利己的なエゴイズムが観察され、そこに修正、是正が行われねばならない。自然界、宇宙の存在に見られる、非情ではあるがより適応性の大きな環境——少なくとも最低の環境調整として、人間の社会機構、人種・民族（狭義には国家）の共存共栄が確保される為に、人間の

規約である個人の倫理、国の法律、国際法が確立されているのであり、それを無視する利己的な個人、人種、民族ならびに国家が世界の秩序を破壊し、引いては人類を避けがたい滅亡に追いやることになるのは言を待たないのです。

宗教やイデオロギーが何をどう繕^{つくろ}おうと人類全体の生存、存続即ち平和共存のみを目的としなければ、彼等の主義主張は合目的性を失うのは必然でしょう。

自己抑制の可能な知的レベルの高い人々は本能的にそれを知っており、賢明な国々は和議・和合によって共存を図ろうとし、法を犯す者、対国間条約、国際法を無視する国家は制裁されるといふ現象が起ります。その制裁を無視し理性的良識的解決を待たずに自己の利益、主張、自国の野望を貫こうとするものは無知であり、愚かであつて、完全な社会悪と断じなければなりません。彼等の論理を“悪の論理”として斥けるのは当然であり、且つ正当な措置なのです。

人類全体の滅亡は自ずからの破壊をも許し、生存を許さない。従つて闘争革命的思想は平和協調的思想に譲るべきものであり、また譲らざるを得なくなるのです。それが人類社会の環境適応条件であり、最低の環境調整であるとも言えますよう。

知性高く賢明なる神々はそれを有史以前から熟知しておられ、人類を善導してこられたのです。現天上帝はかくも正し

き論理と人類の選ぶべき道、為すべき諸事を説いておられます。且つその善意に対して、正義に対して、人類愛に対してこの世紀に住む、末法に生きる私達は反論する何らかの論拠を持ち得るでしょうか。

あえて現天上界に反く愚かな人々がいるとすれば、個人であれ、神と繋るとうそぶく偽善の宗教宗派であれ、それは許されざる社会悪であり、裁かれねばならぬ存在なのです。

この事実を世界の良識は見抜かねばなりません。その止めどなき利己的、エゴイズムを、偽善とすりかえの理論で私達を欺く偽善者を、厳しく批判し、改めさせなければならぬのです。平和共存、共栄の原則を無視するものは適応能力を欠くものであって、人間社会の自然淘汰により絶滅されるべきものです。

平和の重味を知り、人間社会のみならず、自然界との共存共栄を唱える善人、義人及び良識を有する人々は、もし社会悪にこのまま譲り続けるならば、自ずからが不適応を立証し自然界と共に滅びゆくものとなるのです。それを果して望むものでしょうか。

善は強くなければならない。悪に譲るべきではない。反つて悪を「平和な」社会から、追放するものでなくてはならない。

そしてここに平和共存に不可欠の真の利他的愛、博愛、隣

人愛、アガペーの愛が再び論じられねばならないのです。

アガペーとは利他的感情の真髄であつて、イニス・キリストの自ずからを燐祭ほんさいのいけにえとなす十字架上の死に象徴される、「自己犠牲の愛」即ち「愛を与えること」に集約されます。

哲学者も語り続けるように、人間は「愛を与える」というアガペーの思いや意志、行動を止めた瞬間にその関心は自己愛に向かい、他に求め奪う愛、エロスの愛、即ち自己の存在を確かめる為だけに表現される本能的な愛に墮してしまうのです。

特にフィリアという友愛、隣人愛は最もこのエロスとアガペーの間を絶えず揺れ動くものとなり易いものです。

昨年の暮近く、正法者の一人が、シェル・シルヴァスタインという詩人であり、漫画家であり、歌手であり、演奏家であり、作曲家であり、児童文学作家という多才な一米国人の手による『おおきな木』という和訳の絵本を一冊、私に送って下さいました。

それは世界各国で本人が予想もしない反響を呼んだ話題作で、一本の大きなリンゴの木が、一人の男の子の成長と共に自ずからを、与えて変化していく、母性愛の象徴の如き物語りです。

その木をいつも訪れ続けた男の子は少年になり、青年にな

り、成人し、恋をし、家族を持ち、中年になり、裕福になつて世界を旅し、そして人生の終りに総べてを失ひ、疲れ果つた老人として帰ってきた時、身を供して総べてを求めるときに喜びと共にその男に与えたリンゴの木には、もはや切り株しか残されておらず、老人は最後の要求としてその切り株に昔を夢みて坐り、休みたいと述べ、リンゴの切り株は老人と共に居て幸せであつたという筋でした。

見方によれば、只奪ひ、利用し続けた苛酷な人間のエゴイズムと、それを許し、されるがままに、しかも利用されることを喜びとしている自然界の象徴であるとも取れる物語りなのです。

作者が驚いた世界の反響は、淡々と人間と植物とのドライな物語りを描いたのに反して、読者が今の世情不安に求め続ける一種の愛の形——母の愛の象徴と錯誤した、それにあるのかも知れません。世界中がそのような愛を理想視しているのです。

なるほど「与える愛」はその与える行為において充足感があり、アガペーの愛であればあるほど、与える側の精神の昇華と受ける側の感動が惹き起されます。

ここでしかし混同してはならないのは、「与える愛」は良き師の如く育てる愛でなければならぬ点です。無限に与える母の愛はアガペーの本質ではないのです。

イエス様が「一粒の麦落ちて死なずば」と言われたのはそこにあります。

シルヴァスタインの描いたリンゴの木は男の子に精神的な遺産を与えたわけでは決してないのです。側に居てくれることを喜び、絶えず何かしてやれることはないかと問うていました。そこに世界が共鳴した母親像が現われているのかも知れません。しかしそう問い、与え続けたのは男の来訪を期待し、来訪によって自ずから与えるものを有していることを認識し、自己の存在を確かめて喜ぶエロスの愛なのです。与える喜びに溺れる愛であり、男がいかに非常な要求を出そうとも意に介さない、マゾヒズムの表現なのです。そして男も奪うだけの行為、自己愛しか学ばなかった。

イエス様の十字架により象徴される愛の教えは、マゾヒズムの表現を持ちながら、マゾヒズムであつてはならないものです。何故ならば、イエス様の教えの目的とする所は平和であり、隣人愛を通して互いの幸福と繁栄を目指すものであつたからです。まさにその真理に基いて、同じく世界の平和共存の為に愛を与え合ねばならないのです。アガペーの愛であつて、エロスの愛ではないものを。互いを奪うものではなく、互いを正しく育てる愛です。

この行為の価値とその成果を人類は学ばねばなりません。人間社会において。自然界と人類との関係において。

もし人類が真に地球上での存続を望むのであれば、人間社会のみでなく、公害、自然破壊、生物の絶滅に関して取るべき責任と果すべき義務は、人類にのみ残されている課題なのです。イエス様は厳しく人々の過ちを正され、父性愛を与えた方でした。アガペーは母親の愛ではなく、父親の愛の表現であったのです。師として人々を導き、病人には「立ちて歩め」と自ずからの意志を強くする言葉と、魂に自由を与える言葉を掛けられました。

宗教やイデオロギーが自ずからの益の為に、あるいは自己

の存在の再確認の為にのみ、母親の如く人々の魂を束縛するならば、目を開けて、意志強く歩み出ねばなりません。

神は父親の愛を以てそう命ぜられているのです。

そして、あまりにも多くの非道な歴史を残したキリスト教は、人類を墮落させ、精神を高め得なかつた仏教と共に、且つ大虐殺を副産物とした共産主義思想その他のイデオロギーと共に神の前にその罪を償い、世界の前に実に大いなる徳を積み重ねば天の許しはないのです。(一九八〇年一月一〇日)

現正法理論とは (概論)

岩 間 文 彌

第一部 現正法の基礎

★啓蒙運動としての現正法

端的に申して現正法は、広い意味の理性と科学を基盤とする啓蒙運動の立場をとっております。後に述べる理由で、けっして宗教の形態をとっておりません。

ところで「啓蒙」とは蒙を啓くこと。すなわち人の無知であり道理に暗い状態を啓いて、道理に明るく賢明な状態にすることを意味します。啓蒙に相当する英語「エンライトゥメント」あるいは「イルミネーション」は、闇路に「光」を与えるの意味であり、啓蒙とはほ同じ語義を有しています。

その意味において、科学時代の現代にあつて、今もって蔓延する迷信・盲信の類を、思想・形態の如何を問わず排除し、科学時代にふさわしく、科学に基づく自然の法と、それに立脚する合理的思想（人の生きるべき正しい指針としての）を示

すことによつて、人々の意識の蒙を啓き、ひいては地球全体の病根を取り除き、明るく住みよい世界ニユートピア実現を目指すのが、現正法の立場です（『J』創刊号六～七頁参照）。なによりも理性的な生き方を重視しているのです（もちろん豊かな感情を尊びますが）。

かつては西欧のルネッサンスと、それを受け継ぐ十八世紀の啓蒙主義思想とが、日本においては福沢諭吉に代表される明治初期の啓蒙思想が、科学時代の到来以前に同様の役割を果たしましたが、科学時代の今日、教育も普及し、科学的知識も増えているにも拘らず、二度も世界戦争があつた上、新聞・ラジオ・TVは連日悲惨な事件を報道しています。はては第三次大戦の勃発、世界大破局の予言等が巷に流れているのがいつわらざる現状です。人々の心はまだまだなお利己心に捉えられ、大自然の理法・人の道を忘れ、狭く暗く、すさんできております。それゆえにこそ、人に生きるべき指針を与え、

迷妄を打破してこの世に希望と光とをもたらす啓蒙運動が今一度、大規模に興らずにはいられないのです。現正法はこの「啓蒙主義の立場に立つものであると言えます」（J I 一九七九年五月号一九頁）。

「人の生き方において、合理的思想を示して迷妄を打破し、光を与える、人類の意識改革の運動」という定義づけをすれば、啓蒙運動は十八世紀のそれのみならず、淵源は古代ギリシアの自然哲学者・七賢人達、およびソクラテス・プラトン・アリストテレスの時代、モーセ様、原始仏教、孔子・孟子、原始キリスト教の時代にまで溯れます。

つまりギリシアの自然哲学者達は、自然界の擬人的・神話的解釈を離れ、合理的・科学的な解釈と探究を開始したのであり（J I 一九七八年十二月号六～一四頁参照）、その上立つてソクラテスらは、「汝自身を知れ」の命題を深め、何のために、どのようにして真理探究がなされるべきかに抜本的メスを入れました。またモーセ様は、イスラエルの民に自立心と、真なる神の概念を与え、ブツタ様は宇宙大自然の理法を究明して、人の規準とすべき八つの正しい道（八正道）と片寄らない中道の教えを説き、人は自然の法の前に平等であるという、階級意識を打ち破る教えを示しました。孔子は大自然の理法（天道）に基づく、人の道を説きました。イエス様は、儀式化し形骸化した当時のユダヤ教を非難し、神へ

の愛と隣人愛について教え、かつ自らが十字架上に死し、また甦えることによって、純粹な愛の本質とその永遠性を示しました。

これら先達の運動は、人類の意識革命を意図したことににおいて、本質的に啓蒙運動と言えます。

さらに、天動説という誤謬を否定し、地動説を唱えたコペルニクスを始めとする大科学者・大思想家・大発明家達、医療に貢献して人々の命を救った大医学者の群、人々に調和と美とを運んだ大芸術家達、奴隸解放を実行したリンカーンを始めとする大政治家達、形骸化した宗教を改めようとした大宗教改革者達、——これら人類の発展に寄与した人達もまた、人々の蒙を啓き、光をもたらしたという点で、意図するとせざるとに拘らず、啓蒙運動の旗手であったと言えるでしょう。

これらの人々はいずれも、迷妄・誤謬を鋭く批判し、痛打を与えましたために、しばしば暗愚の徒から迫害を受け、或る者は刑場に消え、或る者は故郷を追われ、生命をねらわれ、本を発禁処分にされたりしました。しかし結局は、彼らの言動を後世の人が正しく評価し、光が闇を葬り、世上に輝かされたという歴史を持ちます。

このように、啓蒙運動は必ず、邪論を反駁し、正論を高く掲げ、「闇と闘う」という性質を伴います。現正法の、邪論

に対する敵しい対決姿勢も、理由はここにあることを、ご理解いただけると思います。

しかしその心はつねに明るく、柔軟で、ユーモアを含み、周囲に調和と平和を招来する作用を伴います。なぜなら蒙を啓くということは人に、正しい生き方を知らせ、正しく行えるように導くことであり、そこにやましき、うしろめたさの意識が消え、心は自由に、軽くなるからです（「真理は汝を自由にせん」ヨハネ福音書八の三二）。

★科学としての正法（科学的進化論の立場）

では正しい生き方の拠り所である「正法」とは、何を意味するのでしょうか。それは大宇宙・大自然界の法則と、これに基づく正しい人間のあり方・生き方と言えます。相互保存・共存共栄の法則・物質不滅・質量保存の法則・進化の法則・作用反作用の法則・循環の法則などの大宇宙・大自然界の法則は、万古から変らぬ不易の法であり、大自然の一員である人をも貫くものです。（正法の定義については『天国の扉』二〇九頁をご参照下さい。）

それゆえこの法に適った生活を行う者は、必然的に生きながらえ、法を無視した生活をする者は、自然淘汰され自己破壊の道をたどると説きます。ですから正法を知り行うことは、人間にとつてもっとも肝要なことと言わねばなりません。そこで正法は具体的に何を意味するかが問われねばなりません。

まず科学時代の正法とは、大自然の法則即ち「科学の発見した諸法則」を基礎にしています。大は星雲から小は原子の世界に至る、また鉱物界から、生物界に至る、科学者達が発見し、また発見しつつある法則です。人はこの法則を知ることによって、ますますその法の精妙さに驚き、謙虚となると共に、法則を利用することによって、ますます生活を豊かにし、生活空間を拡大させ、宇宙空間へと雄飛し、宇宙時代を招くに至りました。ですから現正法は、医療の改善、新エネルギーの開発、宇宙ロケットの開発等、人類の進歩と幸福に役立つ諸科学事業を支持・関与する立場にあります。

生物学の領域では、遺伝の法則と組み合わせた科学的進化論を是といたします。すなわち地球の太古の海でタンパク質が生じ、エネルギー源のATP、それに核酸と酵素が加わって原始的な単細胞が生じ、核酸が遺伝子DNAの増殖の役割を果たして、その自己複写機構によって子孫を残す。以後、この機構と突然変異により、原始的な緑藻類・貝類・サンゴ・クラゲ・三葉虫等の無脊椎動物の出現。約四億年前の魚類の出現。一億数千年前の爬虫類、そして鳥類・哺乳動物の出現。そこから原始的霊長類から、最終的な人類と、類人猿の枝分れを経て、人類出現の道、——猿人↓原人↓旧人↓新人↓現代人へと、進化の道程をたどれます。この間には突然変異によって出来た新種のうち、自然環境に適應できぬものは、

淘汰されて次々に亡び、生き残ったものうち直立歩行し、大脳が発達した人間が誕生したのです。これら進化の過程は、多数の化石乃至、生体物理学、生化学、生理学、及び解剖学的類似性・相同性、によって立証されております。宗教ではこの事実であり理論である進化論を積極的に採用できません。特に創造神を教義の中心に据えているところでは、進化論を否定しようとして、非科学的な論理を展開しております。これらはまた、時代の進歩にとり残された姿と言わねばなりません。(進化論については『天国の光の下に』三〇八―三一五頁、J・I一九七九年十月号一八―二五頁をご参照下さい)。

★再び神とは

真の霊能者(人格・霊能共に秀れ、天上界を信ずること深いが、同時に無批判的ではない、合理的精神・犠牲的精神の持ち主)である千乃裕子様(合体された方は、七歳までが前天王で、ヤールエと言われたエル・ランティ前天王、七歳以後が現天王で、かつて大天使長であり、古代ギリシア七賢人の一人タレス、ブッタ様十大弟子の一人モンガラナー、大芸術家にして学者のダ・ヴィンチ、血液循環の発見者ハーペー、進化論を唱えたダーウィン、大音楽家モーツァルト、相対性原理のアインシュタイン等に合体し(『天国の証』二六七―二六九頁参照)、人類のあらゆる分野で進歩をうながしたミカエル現天王であることが、証されております(同三八頁

他)。

そして驚くべきことには、——以下のことは千乃様を通して「天国シリーズ」で初めて人類に明かされたことですが——エル・ランティ前天王、そして元大天使の構成員でミカエル天王と共に現正法活動に指導と援助をさしているガブリエル・ラグエル・パヌエル・ラファエル・ウリエル・サリエルといった方々、そして他の天使の方々の多くが、今を去る三億六千五百万年前、太陽系外宇宙の、優れた文明を持つ平和な星ペー・エルデ星(地球からの星名は理由あってまだ明かされておりません。なお、太陽系内には地球を除き生物の住むべき星はありません)より、宇宙船にて飛来した移住団の人々であることが明かされております(『天国の扉』七一―八五頁参照)。これは月に人を送り出した宇宙時代の入口に立つ現代であるからこそ、公表されたことなのです。

もう少し詳しく言えば「ペー・エルデ星統一王国の王家に属し、宇宙物理学・電子工学・原子物理学の権威であり、その知識と徳高き人格の故を持って人びとから特に慕われていたエル・シャルレア・カンターレ公爵(エル・ランティ前天王の実名)が、重力切換装置と超光速で飛びうるUFOを發明。植物が繁茂し始め、小魚などが出現していた美しい地球探検に、科学者らをつのり、同盟星の人々をさそって飛来。現エジプトのナイル河流域あたりに楽園を築いて生活。二、

三十年して没したのちは」地上に靈団を作り、ペー・エルデ星及びその同盟星と連絡を保ちつつ、地上の変化と生物進化の過程を見守りつつ、悠久の時を過して参ります。

そのうちいよいよ高等な生物である人類が地上に出現し、前頭葉が発達した段階となつてから、今より約一万年前から、これら高度に進化した移住者の靈達が、人類の意識開発のために、直接合体を試みはじめました。目的はそれによつて地球をペー・エルデ星のような進化した平和な星の仲間入りさせることでした。

かくして幾千年。やがて、その結果、人類の中に、天上来に呼応して人々の幸福のため、目覚ましい活動をする立派な人物が現われるようになりました。モーセ、ブッタ、イエスといった、メシア・賢者・智者・有徳者の方々です。

ペー・エルデ星からの来訪者である天上界高次元の方々、これらの人々に合体し、高い意識を与えると共に、試練を与え、数々の苦難と人の歎び哀しみを通して自ずと人格を磨き、大成するよう導きました。

あるときはモーセ様に頭われ、苦難のイスラエル人がエジプトを脱出するとき、大いなる奇蹟を起こして約束の地へと導き、あるときはブッタ様の大悟と教化の際、バブラマン（梵天）として協力し、イエス様誕生を予告し、イエス様を護り、布教の際は弟子を集め、十字架上の死後、その復活を弟子に

知らせ、教えを流布する援助をしました。

その他、多くの高僧、偉大な思想家・医者・科学者・芸術家、人知れず世に尽くした無名の市民、賢者らに合体、守護・指導霊となつて導き、人々が真に賢明な人になるよう、地球の進歩向上におしめない援助の手を差し伸べてきました。地球文化は実に、これら異星から来た人々と、自然発生的に生じたわれわれ地球人との合作であつたのです。人の一生も同じです。

このような文明の恩人であり、大恩師でもある天上界高次元の方々、同時に親しき友・理解者でもあります。また真に「神」と呼ぶにふさわしい存在でもあります。

古代においてもヘブライ人を含めたカナン人達は神々を「エル」または「エール」と呼び、アラブ人達は「イル」または「イール」と呼んでおりました。奇しくもその呼び名は、現天上界高次元の方々の名に付され、ペー・エルデ語・天上語で「正義を照らす者」「悪と戦い正義を守る者」の意味を持つとのこと（J I 一九八〇年八月号四～五頁）。まことにその名は正法を宣べ・伝え・守る者としての天上界高次元の靈の働きにふさわしいと言わねばなりません。

そして先に上げたミカエル現天王他六名の元大天使の名は、公表後に判つたことですが、「エノク書」などの聖書外典類に、すべて明記されていたのです（J I 一九七九年九月

号六(一)一頁、一九八一年五月号四(一)一頁、改訂版『天国の扉』二二九—二四三頁参照。

かくてわれわれは上記の方々を、大宇宙・大自然の法と共に、その法を照らし守る者として、ときに「神」または「神々」と呼ぶのです。

第二部 現正法の展開

以上の現正法の基本的立場を前提として、次に、現正法が倫理生活面・宗教面・政治面・経済面・文化芸術面・教育學問面等にわたり、いかなる規準と立場をとるか、逐一、説明して参りましょう。

① 倫理生活面

★善我と偽我

自然の本能のままに生きる他の生物と違って人は、大脳前頭葉の発達によって、すべてを意識的(自覚的)に、生きようとしています。人は「考える輩」(パスカル)であると言われるゆえんです。ただ本能のままに無自覚的に生きる生活に耐えることができません。

このような人間の特質から、善悪に関する意識も生じてきます。はじめは生命の維持に都合の良いものを善、逆を悪と考えます。あるいは経済上、利益となるものを善、不利益と

なるものを悪とします。

しかし精神的に成長するに従って、生命維持や経済上に善であつても、人間の生き方全体を考えると、必ずしもそうではない場合があるのを知ることになります。母親は自分が空腹でも、子どもに先に食べ物を与える。貧しい人が居れば、自分が損をしても援助したいと思う。

ここに単なる自己保存上の善悪を越えた、より高い段階の善悪意識が生じます。ところが人間は、生き続ける限り、自己の生命を維持し生活費をかねばなりません。どのような人もこの生活を逃れることはできません。そこで人は、諸々の生活場面で、自己保存か自己犠牲かの選択にせまられることとなります。良心の葛藤が生じます。また自己保存に従ったときの虚しさ、自己犠牲をなしたときの高次の悦びを体験します。

人には専ら自己保存に生きようとする傾向と、利他的に生きようとする傾向との二つの傾向があると言えるでしょう。前者を偽我、後者を善我と言います。

自己保存そのものは善でも悪でもありません。これがあるから、他の者の生命をいとおしむ愛の心も生じます。またほとんど自己保存のみに生きる諸動物は、善悪の意識が無い代りに、自然の本能によって、無制限の欲求が制限されるようになっていきます。

だが自覚的に生きなければならぬ人間にあっては、本能の代りに理性によって身を律していかなければ、欲望のままに振舞って、結局は自己を破壊し、社会を破壊し、自然を破壊することになります。

それゆえ偽我とは、より厳密に言えば、理性を無視してまでも自己保存へ向かおうとする傾向と呼べます。自己顕示欲・エゴイスト・完全主義傾向・自己欺瞞・吝嗇などが偽我に相当します。善我とは理性に従って愛他的に生きる傾向です。ここで言う「傾向」とは、人が生活途上に作り上げた条件反射体系を指します。理性とはつねに第三者の立場で善悪を判断しうる能力です。

そこで人間が大自然の中で生きていくには、理性に従い善我に生きる生活が、いろいろな場面において出来るようになることが必要です。動物が本能的に自然に従って生きるように、人間はほとんど無意識的に感情を制御し、理性に適用行動ができるのが理想です。感情（本能）と理性の両者を具備している限り、この生き方が人間の場合、自然に従う生き方であり、決して自然の欲望のままに生きるのが自然に従うことではありません。

それゆえ「善の心」というのは、すなわち、「自然を愛する心」（『扉』九五頁）であり、「善の行動とは、自然な成り行きのこと」（同九六頁）です。

それゆえ「善我とは、善なるものについて深く追求し、いっせに善の心を披瀝することを理想とする生活態度」（『J』一九七九年七月号十三頁）と定義づけられております。「自然であるがままの気取らぬ自己」、「達人の虚心担懐の心情」、「水の流れるにも似た、ゆがまぬ心」、「正しきを喜び、自己の過ちを認め、悪びれず、素直に正していける柔軟な心構え」がそれです。

逆に「勝手に、自己保存の心で」なす行為は、偽我による行為であり、自然を汚し、破壊する結果を招来するばかりです。（善我と偽我については、『天国の証』三四頁、J I一九七九年七月号及び一九八〇年五月号をご参照下さい）

② 宗教学生活面

現正法は宗教の否定を説きます。しかしまた、宗教と科学との一致を説きます。そこで否定されるべき宗教とは何か。科学と一致しうる宗教とは何かが問われねばなりません。そのためには、宗教の本義とは何か、を明らかにする必要があります。

宗教の本義は何か。——字義からいくとすれば、「人の生くるべき根本的教え」となります。人はいずこより来たり、いずこへ行くのか。一体自分とは何か。心とは、魂とは何か。自分はどのようにして生じ、死してどうなるのか。自分はな

ぜ存在するのか。どう生きねばならないのか。宇宙とは何か。神とは、仏とは何か。——こうした人生の根本問題に答えを与えるのが、宗教の本義でしょう。でなければ人間は盲目の人生を送らなければならない。その日暮らしの人生を過ごさねばならない。これは虚しい人生です。

そこで天上界は、各時代、各場所、各民族に応じ、人に応じ、メシアと言われる方々、モーセ様、ブッタ様、イエス様を出し、聖者・賢者を出し、これらの問いに答を与えてきました。

しかし多くの解答は、宗教家の思索・体験・悟りもさることながら、もっと確実には、科学者達の着実な研究と探究によって得られるのであり、それゆえに天上界はまた、多くの科学者を導き援助し、真理発見へと向かわせました（『天国の証』二六四～二八〇頁、参照）。多数の大科学者に天上界高次元の方々が含まれておられるのです。

こうして世界はどうなっているか——の問いに対して、地球は球であり、太陽の周囲を自転・公転する。その太陽系も銀河系宇宙の中心を回る——と、宇宙の実像を今も科学者が、刻々に解き明かしております。

地球はどうして出来たか。地球の内部はどうなっているのか。物質の究極は。人体のしくみは。学習のメカニズムは。大脳の構造は。心は……。人はどのように生じたか。等

々——

かつては宗教家が、しばしば主観的誤謬を混えて答えてきたこれらの問いを、科学が正しく解明しております。自然界を科学的に、総合的に、かつ謙虚に学ぶ者は、現在、相当なところまで宇宙・自然界の真相から、人の由来、心のメカニズムに至るまで、知ることができるのです。

ブッタ様が悟られた、万象は因と縁によって生じ、また滅する、宇宙創造神は無い、ということも、進化論や分子生物学等によって、正しいことが立証されています。宇宙即我ということも、人体を含むすべての自然が同類の素粒子の結合体であると、原子物理学や化学が正しさを裏付けている状態です。

宗教と科学は、同じ問いを、別の方法ではあるが、答えようとするもので、その本義によって考えると、本来別個の存在ではなく、むしろ一つのものの表裏の関係にあると言わねばなりません。それ故、偉大な宗教家が科学に精通し、宗教家が同時に科学者でありうる（メンデルの例など）し、偉大な科学者が深い信仰を持ち得たこと（アインシュタイン等）は、その傍証なのです。現正法が科学と宗教の一致を主張している理由は、これでおわかりいただけると思います。

「現代の科学的合理的な生活をする、——これが二十世紀から二十一世紀にかけてあなた方に与えられた正法なのです」

(J I 一九七九年三月号六〜七頁)。

③ 政治面

次に現正法が、政治的にどのような立場に立つかを明らかに致しましょう。

現正法は初めに述べましたように、最終的には地上にユートピアを建設することを目指します。そのユートピアは、少数の者が支配し、大多数は平和に食べさせてもらっているゆえに少数者の絶対的権力の下に、物言わぬ人形となる、といった恐怖心の隠された見せかけの平和な世界であるはずのないものです。

たとえばすばらしい花園は、すべての花、一本一本が伸び伸びと、その本性を發揮して、美しく咲き誇っているものです。

同じように理想的な世界とは、基本的に社会に不調和をもたせない範囲の自由が保障されていなければなりません。そうでなければ個人は十分に個性を發揮することは不可能です。自由が無ければ豊かで進歩ある平和な社会が生まれて来ません。

大脳前頭葉を持つ人間にとって、前頭葉の働きの本質である創造性を奪われることは、人の「生きがい」を奪われることです。そして創造性は自由な雰囲気の中で生まれるのです。

自由は無いが、ただ充ち足りて食べていくことができる——そんな社会では人は、虚ろな毎日を送るばかりです。進歩も進化もない生活しかありません。

そこで個人の自由が可能な限り許される社会とは、王政であるか無いとを問わず、基本的には強制の少ない民主制の形をとる社会です。現正法は自由主義と民主制の社会が、自然の理法に適うものとして、支持しております。

だからと言って、現正法は社会に害毒を流す自由まで容認するものではないことを、今まで読んで来られた賢明な読者は、とっくにお気付きでしょう。

王政があるわけでもないのに、あえて人々を扇動し、暴動を企て、社会に混乱をまねく者、無抵抗の市民を暴力で脅かし、暴利をむさぼる者、むやみに人や動物を殺す者、不正に搾取する者、表現の自由を楯にとって、人々の道德的墮落を誘発する者、利益のために人や国を売る者などを取締り、反省なき者は極刑に処す——。こうしてはじめて社会に平和と真の自由が確保されることを極力主張いたします。

ところで自由主義と民主制を是とし、社会の個人の自覚を持つ、社会の漸進的改革の立場をとる正法の立場にとって、プロレタリア階級による一党独裁・階級支配を論じ、片寄った暴力革命の思想をもって、世界制覇を目指す共産主義および、終極の世界を共産主義とする社会主義ほど、異質なも

のはありません。

世界の平和とか革命の美名を唱えつつ、反対のことをし続けるこれらの主義者・主義国の中に、現正法は個人の自由を抹殺し、ありとあらゆる非人道的行為をなす本性を鋭く見抜いております。

近くはカンボジア、「古くはロシア革命時に」革命の名の下に何百万、何千万人と人命を奪い、また使い捨ての強制労働をさせた。——まことは背筋の凍る地獄の沙汰です。これだけを見ても共産主義の何たるかが判ろうと言うのに、相も変わらず共産国家、共産・社会主義者に微笑を送る人々というの、人の悲しみも苦ししみも知らぬオプチミスト、お坊ちゃんを通り越して、犯罪加担者と言うべきです。

また共産国の政府は、国民の眼と耳とを閉ざして世界の正しい情報を知らせず、ものを言えば精神病扱いにし、故郷を奪って遠隔地に隔離し、一方では一にぎりの支配層がツアー時代以上の特権階級を構成して、権力と富を独占する。

対外的には弱小国の混乱を利用して革命を起こさせ、共産政権を画策するか、軍事・経済援助という甘い汁を吸わせ、弱みを握って国を乗っ取る。

その和平交渉は常にみせかけであり、自由諸国間の分断作戦です。軍縮交渉は、軍備拡張のための時間かせぎでしかありません。

これらの手口は、サタンの手口と同じであることを、現正法は指摘し、警告いたします。

④ 経済・軍事面

経済面では、社会秩序を乱さない限りにおいての「資本主義」の立場を是とします。資本主義はマルクス流の経済論からは、悪の権化のごとく宣伝されておりますが、個人の自由を大幅に認め、自由の中からあらゆる工夫・発見・改良をうながし、可能な限り機構を合理化しようとする資本主義が大自然の道にかなっていることが明らかだからです。

実際に資本主義国の経済の方が、共産国よりはるかに発展し、繁栄しており、逆に共産国には経済の停滞と破綻が著しいことよって、つまり実を見て木を知る——資本主義と共産主義のいずれが正常かが判ります。共産国内の経済破綻と、資本主義国の経済繁栄とは、かつて行ったマルクスらの経済学者の予言を、まったく裏切る現象です。社会主義要素を導入し、企業の多くを国営化したところでは、自由主義国であっても、経済の停滞をまねていることは、国民のよく知るところです。利益の平等化と官吏社会とは、人々の工夫、創造意欲を奪ってしまうからです。唯物論であるマルクス主義が、人間の心の要素を無視した経済理論を建てた帰結が、今日の経済破綻であることは明瞭です。

次の文は資本主義と共産主義の本質をよく表わしていますので、ご紹介します。

「資本主義という言葉は作られたものであって、もともと経済というものは一種類しか無かったです。資本主義と呼ばれている経済は、自然発生の経済であって絶えることのない自然淘汰によって磨かれていく最も効率的な経済システムです。人間の能力をはるかに超え、驚異の宇宙の支配者である自然の法則が資本主義経済の味方なのです。マルクスの浅知恵によって生まれた共産主義経済が逆立ちしても勝てるわけはありません」(J I一九八一年三月号一九頁)。

むろん現正法は、社会の幸福に反する企業のエゴや不法行為に眼をつむるものではありません。公害による自然破壊、みにくい利権奪行爲、不正、汚職、中・小企業への圧迫——これら人道に反し、自然を犯す行爲は、当然責められるべきものです。しかしそれらを罰するに当り、資本主義全体が悪だという印象を人々に与えるべきではありません。また公害責任を問うことに急で、経済や文化の発展に寄与した面を忘れることは、不公平と言うべきでしょう。

軍事面については、無防備・中立の平和国家というのは、決して現実には成り立たぬ空論であると断じます。それは歴史が証明しております。

現実には北方に、隙あらば侵略し、それを正当化して居すわ

るソ連という共産国家が虎視眈々と日本をねらっているのです。もし日本が社会主義化して無防備となり、第二のアフガンスタン化、カンボジア化したとき、一体誰が責任をとると言うのでしょうか。無防備中立を唱えていた人は、ソ連侵入と共に、まっ先に白旗を上げるのです。または逃げてしまおうか、ソ連政府の傀儡となりはててみましょう。このように国を売りわたすのが見えすいた共産・社会両党、および左傾か日和見の公明党、それに和す左傾マスコミや左傾知識人の言葉を信ずるわけにはいきません。

ただ感情的に、戦争を二度と繰り返しません。軍備はもう沢山——と言うだけでは、平和は守れないのです。左傾人は頑固で、感情家で、ヒステリックです。冷静な世界分析、歴史の変化分析に欠け、理性に欠けます。このようにしていつしか、中道を犯し、八正道を犯し、自然の法を犯します。第三者の立場に立って、物事を客観的に観ることを忘れてしまふからです。

考えても見られよ。ばい菌が体内に侵入すれば、ただちに白血球動員体勢が敷かれて、白血球はばい菌と戦い、殺し、膿として体外に放出する。それではじめて健康体が保たれるのです。人体が健康であることは、この戦闘能力が充分であることです。

有機体である国についても同じことが言えましょう。いつ

の間にか商人国に成り下り、厭戦気分ばかり濃厚で、有事の時の備えも手薄。その上、米国におんぶにダッコの甘え根性。こんな状態では、戦う前に勝負はついたり、です。そのような状態をソ連はジッと見ていて、時を待っています。

核兵器制限交渉によるSALT I条約を悪用して、着々と軍備拡張し、キューバ、ベトナム、カンボジア、リビア、エチオピア、アングラ、南イエメン等を次々に衛星国化し、アフガニスタンに侵攻、日本の北方領土の島々の軍事基地を拡充したソ連。その全体像を眺めれば、以上のことは誇張ではないはず。

それゆえ、早急に憲法九条を改めて、国是を正し、内外に国を護る気概をはっきりと示すべきです。その運動を現正法は強力に繰り広げております。これは「矢鱈に許すのが正法ではないのです。するべき戦いは、せねばならず、悪の侵略のために平和が脅かされるならば、正義のための剣は取らねばなりません」(『天国の扉』一四五頁およびJ I一九七九年五月号四頁) という言葉に正法精神の実践です。

⑤ 医療・福祉面

医療・福祉方面については、心のあり方のみを偏って強調し、医療・衛生等を軽視または無視する多くの新興宗教の生き方に異議を唱え、科学的・合理的見地から、これを重視し

ております。また、病める人、苦しむ人を、実際に救って行こうと努める医師らの姿は、神々の心——すなわちアガペーの愛——に適ったものであるからです。

多くの医師の中には、墮落した者もいますが、「しかし全体として、医師、看護婦、社会福祉関係の人々の中には、人類奉仕の精神と信念に基づき、激務に耐え、責任を果たしている人が半数はいるのです。これらの人々は特にその信念が強く理想主義的な人生を歩まれます。自分の一生を賭して人々を救うために働くのです。それに比すと宗教家の努力など足元にもおよびません。……天上界は、人々の悩みと苦しみを己れのものに置き換え、生活上のあらゆる犠牲も省みず、ただ人を救い、病いを癒す努力を続ける医師達、看護婦達、社会福祉関係の人々、には恵みと光を与えることを改めて告知致します。それは善霊の技であり、神の助けとなるものだからです」(『天国の証』一一六―一一七頁)。

そして医療に関しても、合理的・理性的で、中道を重んじる啓蒙運動の精神が貫いています。

「霊力を盲信し、靈界に他力信仰的に依存することは盲信、迷信の域を出ず、とうてい文化人とはなり得ないことを明らかにしなければなりません。三次元の世界において、出来得る限りの健康対策、保健衛生思想を採り入れ、良識的に「病」に対すること。医学盲信もいけません。医学にも力及ばぬと

ころ、手の届かぬところがその治療法において多々あることは、医学関係者も知るところでしょう。：東洋医学の良いところを採り入れるもよし、西洋医学が役に立つ場合もあり、それぞれの長所を取捨選択して、患者となる側は患者となる側で医師を選び、薬を選ぶのです。何事においても他力信仰的、依存的な態度は、積極的な生き方、善なる正法的生き方とは言えないのです」（JⅠ一九七九年一月号五頁）。

「生体は個々により違った、動く実験室であり、何本もの試験管の中で元素や薬品合成をしているということ認識し、医薬のより慎重な処方、投与が望ましいし、またそれが出来ないのであれば、おおむね副作用の少ない漢方処方に切替える方が無難だと思います。また、患者の方も飲みたくなければ、これに動物的な本能が呼び覚まされて危険信号を身体が出しているのですから、他の薬に代えてもらうか、医師に頼らず自分で民間療法から好みのものを選びたいのです。薬は西洋・東洋いづれも、食物と同じく好きなものを、飲んで具合が良いもの、療法も身体に合うと思うものを選択すべきだと思います。医師だとして患者と同じ体質でもなければ、同じ病歴を経て治療に精通しているとは限らず、却ってなるべく身体の弱い、万病を体験したような医師、今にも病気で倒れるかというような虚弱型の医師が病気治療に関しては一番理想的(?)なようです。薬剤師も素人の助言も右に同じ。

自分が病まなければ他人の痛みも、治し方も実際には判らないのです。——そして昔から言い古されている通り、薬を飲まなければ飲ませないほど名医。注射もなるべくくしない医師——つまり人間の身体は生体の常として異物を排除する本能が備わっています」（JⅠ一九八〇年五月号一九頁）。（医療医薬方面は同上誌一七〇二三頁及び一九八一年五月号二五〇三二頁、六月号二三〇三三頁をご参照下さい）

なお食物においても、なるだけ自然に近いもの、その土地のもの、季節のものを摂るように心懸け、栄養のバランスに気をつけ、体が中庸（弱アルカリ）の状態になるよう努力すべきでしょう。

⑥文学・芸術面

この方面でも、中庸の精神に沿ったものが嘉しとされます。「天上界が愛する、また、好む性格とは、禁欲的で、清教徒的なものではけつてない、ということ皆さまに理解して頂きたいのです。すなわち、私（ラファエル様）があえてシェークスピアの作品について語るのは、それが天上界の良しとするものなことなのです。ポーシャ（ベニスの商人のヒロイン）によって代表される性格とは、ある時は天衣無縫でとらえ難く思える時もあれば、淑女のように礼儀正しく事を弁え、正義を説くに理性的で冷静で鉄のごとき意志を

持つごとく見えるかと思えば、人間愛に裏付けされた慈悲の尊さを説くものであったり、厳しく理論を展開するかと思えば、ユーモアで聞く者の心を柔げたり、喜怒哀楽を生き生ぎと表現し、けっして自由な弾力性を持った心を失わず、明るく、自己を想像力と表現力と創造力において、決して形式によって束縛せず、しかしほん放にはなく、権威の前に畏縮せず、卑屈にならず、のびのびと振舞う。そのような性格なのです。その中に多くの互いに相反する性格が柔げ合って、偏りを防ぎ、表面には円満なものとして現われる。それは人間でなければ持つことのできない複雑な、しかも健全な精神なのです」(『天国の扉』一四一頁)。

そしてもちろん、正義を浮かび上がらすための悪の描写はありえても、ただ読者や観客の眼を惹きつけんがためのみの、グロテスクなもの、怪奇なもの、やたらな殺人シーン、人に恐怖心を植えつけるもの、攻撃性や欲情を解放するもの、行き過ぎた性描写によって、発達途上の青少年に悪影響を与えるもの、暴力を是認するもの、共産主義を美化するものなどは許されるべきものではありません。

逆に人の心に夢と希望を与え、人生の深さ・厳しさを教え、ときには冒険心や明るい笑いを与える健全な芸術はまた、精神の栄養剤なのです。美しい音楽は、人の心を調和させます。そしてみにくいものと美しいものとの感覚を養います。「音

楽に親しむものは天上とそれだけ距離が近い」(『天国の光の下に』一五六頁)と言われるゆえんです。また朗らかに歌えば心は軽く、天に遊ぶようです。音楽は古来病氣治療の一つにさえ使われております。同じことが詩・絵画その他のジャンルに言えるでしょう。

⑦教育・学問・スポーツ面

教育面においては、過度の甘やかし・愛のかけ過ぎで、子どもの自立心を奪うこと、逆に放任して親の責任をはたさぬこと、過度に厳しい育児で子を畏縮させてしまうこと、これらは中庸の道に反し、自然の法に反するものです。肥料や水はやり過ぎれば作物を駄目にし、少なすぎても育たない理法と同じです。

教育においても、愛に理性が通っていなければなりません。子どもの性格を考え、発達段階を考え、指導することです。何よりも、教育において、教育者の生きざまが大切です。それを見習って子は育つのですから。教師や父母が正法をしつかりと身につけた生活することが先決でしょう。

父母の間に暖かい会話があり、家族を思いやる明るい雰囲気の中で、子はすくすくと育つはずで

不幸があっても、それを乗り越えて生きる親の姿を見て、子は目覚めるでしょう。

明るい中にも、しかるべきはしかり、ときには愛の鞭を加える。中道の精神とアガペーの愛の精神から、目指すは子どもの自覚であり自立であることを忘れず導くことが肝要と説いております。

なるべく大脳の脳神経の配線が出来上がる前の、幼少時期に、しつけをし、言葉を交し、笑を交し、運動の機会、手先の訓練の機会を豊かに与えることがまた、生理学的にも肝要なことです。

また若い頭脳に正しい観方を教えず偏ったイデオロギーを注入し、ストをもって職場を放棄し、暴言・暴力をもって校長を脅かす日教組に対しては、中道・正道等の人道を犯すものとして、現正法は糾弾し世論を喚起しております。

学問・研究の方面では、人は一生謙虚に学び、自己を向上させて行かねばならない。学ぶことを止めたときに、進歩がやむ、ということをおぼえ、専門のみならず、あらゆる方面について学ぶ努力をすることが望まれています。柔軟な脳、幅広く深い教養の持ち主を、天上界は選んでおられるのです。これは現正法の理性と科学・学問を重んじる立場から、当然のことです。

無知であり愚者であっては、霊となり、地上の人々を導く基本的資格に欠けます。

正法を学ぶことは、自然界の法則を学ぶことでもあります。

それは幾多の科学者達の試行錯誤と人類の明日のための努力の結晶より発見されたものを多く含みます。「正法は科学」なのです（『天国の扉』一三六頁）。

しかし知性においても片寄ったら、正道からはずれません。研究生活には適度の息抜きが必要です。また知性に偏り、こまやかな愛情や自然に対する感動の心を失うべきではありません、そして何よりも人類のためにるか否かを吟味しつつ、研究することが大切でしょう。「ユートピアを作るための科学」ということを忘れるべきではありません。

「今の人類に要求されているのは何でしょう。それは自身自身の知性に対して、抑制作用を持たなければならぬということです。知性は善の場合においてのみ善行とされます」（J I一九八〇年九月号五頁）とあります。この点研究者はよくよく反省することが必要と思うのです。

スポーツや娯楽は、適度であり、正しい仕方で行われる限り、人々の健康を増進し、すがすがしい清涼感を与え、心地よい疲労感を与え、安らかな休息のために、そして明日への活力のために大きな効果を与えます。子どもにも規律を教え、公正と協力の精神、ファイティング・スピリットを養うものです。

ところが、勝負にこだわり、過度に熱中し、フェアプレー精神を失うとき、かえって身心を損なうことになります。

天上界の御助言による用語解説

受胎告知……イエス・キリスト誕生に関して、ガブリエル

大天使ならびにラファエル大天使が母マリアに聖霊が宿り給うて、救世主イエスが生れ給うこと、そしてその名はインマヌエル（神とともにいます）と名付けよと告げた。その子イエスは処女懐胎の史実として記録されているが、事實はそうではなくアブラハムの子孫大工ヨセフとナザレの町の乙女マリアとの間に生まれ、天上よりの指示により予言されし如く、神の子である証に処女が身妊ったとして伝えよ、とヨセフにマリアを通じて伝え、その如くなされた。（ガブリエル大天使の証による）

メシヤ……ヘブライ語で（油を注ぐ）から派生した「油注がれた者」の意。オリエントにおける風習で王や祭司が即位する時、頭に油を注ぐ儀式が行なわれ、古代イスラエル王朝でもこの風習がとり入れられた。ギリシャ語ではクリストス（キリスト）といい、のちに「救い主」を表わす語として用いられるように

なった。人々を奴隷制度や他国の支配あるいは、貧

困と無知と苦しみから解放し、神の手により救いを与えてくれる者として、神的權威と証明を持つ、すなわち神より啓示と使命を受けた救済者の意。これはイスラエル民族特有の考えから発し、全世界に広がり苦境から民族を解放し、靈能を持ち奇跡や予言を行ない、平和と繁栄を約束する救済者の意に転じた。

三位一体……父なる神と、子なるイエス・キリストと聖霊とは、それぞれ別のものであり、一つとして働きかけるものの意。

聖霊……聖なる霊、すなわち天国（天上界）の霊の意。

ヨハネ黙示録……使徒ヨハネが小アジアの諸教会にあてた手紙。ローマ帝国の教会への迫害が激化した当時の状況、世の終りに至るまでの教会の歴史を予言と象徴とによって語るとともに主の再臨の近いことを告げて同時に最後の審判が行なわれそれにより義とさ

れたものが、イエス・キリストの導きにより神の国に入ることを予言と象徴によつて語り、信者に希望をもつように説いた書。一世紀末からキリスト教がローマの迫害にあつたので旧約聖書のダニエル書と同じ抽象的、象徴的表現を用いた黙示文字を取り入れ、神よりの謎の啓示の形で著したもの。

末法の世……すべての道徳の退廃と宗教の墮落による、人心の乱れが生じた混乱期。

ヘブル語、ユダ人、ロマ人……ヘブライ語、ユダヤ人、ローマ人。

ユートピア……理想的な国土、理想郷。

釈迦牟尼仏、釈迦如来、阿弥陀如来、釈尊、如来……すべてブッタを表す名称。

苦行僧……ブッタの修業の形と反対の、修業のための修業、荒行のための荒行をして肉体および精神を苦しめることが悟りへの道と思ひ誤つた僧侶のこと。

死霊、怨霊、死者の霊……恨みを持ち、執着を持った悪霊、で共に天国（天上界）から来た霊ではない。前者は天上界の霊とも地獄の霊ともまだなっていない、死者から離れたばかりの靈魂。後者は地獄を作つていた、あるいは作る霊。

聖域、不浄域……聖浄な靈域、すなわち聖霊、天上界の善

靈により支配された三次元の領域。不浄域は地獄の波動や邪念を持った死霊、浮遊霊、動物霊、地縛霊、怨霊、などによつて汚されている三次元の領域。

ダルマ……古代インドのサンスクリット（梵語）語で「法」の意。

御利益宗教……初め御利益は仏が衆生に与える恵みの意であつたが、それを名目にした金銭上の利益中心の俗的な宗教。信徒の商売繁昌、病氣平癒などを祈願するについて莫大な札料、謝礼金、寄付、会費、などを取り、その利益で教祖、幹部などが生活費および教団維持に充てる。

仏典、經典……ブッタの教えおよびその解説、ならびに翻訳書をも意味する。經典は宗教の教えを書いた本。

密教……仏教の一流派。秘密仏教、真言密教ともいう。顯教びやくに対するもの。ペーダ時代（前十二世紀～十世紀）にマントラ（真言）を誦ずして攘災招福を祈つた。その呪術や密法が神聖視され、仏教に合流した。

衆生の済度……（衆生は生命を有する全存在の総称。人間を指す場合が多い）生死の泥沼の中であえぐ人々を泥の中より救い、悟りの彼岸に渡すことを意味する。

アスラー（阿修羅）……インドの鬼神の一人。怒りの形相

で人の心にある悪念、権勢欲、鬭争欲の想念の象徴として解されている。

涅槃の境地……修業によって真理を体得し、迷いや執着を断ちきった最高の解脱の境地をいう。サンスクリットのニルバーナから転じたもの。

題目……日蓮宗派で唱える南無妙法蓮華經（妙法蓮華經に帰依するの意）という七字の称。これを唱えれば、あらゆる善行が備わって成仏できると説く。

即身成仏……現実の肉体のままに仏になれるという思想。

攘夷招福から始まって仏教の一流派となった密教の主になる思想で、真言宗や日蓮宗でこの教義がある。禅……インドに古くから伝わる精神集中の実践で、インド文化をになつたアーリア人の侵入以前から行なわれていたと考えられる。精神集中のために、通常は足を組んで姿勢を正し、呼吸を整えて静かにし、ある一点すなわち真理を目ざして、それ以外の一切の雑念を去る。ブッタ様の悟りも禅を行なつて（禪定をして）開かれたと言われる。

ヨーガ……サンスクリット語。人間の内なる、種々なる対象に移り行き、抑え難い心を集中する。正しい坐法によって呼吸を整え、感覚と意識を制御し、精神統一と浄化から悟りの境地へ、あるいは超自然力（靈

の助けによる力）を得る独特の修業法。ヒンズー教の仲介を経て一般化すると共に、他方ではヨーガ学派が成立した。瑜伽行派（ゆがぎょうは）はヨーガの音訳で唯識派ともいう。中観派とともに大乘仏教の二大派である。弥勒菩薩の著作によつても、その思想が発展、日本の仏教にも重要な役割を演じた。インドでは現在学派の勢力は殆ど無く、苦行派または健康法に化した特異な風習の一つとして残っているに過ぎない。

止観

（しかん）……仏教の術語。「止める」「観る」ことを言う。「止」は心の雑念や妄動（もうどう）を止めること、「観」は真理や実相を観（み）ずること、坐禅の時の心の状態を示す言葉。止によつて定（じよう）（禅の状態）が得られ、観によつて慧（智慧）が得られ、定慧が相等しくなると涅槃（ねはん）が得られるという思想。中国唐代の僧、天台大師智顛（ちでん）が止観を最も重んじ、現代ではこの語は彼の法門を指すと解されることが多い。

注

用語解説の際にはすべて、天上界の方々、特にミカエル大王様、ガブリエル元大天使ならびにラファエル元大天使に御助言ならびに、歴史上の誤った解釈の御訂正を頂きました。

現正法理論とは(概論) 岩間 文彌	209
第一部 現正法の基礎	
★啓蒙運動としての現正法	209
★科学としての正法(科学的進化論の立場)	211
★再び神とは	212
第二部 現正法の展開	214
①倫理生活面	214
★善我と偽我	
②宗教生活面	215
③政治面	217
④経済・軍事面	218
⑤医療・福祉面	220
⑥文学・芸術面	221
⑦教育・学問・スポーツ面	222
天上界の御助言による用語解説	225
受胎告知/メシア/三位一体/聖霊/ヨハネ黙示録	225
末法の世/ヘブル語、ユダヤ人、ローマ人/ユートピア/釈迦牟尼仏、釈迦如来、阿弥陀如来、 釈尊、如来/苦行僧/死霊、怨霊、死者の霊/聖域、不浄域/ダルマ/御利益宗教/仏典、経典/ 密教/衆生の済度/アスラー(阿修羅)	226
涅槃の境地/題目/即身成仏/禅/ヨーガ/止観	227

テーマ別索引 2 (天上界メッセージ集・続)

政治

[J1]

社会の秩序を破壊するもの(1985年1月号) ウリエル……………47

霊及び最後の審判

[J1]

悪霊の惑わしについて(1984年11月号) ラファエル……………45

“世の終わり”の警告について(1984年12月号) ガブリエル……………46

正法と正法者のあり方

[J1]

正法者の性格について(1984年7月号) ラファエル……………41

正法者の悪い点について(1984年9月号) ミカエル……………43

正法者の悪い点について(続)(1984年10月号) ミカエル……………44

正法の解釈について(1985年2月号) ミカエル……………48

高度の教育を受けた女性の偽我について(1985年3月号) ラファエル……………50

平均的な教育を受けた女性と高度の教育を受けた男性の偽我について(1985年4月号) ラファエル……………51

外部からの干渉について(1985年6月号) ミカエル……………53

偽我について(1985年7月号) ラファエル……………55

謙讓について(1985年8月号) ラファエル……………56

自然と正法

[J1]

動物愛護について(1985年5月号) ラファエル……………52

現象テープより

正法基礎講座(No 4・1977年6月現象) ミカエル……………59

魂の研磨について(No 18・1980年2月現象) ガブリエル……………79

再び愛について(No 20・1980年4月現象) ミカエル……………86

正法流布について(No 27・1980年8月現象) ガブリエル……………92

メッセージ(No 40・1983年7月現象) イエス・キリスト……………96

天使の詩

永遠 Eternity ガブリエル……………102

天使の誓い An Angel's Pledge ガブリエル……………104

無題 Untitled パヌエル……………108

光 Light パヌエル……………112

日時計 Sundial ウリエル……………114

カナリア The Canary ウリエル……………116

追想 Reflections ラファエル……………120

ミカエル大王賛歌 A Hymnto Michael the Great ラファエル……………126

幻想 Vision ミカエル……………124

二十一世紀 The Twenty-First Century ミカエル……………130

天の羊飼い The Shepherd of Heaven テリエル……………136

救い Salvation ラグエル……………138

蘇がえり Return to Life テリエル……………140

若き人々に励ましの言葉 Words of Encouragement for the Young ラファエル……………144

使命 Mission 千乃 裕子……………146

天の証

二十世紀の七大大使 西澤 徹彦……………153

歴史に顕われる七大大使 西澤 徹彦……………159

フランスでの七大大使 西澤 徹彦……………167

イエス様は何故苦痛なく昇天なされたか? (I) 千乃 裕子……………175

イエス様は何故苦痛なく昇天なされたか? (II) 高野 信義……………178

“トリノの聖骸布”への疑いと反証 千乃 裕子……………181

十字架上の死及び復活を示す“聖骸布”実験に先がけてのヒントと解説 千乃 裕子……………183

正法講座

天国と地獄はどのようにして作られたか 千乃 裕子……………191

アガペーの愛について 千乃 裕子……………199

正法に役立つ態度(1983年1月号) ミカエル大王	161
義人の偽救(1983年2月号) ラファエル	162
神の愛で得る真の人間(1983年3月号) ラファエル	163
“やさしさ”と“慈悲魔”について(1983年5月号) ラファエル	165
人を信ずることについて(1983年6月号) ミカエル大王	167
偉人と聖人君子と哲学者と凡人の違い(1983年7月号) ラファエル	169
愛する価値のある者とは(1983年8月号) ミカエル大王	171
嫉妬心について(1983年9月号) ラファエル	173
幼児的な性格の人々(1983年12月号) ミカエル大王	177
新年にあたって(1984年1月号) ラファエル	178
人間としての価値(1984年3月号) ミカエル大王	182
正法に関わる自己犠牲(1984年5月号) ミカエル大王	185
正法者のあり方(1984年6月号) ミカエル大王	187
〔希望と愛と光〕	
希望と愛と光(1981年1月創刊号) ガブリエル	191
人の気持ちを考えることについて(1981年5月号) ウリエル	198
他人の目を気にすること(1981年6月号) ラファエル	200
天上界の美しさとは(1981年7月号) ウリエル	202
ゆるしについて(1981年8月号) ガブリエル	203
慈悲について(1981年9月号) ガブリエル	204
愛を受ける方法(1981年10月号) ミカエル大王	206
強さについて(1981年11月号) ラファエル	208
判断の基準(1981年12月号) ウリエル	210
もの考え方について(1982年1月号) ラファエル	212
判断力について(1982年3月号) ラファエル	216
自由な心について(1982年4月号) ラファエル	218
慈悲について(1982年5月号) ミカエル大王	219
真の正法者と成る為に(1982年6月号) ガブリエル	220
天上界が正法者に望むこと(1982年7月号) ラグエル	222

自然と正法

〔慈悲と愛・JI〕

動物への愛について①(1979年8月号) パスエル	62
動物への愛について②(1979年9月号) パスエル	66
動物への愛について〔詩〕(1979年10月号) ラファエル	70
自然の中に学ぶ人類の生き方(1981年3月号) パスエル	131

詩

ファンタジア(希望と愛と光1981年1月号) ラファエル	195
------------------------------	-----

正法の歩み	227
-------	-----

正法の解説

正法	235
ペー・エルデ星	236
靈魂	237
合体靈	237
守護靈	237
指導靈	238
転生輪廻	238
転生の周期	239
本体、分身の例	239
天上界	240
天上界および地獄	241
宇宙界、太陽界	242
天上界の死闘	243
最後の審判	243
天の裁き(消滅)	244

メシア

ガブリエル(1984年8月号)	188
-----------------	-----

テーマ別索引 1 (天上界メッセージ集)

政治

〔慈悲と愛・J〕

民主主義と共産主義について(1979年4月号) ウリエル	40
世界情勢と正法者のあり方(1980年1月号) ミカエル大王	81
日本の自由と平和と国を守る為に(1980年2月号) ミカエル大王	93
日本の政情と左翼(1980年4月号) ウリエル	97
イランのホメイニ体制と悪の論理①(1980年5月号) ウリエル	103
イランのホメイニ体制と悪の論理②(1980年6月号) ウリエル	106
正法と政治(1980年7月号) ラファエル	110
防衛と平和(1981年1月号) ラゲエル	127
光なき世界に住む共産主義者(1983年4月号) ミカエル大王	164
共産主義理論と、その信奉者はサタンに魂を奪われた呪われた人類(1983年10月号)ミカエル大王	174
神から遠ざかる左翼、マスコミ、宗教団体(1983年11月号) ウリエル	176
左傾の道を辿りつつある全国紙(1984年2月号) ウリエル	180
〔希望と愛と光〕	
共産・社会主義の脅威(1981年2月号) ミカエル大王	192

霊及び最後の審判

〔慈悲と愛・J〕

霊の力と治療について(1979年1月号) ミカエル大王	27
消滅について(1979年2月号) ラファエル	31
最後の審判について(1979年5月号) イエス・キリスト	43
天意を仲介する者(1982年7月号) ラファエル	152
霊に対する正法者のあり方(1984年4月号) ミカエル大王	183
〔希望と愛と光〕	
天上界と正法のあり方(1982年2月号) ガブリエル	214

正法と正法者のあり方

慈悲と愛発刊にあたって(1978年11月号) ガブリエル	17
正法を学ぶ人の為に(1978年11月号) ミカエル大王	19
後継者について(1978年12月号) ミカエル大王	23
正法者の男女間の愛について(1979年3月号) ラファエル	34
業(カルマ)について(1979年3月号) ミカエル大王	37
慈悲と愛について(1979年6月号) ミカエル大王	46
思いやりと尊敬(1979年7月号) ミカエル大王	50
善我と偽我について(1979年7月号) ミカエル大王	56
メッセージで述べられる真理について(1979年11月号) ラファエル	73
真の天の法と偽の物(1979年12月号) ラファエル	78
正法者間の愛と親しみ(1980年9月号) ラファエル	113
後継者問題と正法(1980年10月号) ガブリエル、ミカエル大王	120
正法者の使命感について(1980年11月号) ガブリエル	123
善意の嘘と悪意の嘘(1980年12月号) ガブリエル	125
天上界の怒りについて(1981年5月号) ガブリエル	134
信じることにについて(1981年6月号) ラファエル	136
ユートピア建設について(1981年7月号) ガブリエル	138
理性について(1981年8月号) ガブリエル	140
己を知ることについて(1981年9月号) ラゲエル	141
奇跡について(1981年10月号) ミカエル大王	142
使命感について(1981年11月号) ガブリエル	143
正法者について(1982年1月号) ミカエル大王	144
柔軟な心について(1982年2月号) ラファエル	145
正法が科学であること(1982年3月号) ラファエル	146
判断の基準と宇宙の法則(1982年4月号) ラファエル	147
正法者と使命感(1982年5月号) ミカエル大王	148
正法者のあり方(1982年6月号) ガブリエル	150
暖かい心と冷たい心(1982年8月号) ラファエル	154
神を信じること(1982年9月号) ミカエル大王	156
正法者と幸運(1982年10月号) ガブリエル	158
轟淫するなかれ(1982年11月号) ミカエル大王	159
軽卒な正法者(1982年12月号) ウリエル	160

翻訳出版について

この本を読まれたかたで、説かれている理論に共鳴され、ぜひ外国の人にも紹介してみようと思われるかたは、しかるべき専門家に頼まれて、英語・フランス語・ドイツ語・デンマーク語・インド語など、どの国の言語にでも翻訳されて、ご自由に海外出版なさって下さい。

ただし著作権の問題などありますので、その旨、著者（または、ジェイアイ出版）までご連絡下さい。また、外国人のお友達で日本語を研究していただけるかたに、この本をどしどし紹介して頂いて結構です。

著者



☆ 21世紀の幕明け ☆
 科学時代人類に与えられた真理の書
 千乃裕子「天国シリーズ」・「セルメスシリーズ」!

天国シリーズ ベストアンドベストセラー
 神・靈魂・天国の存在を証明
天国の扉 1200円
 最後の審判と天使達のメッセージ
天国の証 1200円
 エクソシズムからアトランティスへ
天国の光の下に 1300円
 聖書創世記の奇蹟と解明
天国の奇蹟(上) 1000円
 謎多きモーセとアブラハム
 本書は鮮やかにそれを解く
天国の奇蹟(中) 1200円
 ☆新刊☆
 イエス・キリストの生涯と天国の奇蹟の
 真意を余すところなく証す!
天国の奇蹟(下) 1500円

セルメスシリーズ ベストセラー
 希望と愛と光をあなたに
天使の詩 (セルメス) 680円
 光に生きる人生をあなたに
エルフォイド (天使の冠) 780円
 光と光の世界をあなたに
天使の群 (エルバラム) 780円
 セルメスシリーズ第四弾!
続天使の群 (続エルバラム) 780円
 天使の世に破壊をもたらさない
エルロイ (天使の智慧) 880円
 天使は愛と善と智に満ちた
 人々のためにある
エルカロム (天使の角笛) 880円

英語版 THE DOOR TO HEAVEN「天国の扉」 2750円
 THE WITNESS OF THE KINGDOM OF HEAVEN「天国の証」 3280円
 UNDER THE LIGHT OF HEAVEN「天国の光の下に」 3280円 (ペーパーバック・1750円)
 ☆新刊☆SERMES(The Poems of The Angels)/天上界メッセージ集 (1200円)
 (ペーパーバック1750円) 天上界メッセージ集・続 (1200円)
 英訳版「天上界メッセージ集」THE MESSAGES FROM HEAVEN-GOD'S SACRIFICE
 韓国語版「天国の扉」1200円(近刊「天国の証」) 中国語版「天国の扉」1200円 「天国の証」1200円
 ☆これは宗教でもなく夢物語でもありません。現実的で合理的な智慧を教え、精神と人格の
 向上を計る啓蒙運動の書です。

(株)ジェイアイ出版 〒184 東京都小金井市中町4-14-7 武蔵小金井スカイハイツ202号
 電話 0423-83-3533
 HORKOM International Corp. Dept. 123, P. O. Box 339001 San Francisco, CA94133-9001 U.S.A.

現象 テーブ・リスト

No.1 欠番	No.26 良き人間関係について (ミカエル様) 質疑応答 S.55.8.10 現象 土田展子
No.2 欠番	No.27 正法流布について (ガブリエル様) 質疑応答 S.55.8.11 現象 土田展子
No.3 欠番	No.28 自己犠牲について (ミカエル様) S.55.9.14 現象 土田展子
No.4 正法基礎講座「ミカエル様の法話」 S.52.6.23 現象 土田展子	No.29 イエス様クリスマスメッセージ「愛と信仰」 S.55.12.21 現象 土田展子
No.5 正法基礎講座「明るい心、暗い心」 S.52.7.18 講師 千乃裕子	No.30 啓蒙運動としての現正法 S.56.4.12 講師 岩間文彌
No.6 正法基礎講座「高校生クラス」 S.52.8.1 講師 米本 明	No.31 天上界と質疑応答 (ガブリエル様) S.56.9.10 現象 土田展子
No.7 正法講座「『天国の扉』出版お祝いの言葉と共に」(ミカエル様・イエス様) S.52.12.1 現象 土田展子	No.32 物の見方について (ラファエル様) S.56.9.15 現象 土田展子
No.8 正法講座 (イエス様・ミカエル様) S.52.12.14 現象 土田展子	No.33 慈悲について (ガブリエル様) S.56.9.13 現象 土田展子
No.9 正法改正理論 S.53.3.21 解説 千乃裕子	No.34 霊について (ミカエル様) 霊能と天上界高次元の霊について (ラファエル様) S.56.10.18 現象 千乃裕子 土田展子
No.10 正法を学ぶ人のためにI「後継者について」 (ミカエル様) S.53.7.10 現象 千乃裕子 土田展子	No.35 クリスマス・メッセージ (イエス様 ラファエル様 ガブリエル様 ミカエル様) S.56.12.20 現象 土田展子 谷田三枝 金鋪漢
No.11 正法を学ぶ人のためにII(ミカエル様・イエス様) S.53.10.16 現象 千乃裕子	No.36 消滅について (ガブリエル様) S.56.12.27 現象 土田展子
No.12 正法を学ぶ人のためにIII(ミカエル様) S.54.2.1 現象 千乃裕子 メッセージ (ブツダ様) S.53.10.1 現象 土田展子	No.37 イエス様 ウリエル様 サリエル様 パズエル様 ラグエル様 メッセージ S.57.1.10 現象 土田展子 谷田三枝
No.13 心の働き S.54.3.17 講師 岩間文彌	No.38 ユートピアについて (ウリエル様) ガブリエル様 メッセージ S.57.1.17 現象 土田展子 谷田三枝
No.14 正法の歩みーギリシャ時代 S.54.6.3 講師 岩間文彌	No.39 進化の歩みをたどりて S.58.7.10 講師 岩間文彌
No.15 身体と霊体の成り立ち S.54.9.2 講師 岩間文彌	No.40 ガブリエル様 イエス様 メッセージ S.58.7.10 現象 谷田三枝
No.16 ミカエル様メッセージ ウリエル様正法講座 S.54.11.4 現象 土田展子	☆目の不自由な方に声の圖書を/ (心に語りかける朗読です。) 天国シリーズ①「天国の扉」全6巻 5,000円 ②「天国の証」全6巻 5,000円 ③「天国の光の下に」全9巻 5,000円(各巻送料共) セルメスシリーズ①セルメス(天使の詩) ②エルフォイド(天使の冠) ③エルバーラム (天使の群) ④続エルバーラム(天使の群) ⑤エルロイ(天使の智恵)---各巻3,000円・送料別
No.17 イエス様 クリスマス・メッセージ S.54.12.23 現象 土田展子	☆「天国の扉」「エルフォイド(天使の冠)」点字訳も完成 「天国の扉」定価5,000円(送料別) 「エルフォイド」定価5,500円(送料別)
No.18 「魂の研磨」について (ガブリエル様) S.55.2.10 現象 土田展子	☆朗読伴奏のみのコレクションテープ60分テープ2本を一セット(2,000円送料別)で販売致しております。 ・1巻各1,000円(送料共)で分売も致します。
No.19 「宗教と人間の関係」(ガブリエル様) S.55.3.9 現象 土田展子	
No.20 再び愛について (ミカエル様) S.55.4.6 現象 土田展子	
No.21 原罪とは (ラファエル様) S.55.4.13 現象 土田展子	
No.22 現正法と転生輪廻 S.55.5.4 講師 岩間文彌	
No.23 A.心の美は (ガブリエル様) S.55.5.11 現象 土田展子 B.「天上界よりの通信」1977年の約束(ミカエル様)GLA関西新年講演会(於東大阪市市民会館)より抜粋	
No.24 第1回慈悲と愛協会総会 (ミカエル様メッセージ) S.55.5.18 現象 土田展子	
No.25 天国語の語源について (ラファエル様) 質疑応答 S.55.6.29 現象 土田展子	
テープ価格は1本1,000円(送料は別、送料は切手で後払い可) 〒180 東京都武蔵野市吉祥寺南町1-27-1 吉祥寺バインクレスト305号 (株)ジェイアイ出版 現象テープ係まで TEL 0422-49-3310	